DAITAGARI SITE

大田苅遺跡

平成11・12年度県営圃場整備事業米沢地区に伴う
埋蔵文化財緊急発掘調査報告書

2001年3月

茅野市教育委員会

大田苅遺跡

平成11・12年度県営圃場整備事業米沢地区に伴う
埋蔵文化財緊急発掘調査報告書

2001年3月

茅野市教育委員会

序　　文

大田苅遺跡は、このたび、県営圃場整備事業米沢地区の実施に伴い、記録保存を前提に発掘調査を茅野市教育委員会が行いました。

本遺跡は平成6年に長野県教育委員会により分布調査が行われ、遺跡の存在が確認されました。平成10年度に試掘調査を行い、遺跡の内容が判明し、平成11年度に発掘調査をおこなうことになりました。米沢地区には古くから数多くの大きな遺跡が知られており、明治時代より地元の考古学者である田実文朗氏により遺物の採取が行われ、重要な遺跡が知られていました。特に平成10年に国史跡に指定されました駒形遺跡など、考古学研究に欠くことのできない重要な遺跡があります。大田苅遺跡は駒形遺跡の北方にあり、関連性が注目されます。近年ほ場整備事業が行われ、一ノ瀬遺跡や向林・大六殿・買地などの遺跡が発掘され、多くの成果が新しく発見されました。大田苅遺跡からは、縄文時代の住居址が13軒と土坑、平安時代の住居址5軒が発掘されました。縄文時代の遺構からは多量の黒耀石が検出され、まさに黒耀石集積地と言われる駒形遺跡の近くにある遺跡と言えます。

今回の発掘調査の成果が考古学、地方史研究に十分に活用され、また、今後の埋蔵文化財保護のために役立つことを切望します。

発掘調査にあたり、長野県教育委員会などの関係諸機関、地元地権者の皆様の深いご理解とご助力、また、発掘調査に関わった多くの皆様のご尽力により、調査を滞りなく、無事終了することができましたことに、心から御礼申し上げます。

平成13年３月

茅野市教育委員会
教育長　両角　源美

例　　言

1．本書は、11年度は長野県諏訪地方事務所長香坂守義、12年度は久保田勝士と茅野市長矢崎和広との間で締結した「埋蔵文化財包蔵地発掘調査委託契約書」に基づき、茅野市教育委員会文化財課が実施した平成11･12年度県営圃場整備事業米沢地区に伴う、長野県茅野市米沢大田苅遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2．発掘調査は、長野県諏訪地方事務所土地改良課よりの委託金と、文化財国庫補助並びに県費補助金を得て、茅野市教育委員会が平成11年度に実施した。調査の組織等の名簿は第Ⅰ章第２節４として記載してある。

3．発掘調査は平成11年度は6月22日から10月15日まで、出土品の整理及び報告書の作成は発掘終了後から始め、平成13年3月まで茅野市教育委員会文化財課において行った。

4．発掘調査から本書作成までの作業分担は第Ⅰ章第２節４に記してある。また、執筆は柳川が行った。

5．調査区の基準点は国家座標基準点による。遺構全体図の数値は平面直角座標系第Ⅷ系による。また、遺構図面上に表されている北は座標北を示す。

6．本報告書に掲載している図版の縮尺は、特に記述がない限り、遺構は1/60、遺物は1/3である。また、写真図版の石器の写真については、縮尺不同である。

7．土層に色調については『新版標準土色帳』の表示に基づいて示した。

8．本報告に係わる出土品・諸記録は茅野市教育委員会文化財課で収蔵・保管している。

凡　　例

本書の図で用いたスクリーントーンや記号の意味は下記のとおりである。

遺構図

- 焼土
- 焼土散布範囲
- 堅緻な面
- ● 土師器坏
- ▲ 須恵器坏
- ■ 土師器甕
- ＊ 金属製品

遺物図

- 土師器
- 黒色土器（土器内部）
- 須恵器
- 灰釉陶器（断面）

目　　次

序　　文　　茅野市教育委員会教育長　両角源美
例言・凡例
第Ⅰ章　発掘調査の概要 …… 1
第１節　発掘調査の経過 …… 1
１．発掘調査の事務経過 …… 1
２．調査区の設定 …… 2
３．発掘調査の経過 …… 2
４．調査日誌（抄） …… 2
５．調査組織 …… 4
第Ⅱ章 遺跡の概要 …… 5
第１章 遺跡の概観 …… 5
１．遺跡の立地と地理的環境 …… 5
２．遺跡の研究史 …… 5
第Ⅲ章　発掘された遺構と遺物 …… 11
第１節　縄文時代の遺構と遺物 …… 11
１．竪穴住居址 …… 11
２．土坑 …… 35
３．集石 …… 37
第２節　平安時代の遺構と遺物 …… 50
１．竪穴住居址 …… 50
２．土坑 …… 58
第Ⅳ章　結語 …… 59
図版
抄録

第Ⅰ章　発掘調査の概要

第1節　発掘調査の経過

1．発掘調査の事務経過

文化財補助金申請書及び諏訪地方事務所との契約行為については下記の通りに行った。

・平成11年度

平成11年 4月 7日　11教文第1号　平成11年度文化財関係国庫補助事業(埋蔵文化財関係)について（通知）

平成11年 4月 7日　11教文第2号　平成11年度文化財保護事業（埋蔵文化財関係）の内示について（通知）

平成11年 4月14日　11教文第7-1-1号「平成11年度のほ場整備事業に係る茅野市内の埋蔵文化財の保護について(通知)」が長野県教育委員会教育長から茅野市教育委員会教育長宛で通知され、事業費24,358,000円(農政側負担額　21,435,000円　財保護側負担　2,923,000円)で大田苅遺跡の発掘調査を行うことになった。

平成11年 4月15日　11教文6-7「平成11年度県営補助整備事業米沢地区埋蔵文化財発掘調査業務委託契約」を長野県諏訪地方事務所長　香坂守義と締結。

平成11年 6月 8日　11教文第6-1号　平成11年度国宝重要文化財等保存整備費補助金交付申請書提出

平成11年 6月 8日　11教文6-2号　平成11年度文化財保護事業補助金交付申請書

平成11年11月24日　11教文80-1　平成11年度国宝重要文化財等保存整備費補助金計画変更承認申請書提出

平成11年11月24日　11教文80-2　平成11年度文化財保護事業計画変更承認申請書提出
これにより大田苅遺跡分の総事業額を19,500,000(農政負担額 17,160,000円・文化財保護負担額 2,340,000円）に変更申請。

・平成12年度

平成12年 3月21日　11教文第7-1-1号　「平成12年度のほ場整備事業に係る茅野市内の埋蔵文化財の保護について(通知)」が長野県教育委員会教育長から茅野市教育委員会教育長宛で通知され、事業費1,071,000円(農政側負担942,000円・文化財保護側129,000円）で大田苅遺跡の発掘調査報告書を作成することになった。

平成12年 4月14日　12教文第6-1号　平成12年度国宝重要文化財等保存整備費補助金交付申請書提出

平成12年 4月17日　12教文第8-4号「県営ほ場整備事業米沢地区の埋蔵文化財発掘調査業務委託契約」を長野県諏訪地方事務所長　久保田勝士と締結する。

平成12年 5月31日　12教文第6-2号　平成12年度文化財保護事業補助金申請書提出

2．調査区の設定

平成6年6月に長野県教育委員会が分布調査を行い、未周知であった大田苅遺跡の存在が確認された。これにより、遺跡の保護措置を講ずる必要性が出てきたため、記録保存を行うため発掘調査を行うことになった。

発掘調査を行うにあたり、遺跡規模の把握を行う必要から、平成10年3月17日から3月25日にかけて、茅野市教育委員会文化財課で試掘調査を行った。この試掘調査により縄文時代前期末･中期中葉･平安時代の住居址が確認された。また、表土剥ぎ時に、前年度試掘を行えなかった場所にトレンチを設定し、遺跡の範囲を確認した。発掘を調査を行った部分は、工事で削平される場所を主体としており、その他の場所は工事で埋土が行われ、保存されることになった。調査を行った場所は5,200㎡である。

グリッドについては、調査範囲内に設定し、遺跡の記録、遺物の取り上げの基準とした。グリッドの基準は、公共座標x=4253.678、y=-27874.233を基準点とし、この基準点から一辺5mのグリッドを設定した。ベンチマークは920.563mである。

3．発掘調査の経過

・平成11年度

遺構確認及び表土剥ぎを6月22日より開始し、発掘調査を終了したのは10月15日であった。遺跡内は場所により土層が異なっているうえに、大量の礫が伴っていたため、遺構確認は非常に困難を極めた。遺構確認を一通り行っただけでは遺構を把握することはできず、土坑発掘中に別の土坑が発見されるケースがかなりあった。発掘の測量は、空中写真測量の他に、日常的な測量方法としてやり方や平板測量を状況に応じて行った。発掘の諸記録については、柳川英司・武居八千代・田中達朗・野沢みさ子・樋口美智代・若林洋平が行った。10月5日に空中写真測量をヘリコプターによって行う。業者は株式会社東京航業研究所であった。空中写真測量後、掘り落とした遺構の存在を確認し、これらの遺構の発掘終了後に圃場工事の担当者に現場を引き渡した。

・平成12年度

報告書作成を行う。報告書の作成分担は以下のとおりである。

図面整理　武居八千代・田中達朗・柳川英司　土器拓本　武居八千代・田中達朗・野沢みさ子
土器実測　武居八千代・小池岳史（第46図12・トレースとも）・柳川英司
写真整理及び写真図版レイアウト　田中達朗・柳川英司　遺構・遺物トレース　柳川英司
図版作成　武居八千代・野沢みさ子・柳川英司　編集・本文執筆　柳川英司

4．調査日誌（抄）

・11年度

6 月22日　表土剥ぎを始める。東の方向から西へ向かって昨年度試掘調査を行っていないところにトレンチを入れる。一番東側の荒れ畑では押型文が採取されたが、遺構を見つけることはできなかった。この荒れ畑の西側2枚の田からは全く遺構を発見することはできなかった。覆土中に少量の遺物を見出すことはできたが、遺構があると考えられる程の量ではない。更にその西側の畑からは住居址と土坑と思われるものが１軒と３基確認できた。遺構は散発的に出土するものと思われる。

6 月28日　表土剥ぎ。西斜面の畑にトレンチを入れたところ、縄文時代前期終末の遺物が多く見られ、褐色土中に土坑らしきものの平面形を見出すことができた。また、東側の道沿いの低くなっているところの全面表土剥ぎを行う。住居址らしい痕跡が川沿いを中心に検出された。

6 月29日　表土剥ぎ。昨日確認した西斜面の畑を広げる。褐色土中に縄文前期終末から中期初頭の土坑及び住居址らしきものが数十基検出される。遺跡の中央の平安時代の住居址付近に時期不明の円形平面形の住居址が検出された。

7 月 1 日　表土剥ぎ。西側の斜面の発掘を始める。

7 月 6 日　表土剥ぎ。5・6・7・23土などは長楕円形の土坑になり、いずれもある一定の深さであり、礫・黒耀石・土器片を検出している。5号土坑などは持ち込まれたと思われるほどの礫が入っている。6号土坑からは凹石があることが確認された。

7 月16日　1·2号住居址の発掘調査を行う。2住は規模が大きく、焼土が覆土中に多く出土する。

7 月26日　住居址の調査。1住は平面形が明らかではなく困惑している。2住は焼土面まで掘り下げ、写真撮影と平面図の作成を行う。3住の発掘を始める。

7 月29日　長野県遺跡調査指導委員会の視察があり県文化課職員並びに指導委員の先生方が本遺跡を視察する。

8 月10日　3住のカマド部を切るようにして黒耀石の集石土坑が確認されるが、土坑の平面形は不明。5住の西側からほとんど完形の土器が出土。

8 月20日　夕方、米沢小学校の教師2名と八ヶ岳総合博物館の遊学教室について現地で打ち合わせる。

8 月25日　八ヶ岳総合博物館の遊学教室で、米沢小学校の体験発掘を行う。

8 月26日　6住の発掘を行う。上層の確認面にちかいところから鉸具が出土する。またカマド周辺より紡錘車が出土した。

8 月27日　1住の発掘が終了する。6住の写真撮影。紡錘車と鉄片を取り上げる。

8 月31日　北東側の道北の部分から遺物がかなり出土しており、何らかの遺構と思われる。7住の遺物を取り上げる。

9 月 1 日　7住の上層を削っていると、ほぼ完形の前期終末の土器が出土する。8住の発掘を始める。

9 月 8 日　9住の南側より住居址が確認された。

9 月 9 日　10住の南側より住居址が発見された。かなりの傾斜を掘り込んであり、掘り方は深い。

9 月14日　9住の南から住居址出土。

9 月29日　12住中央より集石を確認する。

10月 4 日　明日の空中写真測量のため、清掃を行う。東京航業研究所の職員2名が事前準備のため来跡。

10月 5 日　空中写真測量を行う。

10月 6 日　12住の南側より完形の灰釉陶器と土師器の破片が出土する。

10月 8 日　12住の南より焼土が広範囲にわたって出土するので、平安時代の焼失住居址と考えられる。

10月12日　基本層序の図面の作成をしていたところ2住の北側で焼土を発見し、拡張すると平安時代の住居址となる。これを17住とする。

10月13日　17住などの発掘。撤収作業を始める。

10月14日　撤収作業。17住の発掘調査。

10月15日　17住の発掘を終える。17住は厚く焼土があることが判明した。圃場工事の業者に現場を引き渡し、発掘を終了する。

５．調査組織

・平成11･12年度

調査主体者　両角源美（教育長）

事務局　　宮坂泰文（教育次長）

文化財課　矢嶋秀一（課長）　鵜飼幸雄（係長）　守矢昌文　小林深志　大谷勝己　小池岳史　功刀　司　百瀬一郎　小林健治　柳川英司　大月三千代

調査担当者　柳川英司

調査補助員　武居八千代　太田友子

発掘調査・整理作業協力者

牛山才司　内田友一　河西保明　河西泰人　金子清春　北沢もと　北原きよゑ　栗原　昇　小池泰幸　小平長茂　小平　寛　小平美智子　小平義市　小林智子　小松　要　田中達朗　田實雅子　長田　真　野澤みさ子　花岡照友　樋口美智代　樋口　豊　日達英子　北條嘉久男　前嶋克夫　増木三訓　三輪辰秋　矢島伸洋　柳沢九五子　柳沢　宏　柳平年子　山崎裕子　吉田勝太郎　吉田キヨ子　吉田フサ子　吉田　実　吉田幸男　若林洋平　渡辺郁夫

基準点測量：入原測量有限会社

遺構測量委託：株式会社　東京航業研究所

発掘調査期間中、遺物整理期間中、諏訪地方事務土地改良課所ならびに。米沢地区圃場整備委員会を始め地権者の方々にご助力をいただき、調査を円滑に進めることができた。謝意を表し記したい。長野県教育委員会文化財・生涯学習課指導主事原明芳氏をはじめ、下記の方々より有益なご指導・ご助言をいただいた。記して感謝を申し上げたい。

戸沢充則　長峯光一　宮坂光昭　武藤雄六　桐原　健　樋口昇一　会田　進　高見俊樹　三上徹也　宮坂　清　小坂英文　五味裕史　青木正洋　田中　総　田中慎太郎　小林光男

第Ⅱ章　遺跡の概要

第1節　遺跡の外観

1．遺跡の立地と地理的環境

大田苅遺跡(310)は茅野市米沢北大塩5303番地他に位置する。この場所は茅野駅から約5.8kmに位置している。本遺跡は北大塩北側の霧ヶ峰南麓にある。遺跡の東側には桧沢川が流れている。この川を挟んで大六殿遺跡･駒形遺跡と対峙している。

本遺跡は霧ヶ峰南麓に位置しているが、桧沢川からみると比高差があり、北側にある丸山から絶えず崩落を繰り返して供給された土砂によって形成された小規模な台地と考えられる。遺構の確認面は、八ヶ岳山麓とは異なりロームではなくほとんど黒色土であるため、遺構確認は困難を極めた。この黒色土中には、多くの礫が入っており、何条もの礫が通ったと思われる礫の筋が確認されている。これらの礫はすべて安山岩で構成されている。発掘を行う前にやや高い面があったが、ここでは確認面がロームであり、縄文時代以前にはかなり複雑な地形であったことが考えられる。このような小高い場所の間に谷間が形成されていたようだが、後背の山からの土砂の供給により次第に谷が埋没し、平坦地になった後に縄文時代の遺跡が作られたと考えられる。

遺跡の西側は緩やかに下がっており、いずれも山裾部は桧沢川に浸食されている。桧沢川は霧ヶ峰の池のくるみを水源としている。米沢地区には大清水という水量豊富な霧ヶ峰を水源とする清水が湧いており、茅野市の他地域に較べてかなり水量が豊かな場所である。発掘中に何度も雨に見舞われたが、遺跡のやや低い場所は、いつも水没してしまい、2･3日間は土坑内より水が湧いており、なかなかひかないほどであった。

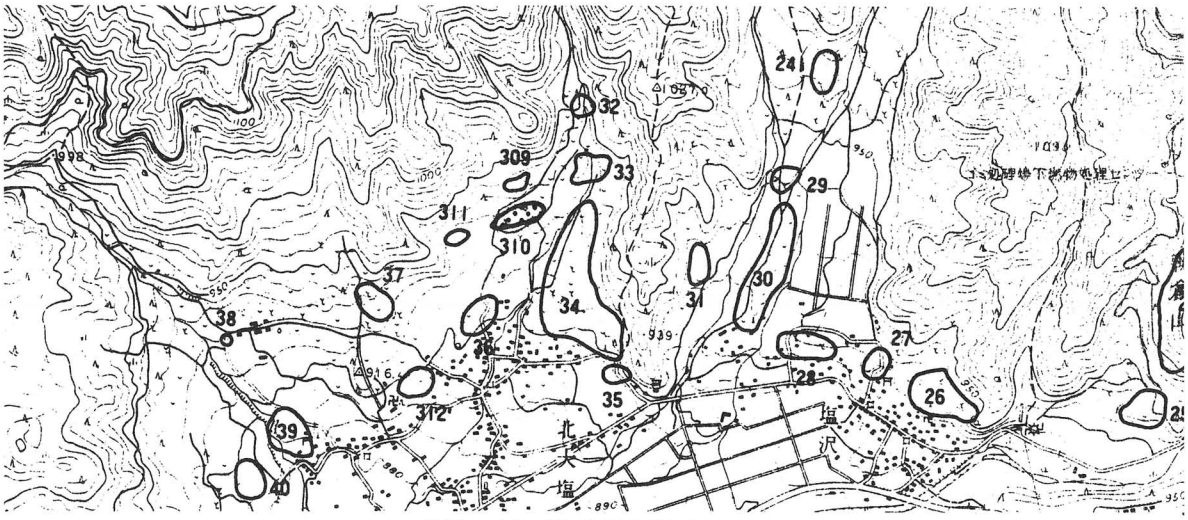
2．遺跡の研究史

大田苅遺跡の研究史　大田苅遺跡(310)は平成6年6月に長野県教育委員会によって行われた遺跡詳細分布調査によって確認された遺跡である。しかし、大正13年(1924)刊行の鳥居龍蔵著『諏訪史』第一巻の「諏訪郡先史時代遺物発見地名表」には「大田刈」が記載されており、さらにこの本を踏襲されて作成されたと思われる宮坂英弐著『原住民族の遺蹟－八ヶ岳山麓尖石遺蹟研究』(1948)にも取り上げられている。しかし、この後編纂された『信濃史料』第1巻上(1956)や、『茅野市史』上巻(1986)・『茅野市遺跡台帳』(1991)には記載されていない、忘れ去られた遺跡となっていた。前述の『諏訪史』第一巻には本遺跡から石斧が、また、『原住民族の遺蹟』には石鏃が採取されたとの記載がある。また、『諏訪史』第一巻の遺物所蔵者は田実文朗になっている。

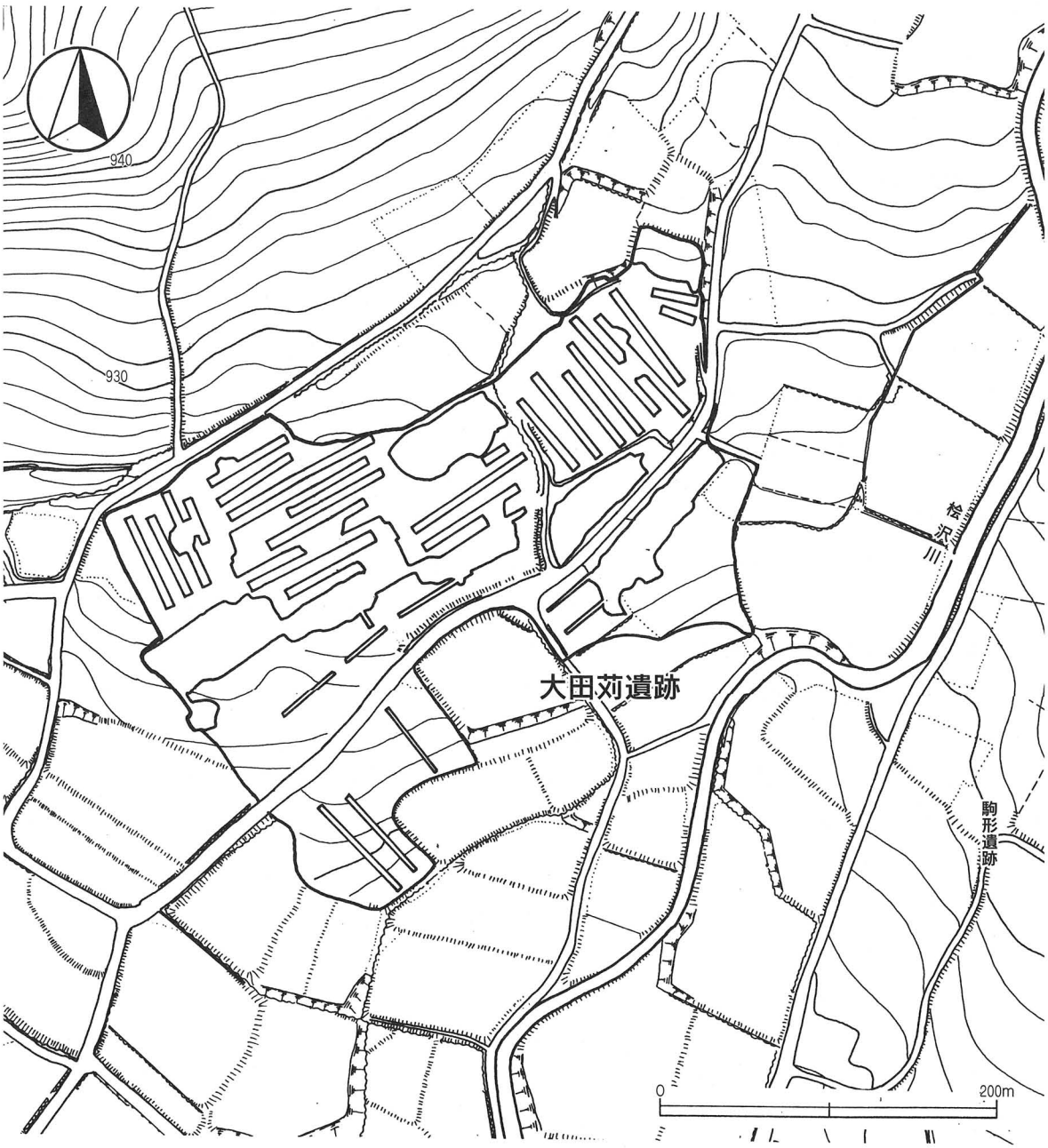
北大塩財産区所蔵の明治20年4月作成の「北大塩地盤字名記載帳」によると、字名が「大田苅」と表記されているが、ふりがなは「ヲゝタカイ」となっているため、本来は「だいたがり」の名称ではなかったか、または別称として存在していたかと思われる。

周辺の遺跡　米沢地区は、古くから駒形遺跡や一ノ瀬・芝の木遺跡といった大規模な遺跡が知られており、田実文朗などによって表面採取が行われ、その後数回、宮坂英弐を中心として発掘調査が行われている。

一ノ瀬(30)・芝の木遺跡(29)　一ノ瀬・芝の木遺跡は、駒形遺跡とは霧ヶ峰山麓から伸びる尾根一つ隔てて東側に位置している。地元では古くから石鏃採集地として知られ、田実文朗も頻繁に採取したと思われる。



第1図　大田苅遺跡位置図(1/25,000)



第2図　地理的位置(1/2,000)

『諏訪史』第一巻によると、「芝ノ木ハ一名『一ノ瀬』トモ云フ」とあり、一ノ瀬と芝の木は同一遺跡と見られる。同書には、遺物の所在が田実文朗・諏訪中学校・北大塩帯川良平・折井傳之丞とあり、出土遺物は磨石斧・打石斧・石棒・叩石・石小刀・石錘・石鏃・石匙・石皿・土器・石ノミ・厚手式土器と多彩である。その後、昭和40年に双口土器が発見され、武藤雄六氏が『信濃』Ⅲ第17巻第8号に「長野県茅野市北大塩一本木発見の双口土器」として発表した。その後県営圃場整備事業に伴い平成8・9年度に約20,000㎡が発掘された。縄文早期前半から晩期初頭の住居址98軒・方形柱穴列22基・石棺墓44基・土坑773基・平安時代の住居址15軒・近世の掘立柱建物址1軒が検出され、駒形遺跡に匹敵する継続型の拠点集落であることが明らかとなった。特に黒耀石の出土量が非常に多く、駒形遺跡とともに黒耀石製品の製作遺跡と考えられる。

大六殿上遺跡(32)　桧沢川の浸食による渓谷内に位置する小規模な遺跡。平成３年作成の『茅野市遺跡台帳』によると、平安時代の土師器片の記載がある。

大六殿遺跡(33)　平成11年度に県営圃場整備事業で6,500㎡発掘された。大田苅遺跡からは桧沢川をはさんで東岸に立地する。この遺跡の本来の字名は「夏明」で、『諏訪史』第一巻や『原住民族の遺蹟』などに「夏明」の名が見えるため、非常に古くから知られていた遺跡であることがわかる。しかし、その後に刊行された『信濃史料』第1巻上には「大六殿」という遺跡名になっており、加曽利Ｅ式の土器が出土していたようだ。『諏訪史』第一巻での遺物所蔵者は田実文朗である。発掘によって確認された遺構は竪穴住居址が縄文時代早期前半1軒・前期終末4軒・後期前半3軒、平安時代2軒、縄文時代の土坑約150基である。ほぼ大田苅遺跡と遺構の時期が同じであるため、桧沢川を挟んで同時に存在していたことが考えられ、注目される遺跡である。

駒形遺跡(34)　大田苅遺跡の桧沢川をはさんで南東側に位置する遺跡で、古くから知られている大規模な遺跡である。明治時代より地元北大塩の医師、田実文朗による表面採取が行われ、石鏃の多く拾える遺跡として有名であった。最初の発掘調査は、昭和36年に宮坂英弐指導のもと諏訪実業高校地歴部によって行われ、縄文前期初頭の住居址１軒と中期後半の住居址1軒、後期の配石遺構や土坑が発見されている。昭和41年に再び諏訪実業高校地歴部によって発掘が行われ、縄文中期後半の住居址２軒が検出されている。平成6年と8年には長野県教育委員会によって遺跡詳細分布調査による試掘調査が行われ、トレンチ調査により23軒の住居址が確認されており、前期初頭６軒、中期後半曽利Ⅱ式期６軒、曽利Ⅱ式期～Ⅴ式期４軒で、中期後半の集落が中心になると思われる。また、平成12年度には県営圃場整備事業に伴う発掘調査により桧沢川沿いの遺跡の西側約450㎡の調査が行われた。この調査により、縄文時代後期の住居址2軒以上が検出され、駒形遺跡の低くなっている桧沢川縁の部分に後期の集落が展開していることが判明した。前述の通り、昔から石鏃が多く拾える遺跡として有名であり、平成6年の詳細分布調査でも非常に多くの黒耀石片が採取された。平成10年1月16日付で、霧ヶ峰方面からの黒耀石の集石、製作、搬出に関与していた集落跡と推定され、当時の石器製作技術や交易の実態を知る上で貴重な遺跡として国史跡に認定された。

大清水遺跡(35)　駒形遺跡の南側の山麓と沖積地の接点に位置し、現在でも豊富な湧水で知られる「大清水」がある。平成3年作成の『茅野市遺跡台帳』に初めて大清水遺跡は登録遺跡となった。この登録したときには縄文中期土器片と土板、黒耀石片が検出したとある。

上ノ山遺跡(36)　大田苅遺跡の南側に位置し、山裾の最末端に立地する。『諏訪史』第一巻などに「上ノ山及大桜」という遺跡名が見られるが、大桜遺跡と併記されているところから異なる遺跡と思われ、『茅野市史』上巻では、現在の位置で記載されている。『信濃史料』第一巻　上は、加曽利Ｅ式土器や土製玉、石鏃、磨石斧、石匙、石錐、石皿、石棒、石小刀が採取されたとある。発掘調査が行われていないため、遺跡の内容は不明である。

向林遺跡(37)　大田苅遺跡西方の霧ヶ峰山麓から伸びる高い尾根状台地に位置する。向林遺跡は『諏訪史』第一巻や『原住民族の遺蹟』には見えず、『信濃史料』第一巻上と、『茅野市史』上巻に加曽利E式の土器が出土する遺跡として見える。平成10年度に県営圃場整備事業で5,000㎡発掘された。大田苅遺跡の南西側に位置し、標高は929mで、霧ヶ峰から伸びる丘陵上に立地している。確認された住居址数は縄文時代早期前半10軒・前期末葉1軒・平安時代の住居址2軒・縄文時代早期及び前期終末の土坑58基である。

大桜遺跡(39)　横河川の形成した扇状地の中央台地上に位置する。この遺跡も駒形遺跡同様、古くから遺物の多く採取された遺跡で、田実文朗がかなり表面採取を行ったと思われる。『諏訪史』第一巻には「上ノ山及び大桜」とあり、『茅野市字名地図』によると大桜に隣接するように「上山」という地名があるところから、現在の上の山遺跡とは異なると考えられる。田実文朗の採集資料は「石皿・玉・土玉・石錐・土製メンコ・土器・石棒・磨石斧・石鏃・石匙・石小刀」と非常に多彩である。『茅野市史』上巻には前期終末・中期中葉から末葉の土器が出土しているとある。また、昭和35年頃試掘調査を行ったが、遺構の発見はなされなかったという。その後平成11・12年度に県営圃場整備事業により遺跡の一部が発掘された。縄文時代の住居址34軒・土坑約2,000基・平安時代の住居址6軒が検出されている。縄文時代の住居址は中期後半が主体となっている。遺跡の一部を発掘しただけで、かなりの数の遺構が検出され、『茅野市史』上巻には「横河川扇状地に立地するもののうち最大の規模をもつ」とあるのもうなずける遺跡である。

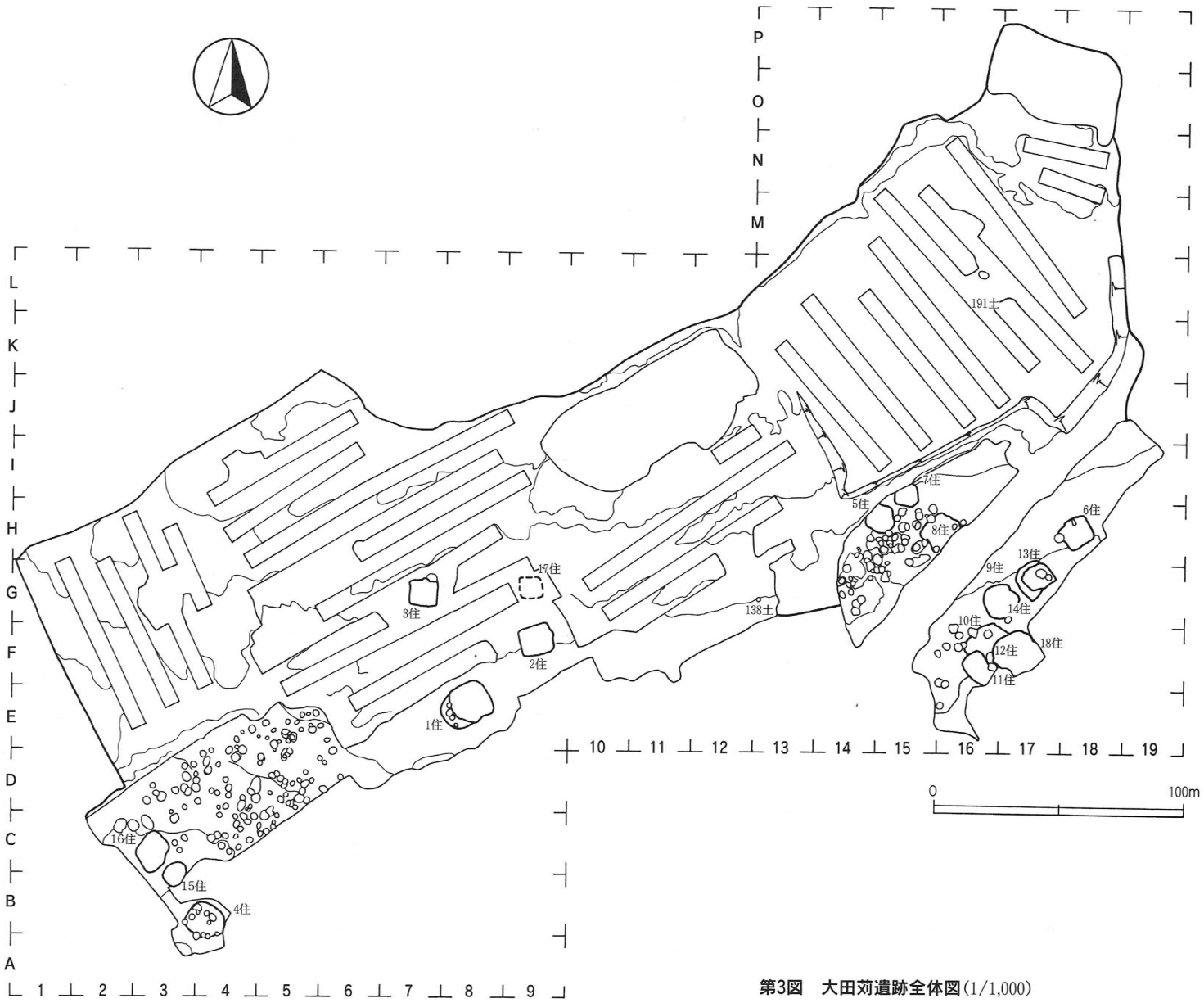
八幡坂遺跡(40)　霧ヶ峰山麓山裾のテラス状台地に立地している遺跡で、台地の先端部に位置している。平成9年度に県営圃場整備事業に伴って3,500㎡が発掘された。検出された遺構は縄文時代の住居址22軒と土坑236基が検出された。住居址は前期末葉から中期初頭・中期後半から後期前半が主体となる。他に中世の方形竪穴16基・地下式坑13基・土坑55基・建物址数基が検出されている。

菖蒲沢遺跡(309)　大田苅遺跡北側の山裾に位置する遺跡。菖蒲沢遺跡は『諏訪史』第一巻と『原住民族の遺蹟』に磨石斧と石鏃を出土する遺跡として知られていた。これも、『諏訪史』から考えると、田実文朗発見の遺跡と思われる。平成６年の分布調査では縄文前期中葉の土器片や黒耀石剥片、打製石斧、平安時代の灰釉陶器片が採取できた。平成９年に県営圃場整備事業の事業地内に当たっているため試掘調査を行ったところ、遺構は確認できず、遺物散布地であったことが判明している。

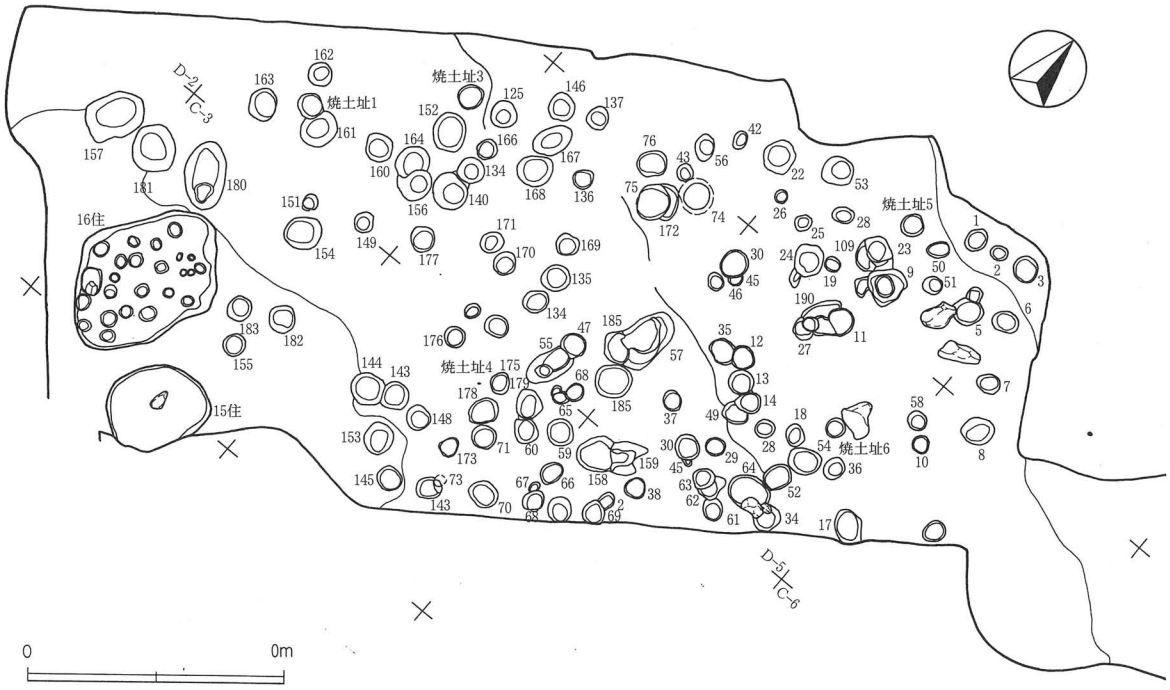
出ノ脇遺跡(311)　大田苅遺跡西側の山裾に位置する遺跡。平成６年の詳細分布調査によって黒耀石の散布地として遺跡となった。発掘調査が行われていないため、遺跡の内容は不明である。

買地遺跡(312)　大田苅遺跡の南西の山麓の裾野と沖積地が接する場所に遺跡がある。買地遺跡は『諏訪史』第一巻や『原住民族の遺蹟』に見られ、土器・凹石・土器・石鏃・磨石斧が出土する遺跡として知られていた。平成11年度に県営圃場整備事業により939㎡発掘された。確認された住居址数は縄文時代早期末葉の住居址５軒、中期初頭の住居址１軒、時期不明の土坑５基が検出されている。

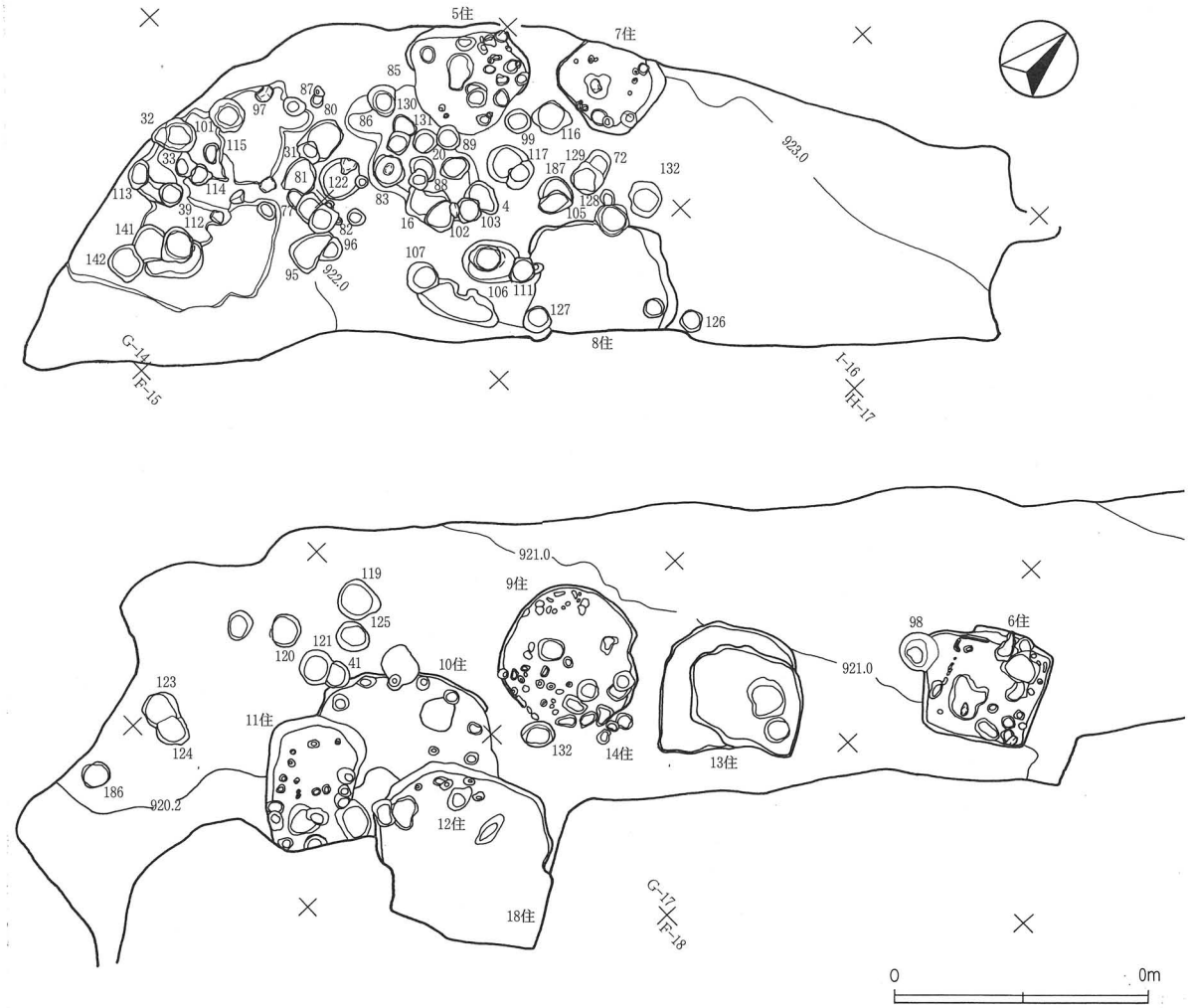
牛ノ児遺跡(241)　一ノ瀬・芝の木遺跡の北方に位置し、駒形遺跡とは霧ヶ峰山麓の尾根で区切られた場所に位置する遺跡である。『諏訪史』第一巻や『原住民族の遺蹟』によると、田実文朗によって発見された遺跡で、「牛兒」で表記されている。出土遺物は、土錘・石鏃・磨石鏃とある。この遺跡は平成10年5月に圃場整備事業に伴い発掘されたが、縄文中期初頭の土器片1片と、黒耀石製石器数点と平安時代の遺物が若干検出されたが、遺構等は発見されなかった。



第3図　大田苅遺跡全体図(1/1,000)



第4図　遺構図配置図(1) (1/300)



第5図　遺構図配置図(2) (1/300)

第Ⅲ章　発掘された遺跡と遺物

第1節　縄文時代の遺構と遺物

今回発掘された縄文時代の遺構は前期終末の住居址9軒と、中期中葉の住居址2軒、後期の住居址1軒である。土坑は182基検出され、土坑の大半からは前期終末から中期初頭の遺物が検出されることから、この時期に属する遺構と考えられる。前期終末の住居址は遺跡全体に亘って検出されているが、中期中葉と後期は、遺跡の低いところから集中して検出され、遺跡は南側の桧沢川沿いまで伸びていることが考えられる。土坑は調査区の東側と西側に集中的に検出されたが、調査区の中央部からは散発的に発見されただけであった。

1．竪穴住居址

第１号住居址（第6・7図・図版2-5・6・12-1）

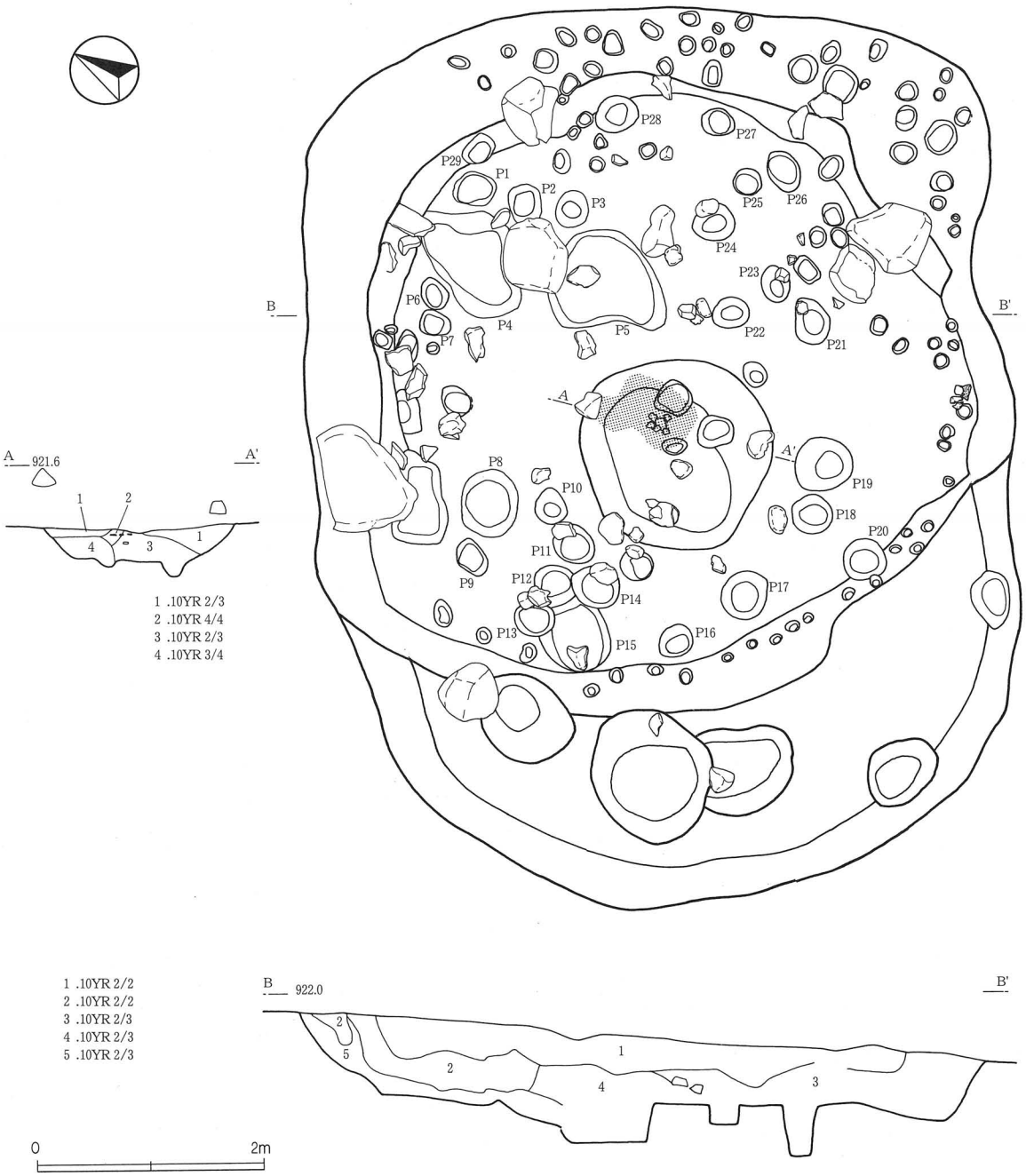
検出状況　調査区のほぼ中央部の小高い場所にあり、グリッドE·F－7·8に位置する。周辺には調査区西の土坑群と、平安時代の住居址である2・3・17号住居址がある。住居址周辺の土は黒褐色土であり、住居址の平面形を確定するのが困難であった。そのため、住居西南側の壁の立ち上がりがわからずに掘りすぎてしまった。掘りすぎたところ土坑が５基検出された。住居址は西南側が不正形ではあるがほぼ正方形の平面形を持ち、長軸6.38㎝、短軸6.20m、長軸方向はN－58°－Eを示す。住居址内には礫が多く入り込んでおり、地山の中に１m以上ある巨大な岩が地面から突出している。

遺構の構造　前述の通り南西壁は捉えきれずに掘りすぎてしまったが、他は比較的良好に壁を検出した。北西壁は70㎝、南東壁は20㎝の高さである。北西から南西へ傾斜しているので、南東壁の遺存状況は良好ではなかった。また、明確に周溝は検出できなかった。

住居址内から土坑は30基検出されたが、北東壁と南西壁からは多くの小さな穴が確認されたが、住居址の上屋構造に伴うものか、植物による攪乱によるものかはよくわからなかった。しかし、あまり深くないところから上屋構造にともなうと思われる。柱穴と考えられる土坑は、P1～P3・P6～P14・P16～P30であるが、主柱穴はよくわからない。柱穴の深さはP1 14㎝、P3 46㎝、P6 13㎝、P7 16㎝、P8 15㎝、P9 28㎝、P10 10㎝、P11 16㎝、P12 13㎝、P13 44㎝、P14 48㎝、P16 15㎝、P17 54㎝、P18 35㎝、P19 41㎝、P20 36㎝、P21 44㎝、P22 17㎝、P24 16㎝、P25 7㎝、P26 15㎝、P27 13㎝、P28 40㎝、P29 6㎝、P30 13㎝、である。柱穴のほかに不正形なP4・P5・P15がある。P4とP5の間には70㎝大の上面が平らな石が置かれていた。

住居址のほぼ中央部から焼土が検出され、炉址と考えられる。焼土は10㎝ほどの厚みをもっており、かなり堅く焼き締まっていた。焼土の上面からは比較的まとまって土器片が出土している。炉の下には土坑があり、168㎝四方の規模を持ち、上面平面形は不正形である。この土坑の床面はかなり荒れていて、深さも24㎝と比較的浅い。

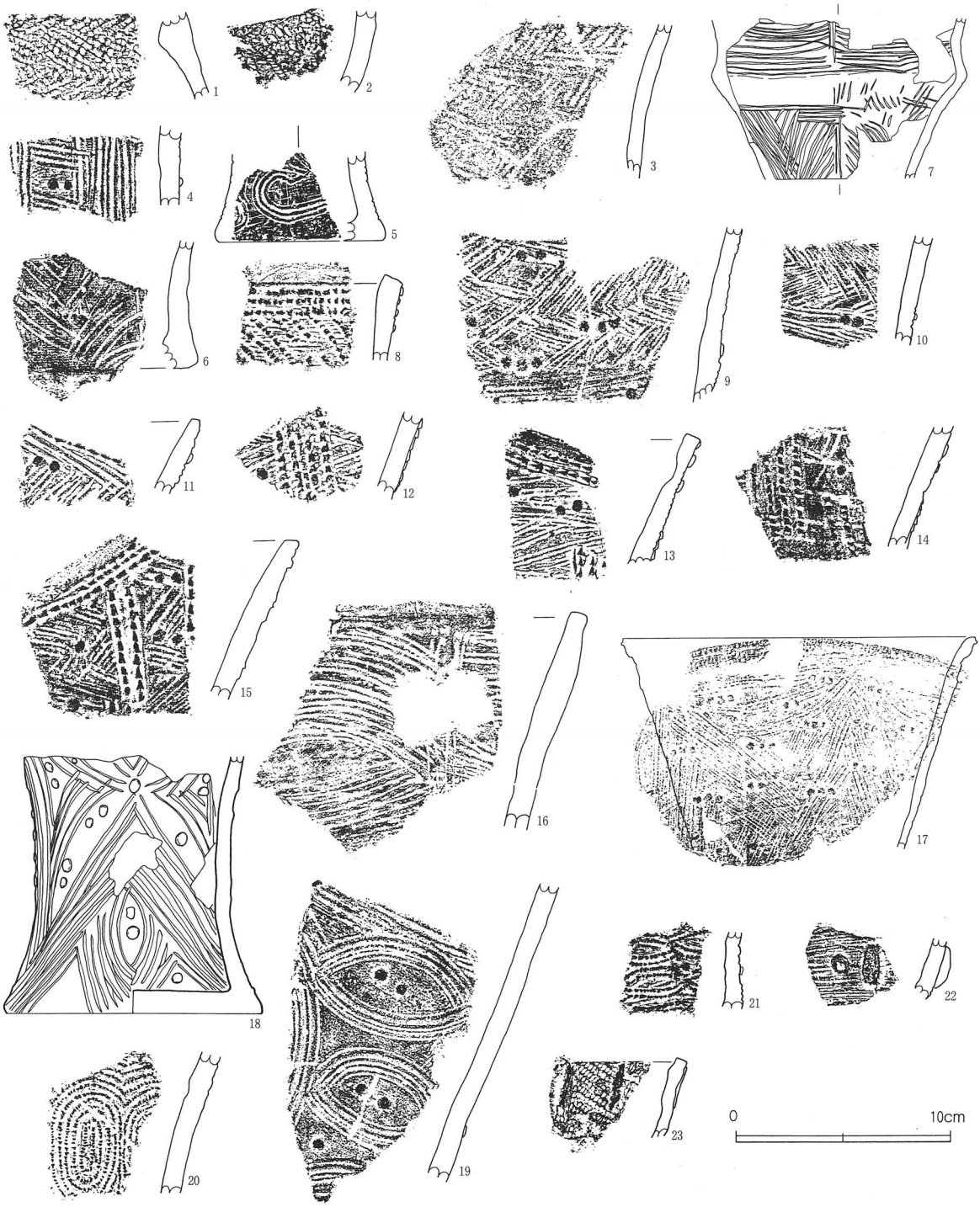
遺物の出土状況　遺物は多く出土しており、住居覆土上面から床面まで出土している。1号住居址の土器の図は全て第7図に記載している。土器は、総出土量4,395gが出土し、うち、地文が平行沈線文の土器が3,895gで最も多く、縄文が360g（1～3）、無文が80gと大部分が平行沈線文の土器で占められている。平行沈線文土器のうち、矢羽状が1,790g、平行沈線が1,005gがほとんどである。矢羽状の土器のうち、ボタン状突起の付くもの（9・10）、更に結節浮線文を縦位置に配するもの（12・14・15）がある。また、かな



第6図　第1号住居址

り大きな破片で目立つのは、レンズ状の沈線文の土器で、17から19のようにボタン状突起を2つから3つ添付するものがある。石器については、黒耀石片1,252g・黒耀石製石鏃4・石鏃未製品1・黒耀石製石錐1・打製石斧1・打製石斧欠損品1・打製石斧剥片5・横刃形石器1・凹石2、住居址の北隅より2点の蛇紋岩製と思われる小型の磨製石斧が出土している。石器の中で打製石斧が出土しているが、ほとんどが剥片である。大きさのわかるもので完形品が長さ8.5㎝・巾が5.5㎝、欠損品で8.6㎝・巾4.5㎝である。

遺構の時期　出土遺物から縄文時代前期終末と考えられる。

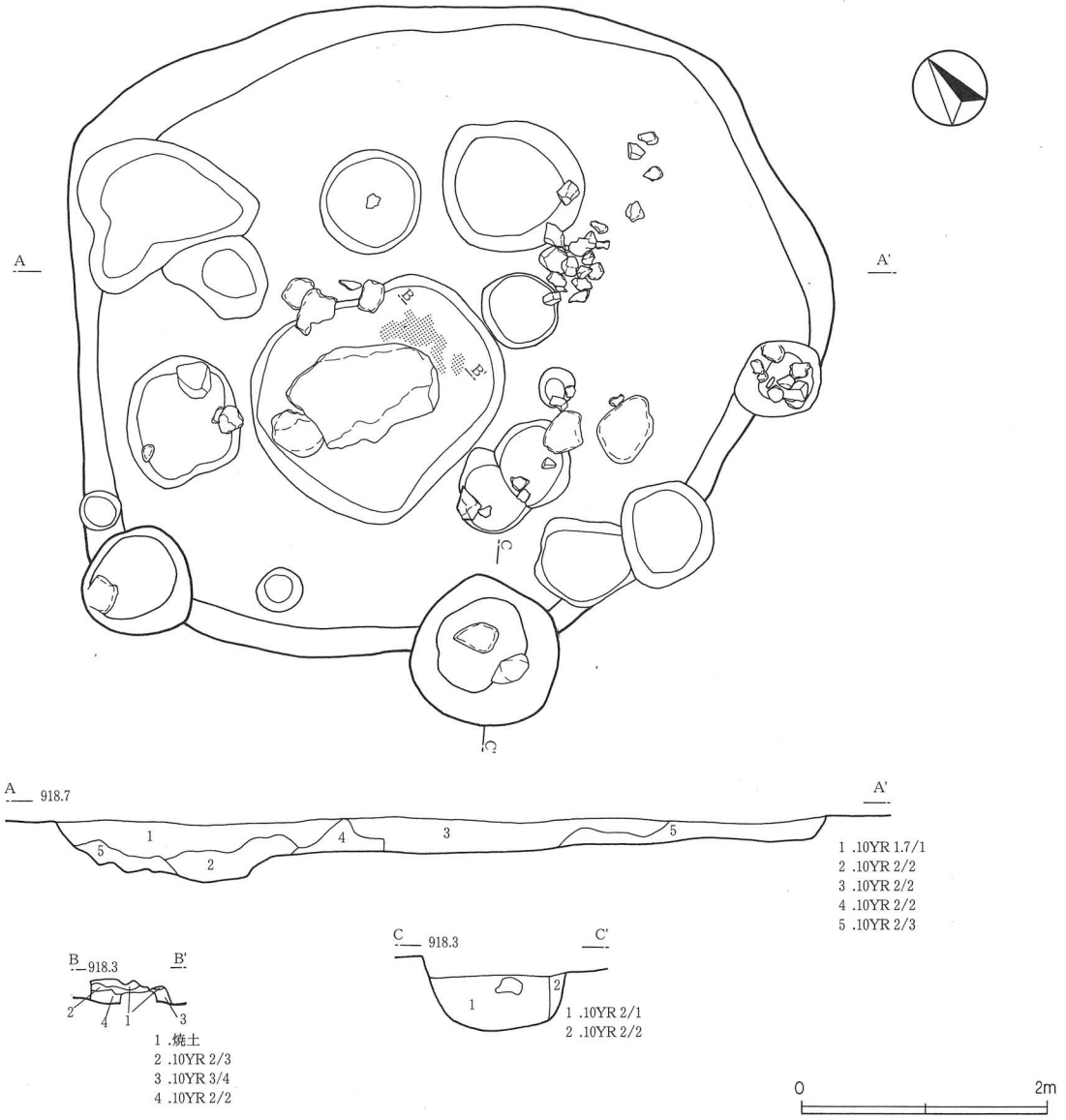


第7図　第1号住居址出土遺物(7･17は1/6)

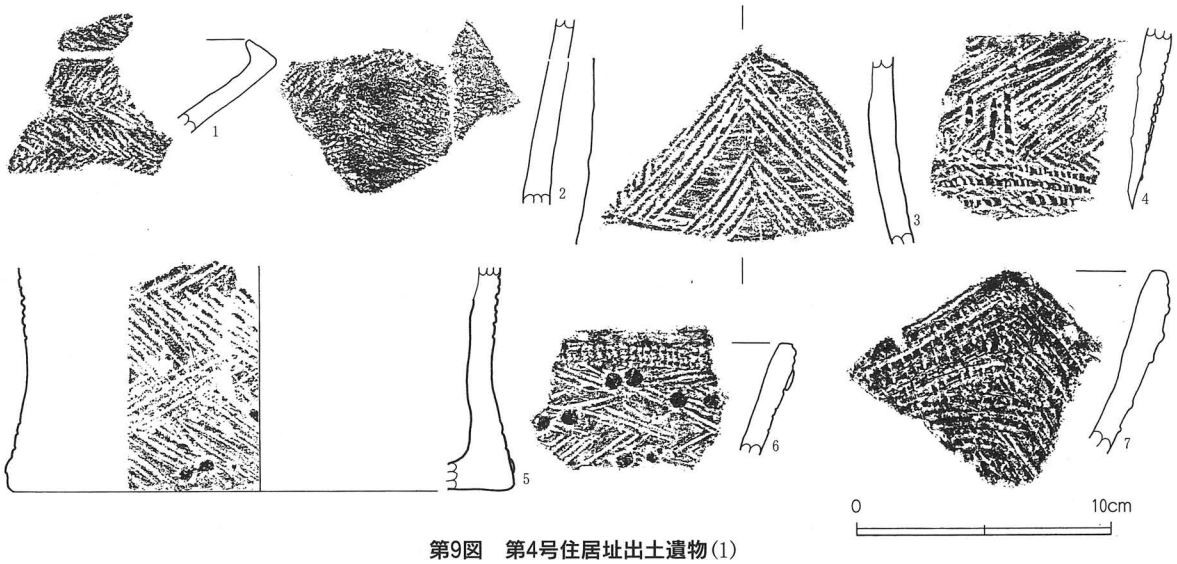
第４号住居址（第8・9・10図、図版3-1・12-2）

検出状況　遺跡の西側に位置し、遺跡のある台地の末端のグリッドA･B－3･4に位置する。北側には16号住居址と19号住居址がある。表土は非常に薄く、耕作によって非常に攪乱を受けているため、遺構の構造を確認するのに困難を極めた。また、他の住居址と同じように礫の混入が非常に多かった。わかっている住居址の規模は長軸6.20m、短軸5.38m、長軸方向はN－34°－Wを示す。

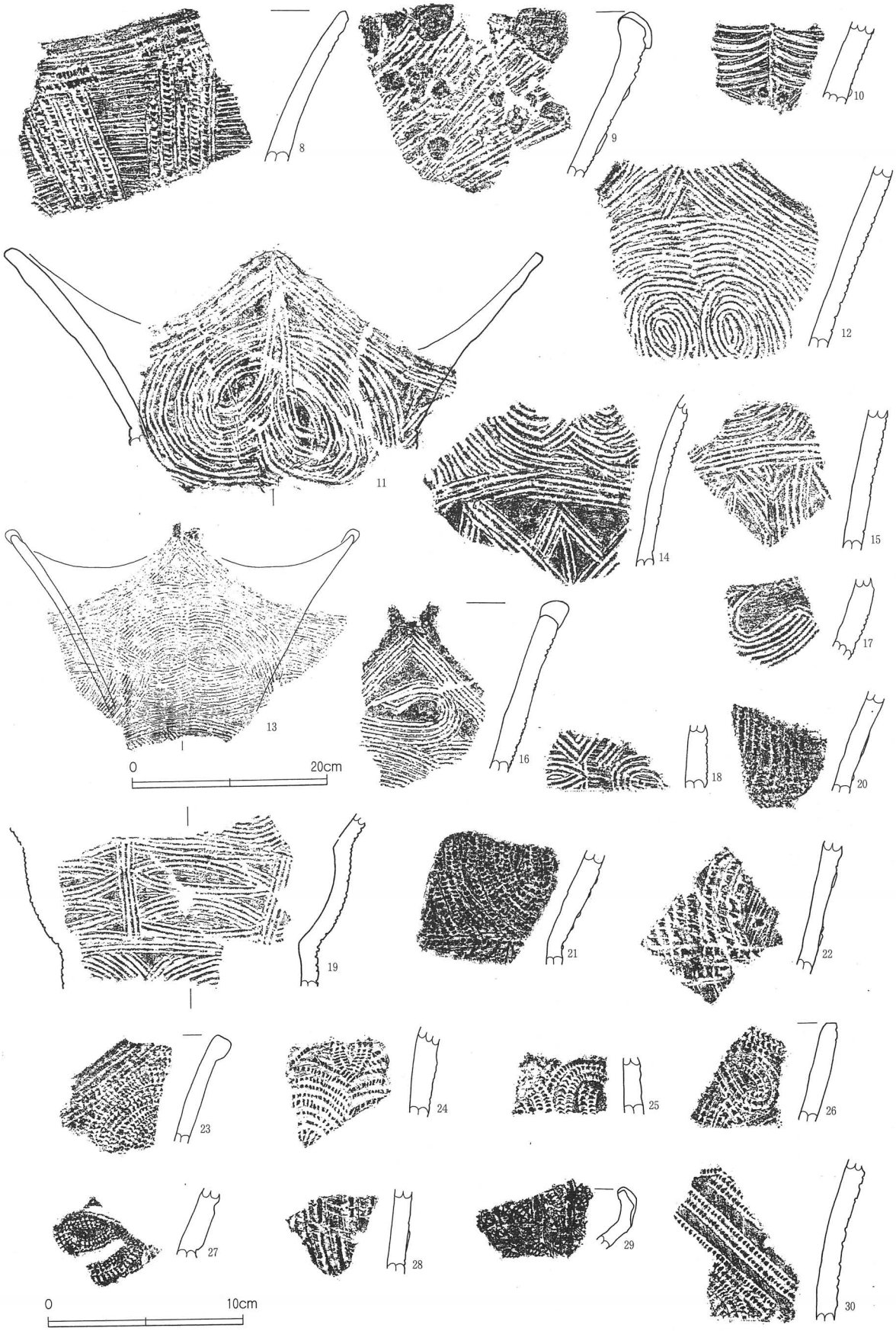
遺構の構造　住居址の平面形は前述の通り表土が薄いため、明確な壁を確認することはできなかった。平面形は辛うじて検出できた壁により不正形な長楕円形の住居址であると思われる。壁は東側15㎝、西側20㎝で



第8図　第4号住居址



第9図　第4号住居址出土遺物(1)



第10図　第4号住居址出土遺物(2)

遺存状況は非常に悪い。住居址西南側は土坑と重複するが、この土坑が住居址に伴うかどうかは不明である。柱穴と考えられる遺構は明確に検出できなかった。

住居址のほぼ中央部に不正形な土坑があり地山の120cmもある岩と焼土が検出された。この土坑内にある焼土址は、住居址内の位置から考えて炉址と思われる。炉は土坑の床面から21cm上部より検出されている。焼土は８cmの厚さで堅く焼き締まっている。この炉址周辺より若干の土器が出土している。

遺物の出土状況　土器は8,700gと多量に出土したが、完全な形に復元できるものはなかった。本遺構の遺物は第9・10図に掲載している。地文は平行沈線文が7,489g・縄文系が460g・無文420gで、平行沈線文系の土器が主体を示すと考えられる。平行沈線文の土器のうち、渦状沈線文系が1,910gと最も多く、矢羽状が1,480g・平行沈線が1,320g・レンズ状沈線が1,280gとなっている。縄文系の中に、矢羽状に施紋されているものがある(1)。また縄文を地文とし、口縁部に粘土紐を短く貼付するもの(29)も見られる。平行沈線文のうち、矢羽状に施紋されている物の中に、結節浮線を施紋するもの(4)、ヘラ切り浮線文を貼付するもの（7・8）がある。また、矢羽状文にはボタン状突起が貼付されることが多い。前述のとおり渦状沈線文が多いが、土器の下半が横位の沈線文で区画され、鋸歯状の沈線文を施されるもの（14・15）も見られる。渦状文は沈線文の他に、結節浮線文（20・21）・ヘラ切浮線文（22）・結節沈線文（23～26）がある。レンズ状文は、18のように土器の底部付近に三角文とともに施紋される場合や、胴部上半分に施紋され、下半に渦状文を伴うもの（19）などがある。

石器については、黒耀石片1,012g・黒耀石製石鏃4・打製石斧9・打製石斧欠損品7・打製石斧剥片12・横刃形石器2・磨製石斧1・凹石4、石匙1が出土している。打製石斧が欠損品・剥片も含めて実に28点出土しており、打製石斧を多く保有している住居址といえる。打製石斧の大きさは、長さ7.49cmから11.36cm、巾3.80cmから5.77cmであるが、長さは10cm代が多く、巾は4cm代が多い。

遺構の時期　出土遺物から縄文時代前期終末と考えられる。

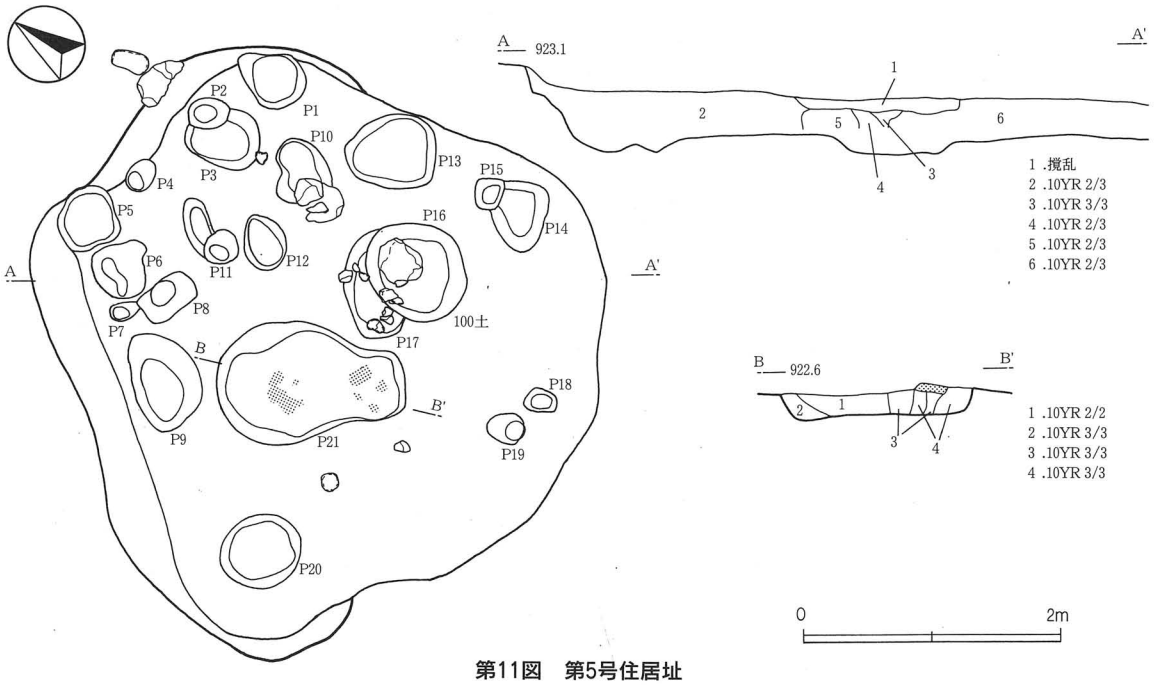
第５号住居址（第11・12・13図・図版3-2・12-3・4）

検出状況　遺跡東側の山裾が急に落ちた所の下側に立地する。グリッドH－14·15に位置する。東側に７号住居址がある。比高差が大きいため北側の水田の石垣が迫っており、住居址のすべてを発掘することはできなかった。遺構のある場所は畑として利用されており非常に表土が浅かった。また、確認面の土色が黒褐色土だったため、遺構の平面形を確定するのは非常に難しかった。わかっている住居址の規模は長軸4.30mである。

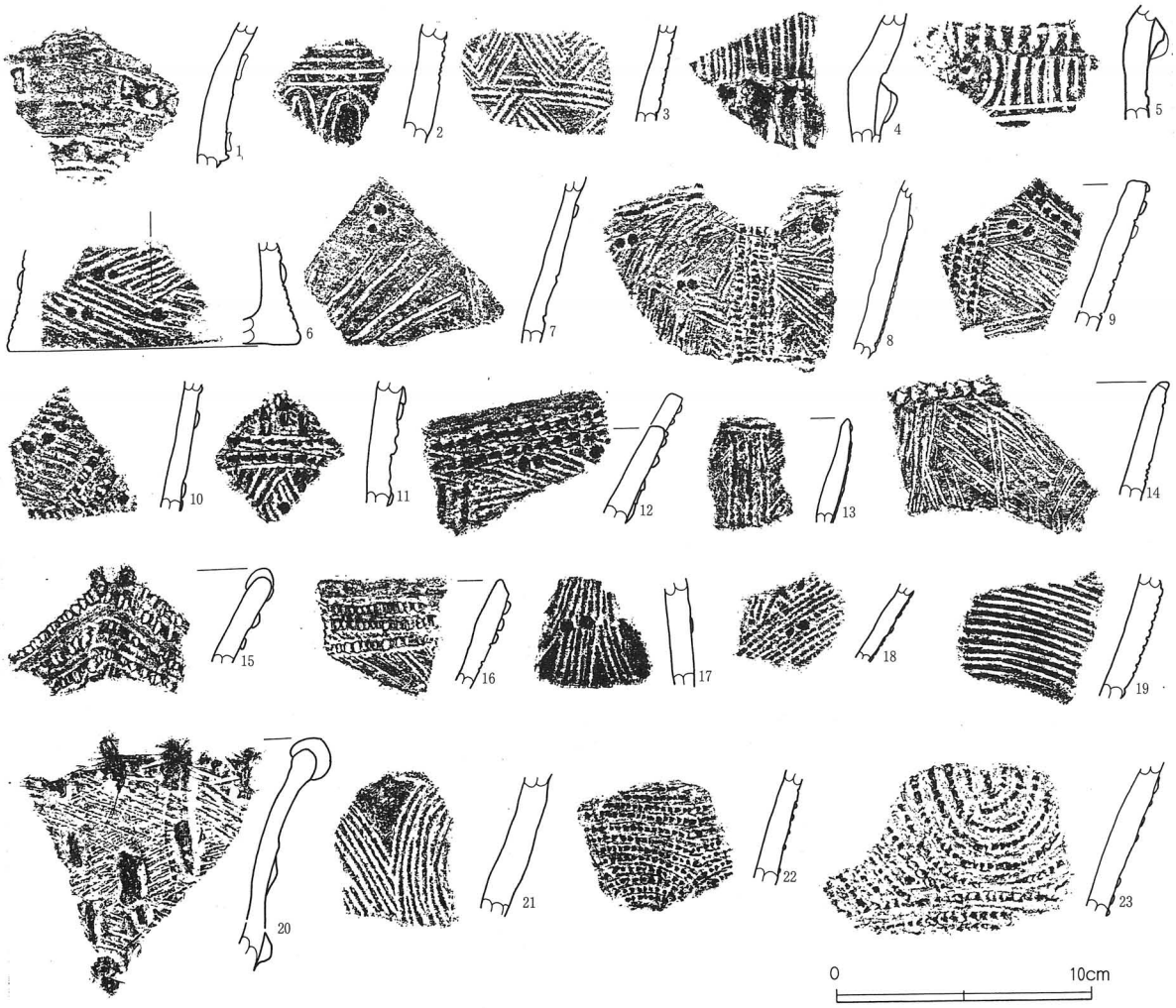
遺構の構造　表土が浅く、30cmほどの若干の掘り込みが確認できただけだった。壁の立ち上がりは北東側と南西側で立ち上がりがあり、これにより住居址の範囲を考えた。周溝は全く確認できなかった。北西側は石垣の下に入ってしまうため住居址のすべてはわからないが住居址床面より元地表面までは36cmあり、もともとは覆土が深かった物と思われる。住居址の南側は耕作土との区別がつかず遺構のプランは明確にわからなかった。遺構の周囲には土坑が多くありどれが住居址に伴う土坑かはわからない。住居址内にある土坑数は21基であるが、柱穴と思われる土坑はP2・P4・P8・P15・P18・P19である。柱穴の深さはP2 31cm、P4 31cm、P8 14cm、P15 12cm、P18 9cm、P19 8cmである。

遺構のほぼ中央部と思われる場所に不整形のP21があり、土坑の南側より焼土が検出されており炉址と考えられる。焼土の厚さは10cmほどあった。土坑の規模は長径150cm、短径98cm、深さ15cmである。焼土は土坑底面から12cm上部より検出されている。

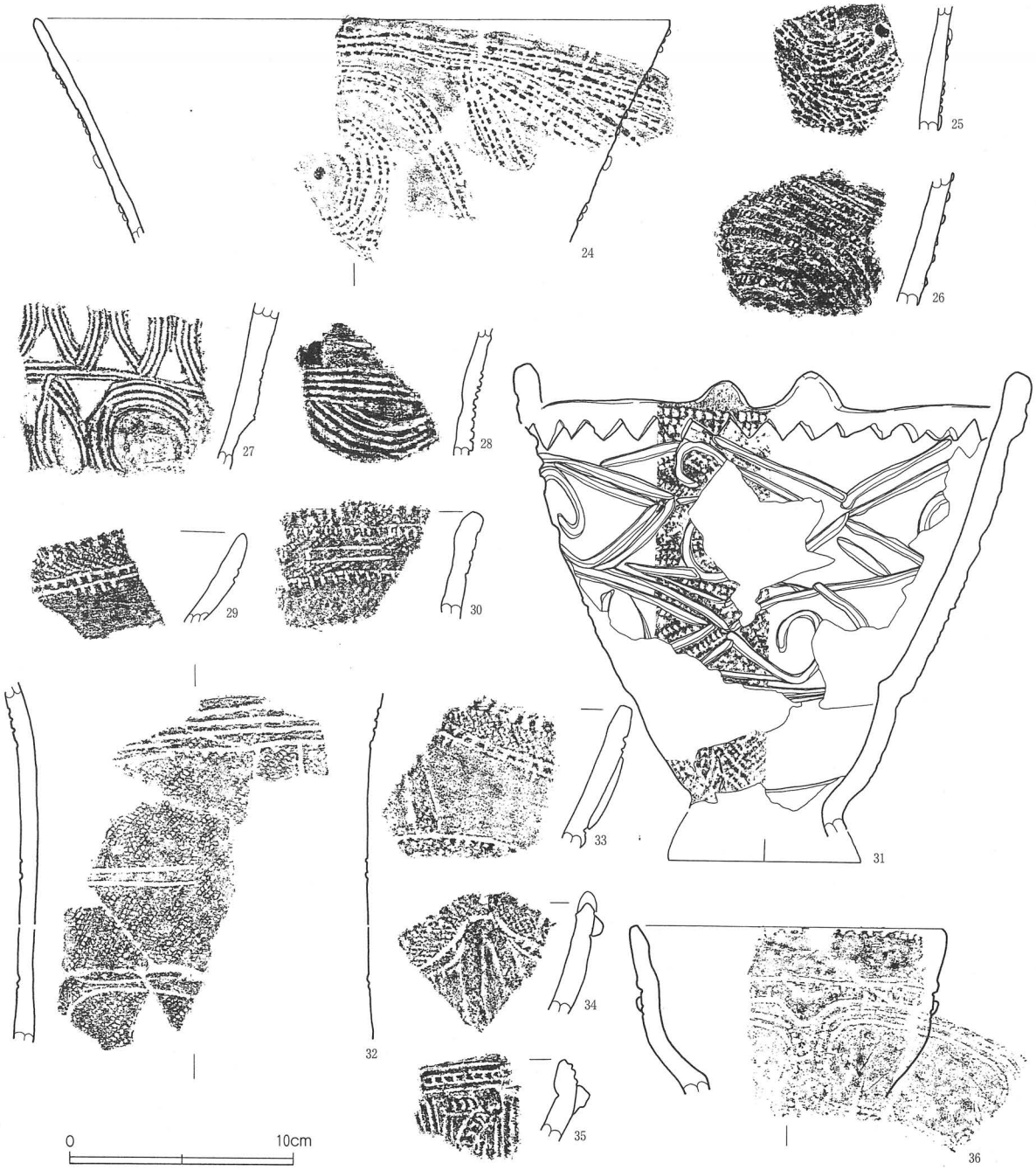
遺物の出土状況　遺構の表土が非常に薄く、遺物は全体に散って出土している。土器は6,029g出土している



第11図　第5号住居址



第12図　第5号住居址出土遺物(1)



第13図　第5号住居址出土遺物(2)

が、前期終末の土器の他に中期初頭の土器も混入しているため、本址に中期初頭の遺構が重複していたことが考えられる。土器は第12・13図に掲載してある。最も多く出土したのは平行沈線文の土器の4,565gで、縄文系は740gである。縄文系の土器の中には中期初頭のもの（29～34・36）が多く含まれている。また、31のようにかなり完形個体に近い前期終末と思われる土器も出土している。平行沈線文の土器の中では、矢羽状文が1,210gと多く、ボタン状突起を貼付するもの（6・7）、結節沈線文とボタン状突起のあるもの（8～12）、ヘラ切浮線文（15・16）・短い浮線文を貼付するもの（20）がある。渦状文は少ないが、沈線のみのもの（21）・結節渦状沈線（22）・結節渦状浮線文（23）・結節渦状浮線文にボタン状突起（24）・ヘラ切渦状浮線文（25）がある。レンズ状文も少ないが、27・28のようにかなり立体的になる。

石器については、黒耀石片815g・黒耀石製石錘2・打製石斧3・打製石斧欠損品7・打製石斧剥片8・凹石4、

擦石5が出土している。4号住居址とな並んで打製石斧が多い遺構ではあるが、完形品が少ない。3点の打製石斧の大きさは長さ7.82㎝から11.20㎝・巾4.14㎝から4.36㎝である。

遺構の時期　中期初頭の遺物も見られるが、全体的に見て前期終末の遺物が多いところから、中期初頭の土坑が重複すると考えて、前期終末の遺構と考えたい。

第７号住居址（第14図・図版3-3・12-5・6）

検出状況　5号住居址同様遺跡東側の山裾が急に落ちた所の下側に立地する。グリッドH·I－15に位置し、西側に5号住居址、南側に8号住居址がある。確認面が黒褐色のため遺構の確認は難しく、表土が浅いため耕作による攪乱があるため若干の掘り込みが確認できただけだった。わかっている住居址の規模は4.66mである。

遺構の構造　壁の立ち上がりは5㎝と非常に浅く、周溝は確認できなかった。壁面は辛うじて北東隅と南西隅で検出されたのみで、遺構の遺存状態はあまり良くなかった。住居址内にある土坑は12基で、このうち柱穴と思われるのはP1・P2・P3・P5・P6・P9・P10の7基である。その他の土坑にP6・P7・P8・P11・P12がある。柱穴の深さはP6　33㎝、P9　19㎝、P10　15㎝である。住居址のほぼ中心と思われるP12の東脇に16㎝四方の焼土があり、炉址であると考えられる。炉址は土器を伴わない地焼炉である。住居址内には多くの礫が混入していたが、特にP12内には50㎝ほどの礫が入っていた。

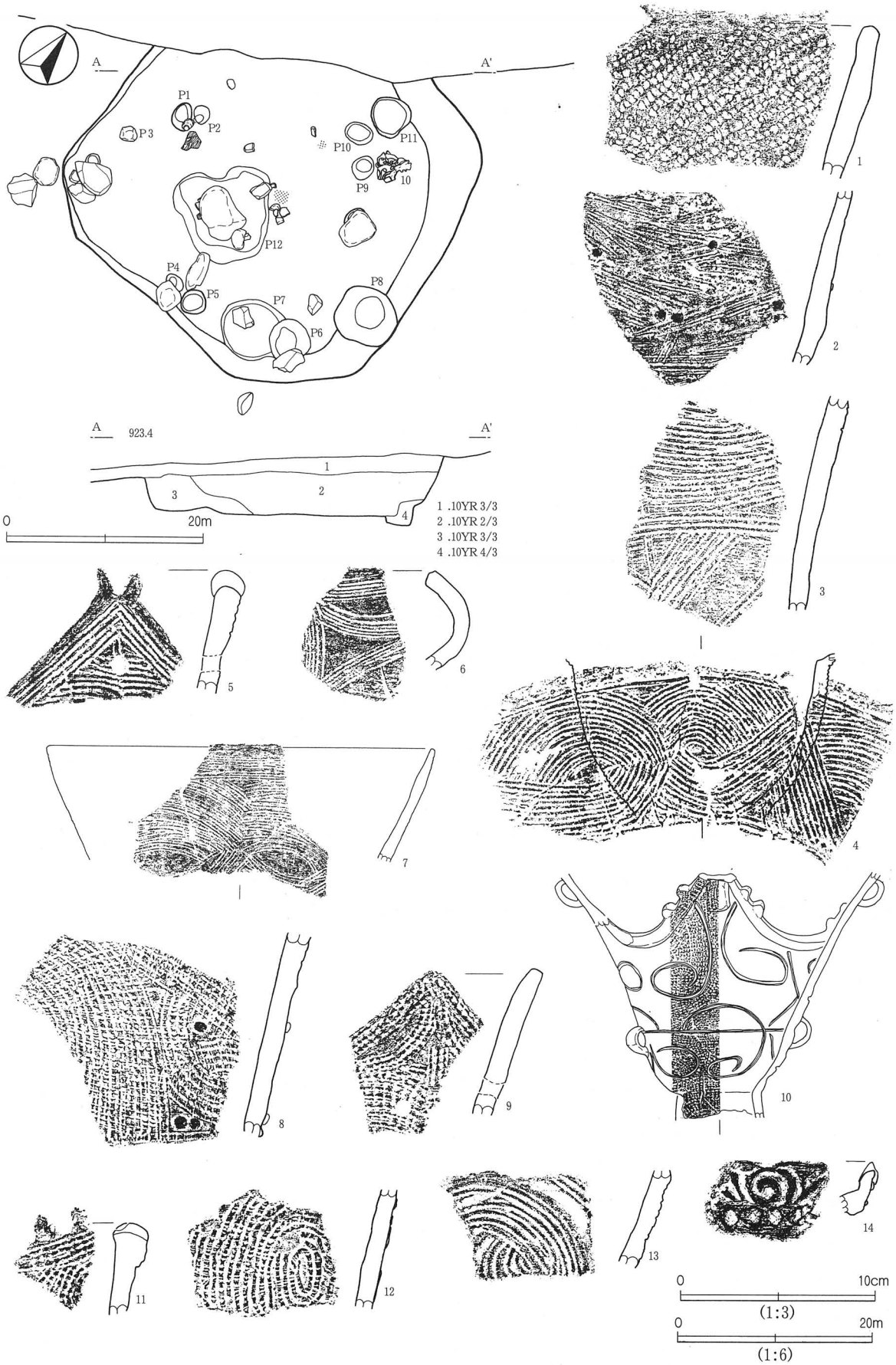
遺物の出土状況　住居址内からは多くの遺物が出土し、住居址覆土内から床直上まで検出されている。床直上からは半完形の土器が2点や大破片が出土している。土器は全部で7,768g出土している。土器の図はいずれも第14図に掲載している。土器の地文の施紋比率について見てみると、最も多いのは矢羽状沈線文の土器で1,753g出土している（2）。ついで多いのはレンズ状沈線文で1,670g（5～7）、平行沈線の1,135g、渦状沈線の915gである（4）。縄文が地文になっているものは540gとかなり比率は低い(1)。渦状文の中には結節沈線文によるもの（9・11・12）と、半截竹管によるネガティブな隆帯上をヘラ切りするもの（8）が見られる。10は地文が結節状沈線で覆われており、沈線によって曲線文が描かれている。石器については、黒耀石片722g・黒耀石製石鏃1・石鏃未製品1・黒耀石製石錐未製品1・打製石斧2・打製石斧欠損品8・打製石斧剥片12・凹石2・擦石2・丸石2が出土している。打製石斧は、長さ7.65㎝と9.32㎝、巾1.28㎝と1.43㎝だった。

遺構の時期　本址の時期は、出土遺物から前期終末と考えられる。

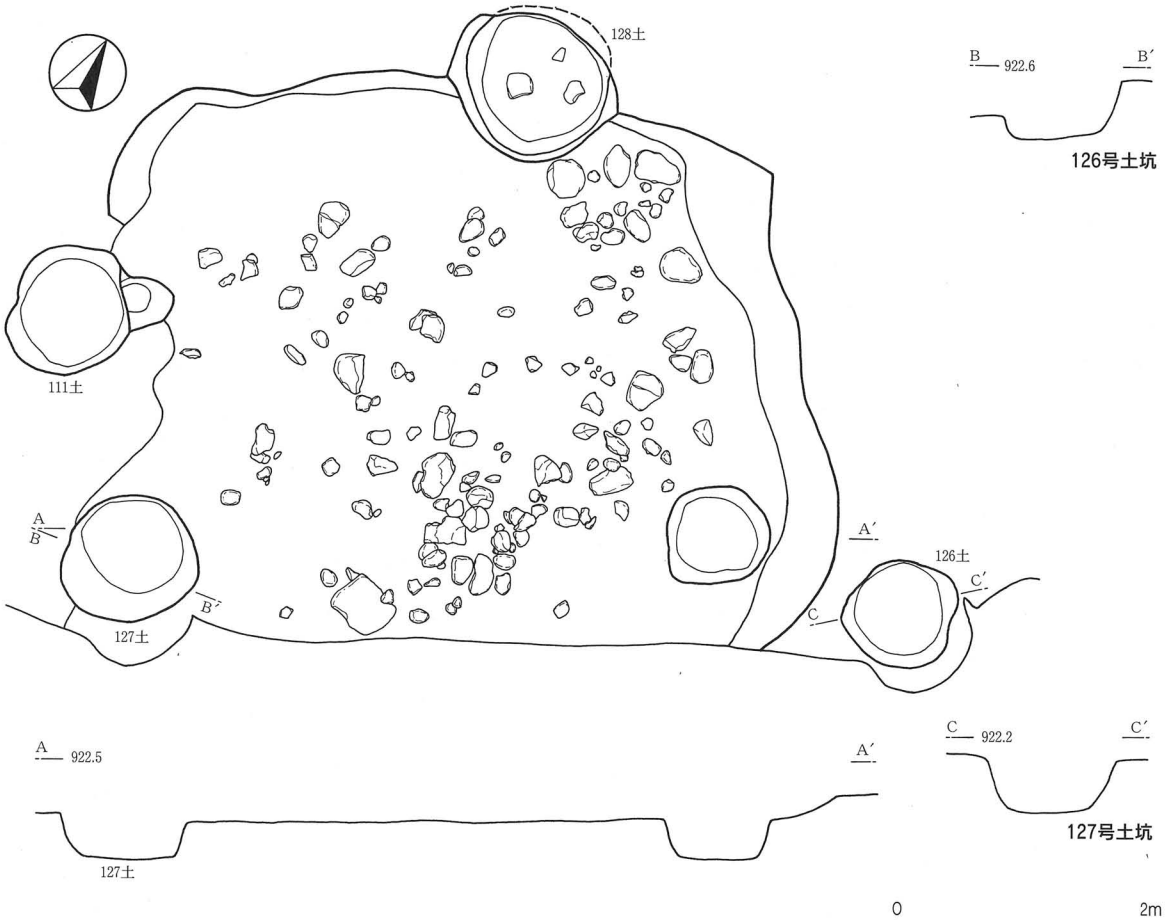
第８号住居址（第15・16図・図版4-1・12-7・8）

検出状況　山裾の最末端に当たり、桧沢川の川筋へ落ちていく上部に当たる。グリッドH－15·16に位置する。付近には7号住居址や、6号住居址、13号住居址などがある。この住居址のある場所は後背山から流れ出る礫の道筋に当たり、非常に多くの礫が地山や住居址の覆土内に混入している。住居址の南東側は現在の農道に切られている。表土は非常に浅く、わずかな掘り込みが確認できただけであり、西側はあまり明らかではなかった。

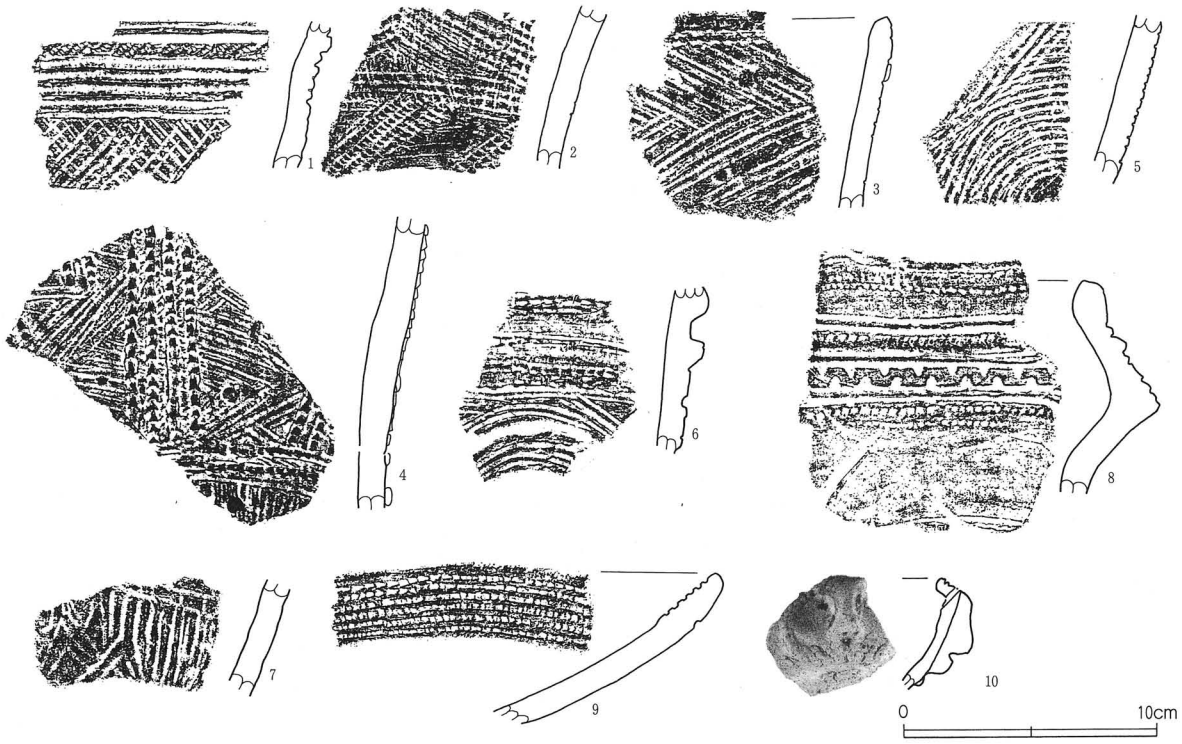
遺構の構造　遺構壁面はあまり明確ではなく、北壁30㎝、東壁18㎝で、南側は現道に切られており、西側はわからなかった。住居址の平面形は隅丸長方形であると考えられるが、壁が上述の通り遺存状況が悪いので明確にはわからない。4号住居址同様周辺には円形の土坑が住居址の壁面を切る形で作られているが、住居址に伴うものかわからず別記した。柱穴と思われる土坑の検出はできなかった。また、焼土の検出も見られなかった。



第14図　第7号住居址と出土遺物(7と10は1/6)



第15図　第8号住居址



第16図　第8号住居址出土遺物

遺物の出土状況　遺物は住居址内全体に亘って出土している。土器は総出土量が7,543gで、地文が無文土器が2,090gと最も多い。これは中期初頭の土器の量が多い理由によるものである。他に矢羽状沈線が765g・渦状沈線が770g・結節沈線が545g・斜行沈線が580g・平行沈線が1,353gである。第16図に本址出土の土器を図示した。前期終末の土器は2・3・4・5である。2は渦状や斜行沈線にヘラ切りを施したものである。3は矢羽状沈線の口縁付近に結節沈線を配し、ボタン状突起を貼付したものである。5は波状口縁の土器で、胴部は渦状沈線、口縁部に結節沈線を施紋している。1・8・9は中期初頭の土器であり、1は数条の隆帯を回し、下部に格子状に沈線を配している。幅の広い隆帯上に縄文を施紋している。8は口縁部から頸部にかけて横位に刺突文があり、その中間に交互刺突文が入っている。9は口縁部に細かい刺突文を入れる浅鉢である。口縁部以外は無文である。特記すべきは10の人面付土器の人面の部分である。土器の口縁部に板状の粘土塊を付したもので、板状の粘土塊に顔が表現されている。眼は穴を開け、上部につり上げ気味となっている、鼻は高く、鼻の下部に二つの小さい穴を開け、鼻の穴を表現している。鼻の下には小さく口が作られている。土器本体との接着部から口の下にかけて細かく結節浮線文が貼付されている。顔面の頭部・土器の口縁部が一部内湾しており、頭部と内湾している口縁部の間に9㎜ほどの細長い穴が空いている。

石器については黒耀石片607g・黒耀石製石鏃1・石英1・打製石斧1・打製石斧欠損品5・打製石斧剥片6・丸石1が検出されている。打製石斧が多く出土しているが、ほとんどが欠損品と剥片である。大きさがわかるものが2点あり、一つは長さ8.72㎝・巾4.93㎝、もう一つは長さ8.35㎝・巾3.21㎝である。

遺構の時期　出土土器より前期終末から中期初頭の遺構であろう。

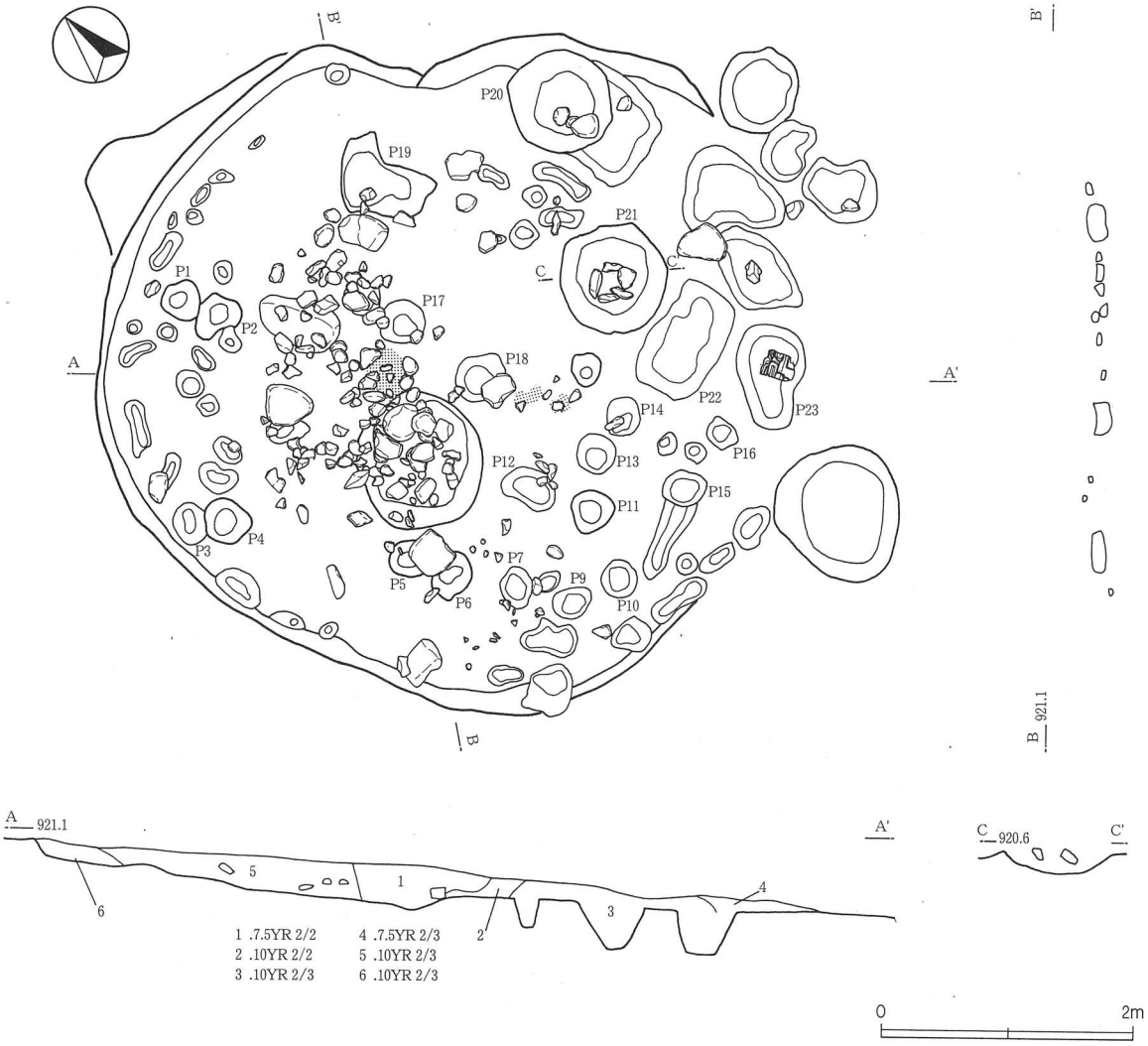
第９号住居址（第17・18図・図版4-2・3・13-1・2・3）

検出状況　霧ヶ峰山麓の山裾の最末端にあたり、グリッドG－16·17に位置する。この場所も表土が非常に薄かったが、９号住居址の住居址平面形はある程度はわかった。しかし、西側は傾斜している上に14号住居址と重複しているため、壁面を検出することはできなかった。

遺構の構造　遺構の掘り込みが一部不明であったが、長軸5.40m、短軸推定4.38mの隅丸長方形の平面形で、軸線方向はN－75°－Eを示す。壁の立ち上がりは北壁18㎝が残っていた。南側は14号住居址との重複と傾斜のため検出できなかった。9号住居址は土層断面から考えると5・6層であるといえ、1層より南東側は14号住居址の攪乱にあっていると思われる。壁際を掘ると不正形な長目の掘り込みが随所に見られるところから周溝であったのではないかと思われる。柱穴と思われる土坑はP1・P2・P3・P4・P5・P6・P7・P8・P9・P10・P11・P12・P13・P14・P15・P16・P17・P18で、このうち９号住居址の柱穴と思われるものはP1・P2・P3・P4・P5・P6・P7・P9・P10・P15・P16である。柱穴の深さはP1 36㎝、P2 21㎝、P4 35㎝、P5 24㎝、P6 29㎝、P7 19㎝、P9 17㎝、P10 10㎝、P15 34㎝、P16 12㎝である。住居址南東側の柱穴は14号住居址との重複により検出できなかった。

住居址のほぼ中央部に焼土があり、地焼炉と思われる。35㎝四方の不正形で、焼土の厚さは5.3㎝である。住居址のほぼ中央部には多くの礫があり、板状の礫が炉址の周辺に散乱していた。

遺物の出土状況　遺物は多く検出されており、12号住居址に次いで出土量が多い。しかし14号住居址と混在しているため、明確にどちらの住居址に帰属するかは不明なため、両方併せた量で述べる。また、土器の図示は第18図に掲載している。土器は渦状沈線が2,255gが最も多く、レンズ状沈線が2,099gと次いで多い。他は矢羽状沈線が1,350g・平行沈線が1,090g・斜行沈線が1,045g・結節沈線文が780g・縄文が540gである。他の住居址と較べて、突出して渦状沈線文とレンズ状沈線文が多い。図示した土器について述べると、1は縄

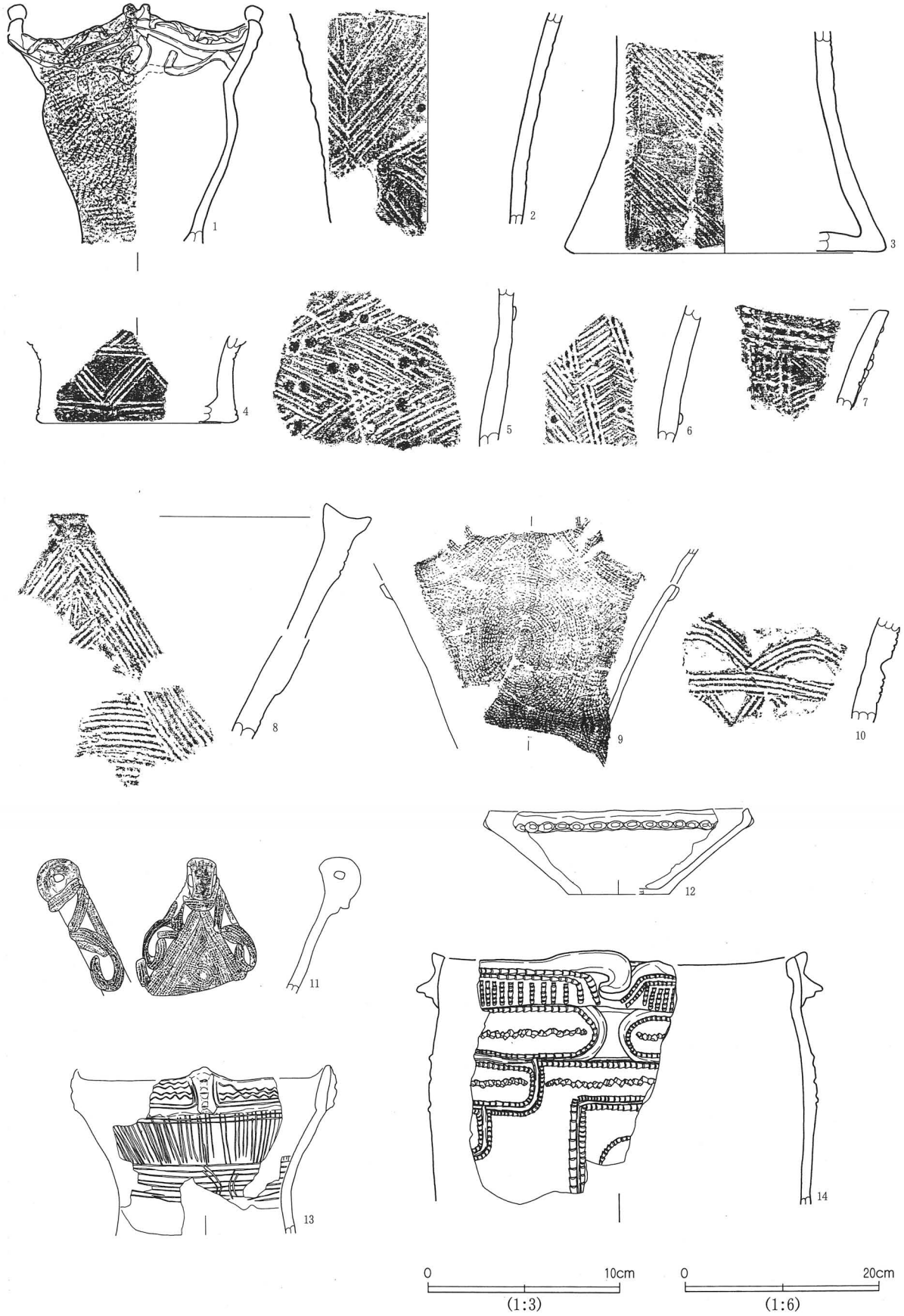


第17図　第9･14号住居址

文を地文に、口縁部は4単位に波状になり、口縁部付近に粘土紐を貼付させている。2・3とも斜行沈線で山形に施紋している。また、2のようにボタン状突起をもつものがある。4は沈線によって三角形の模様を施紋している。5から7は矢羽状沈線を地文とし、ボタン状突起をもち、6は結節沈線を斜めに、7は結節浮線文を貼付している。8・9・11は渦状文で、8は波状口縁で口縁頂に突起が付く。9も波状口縁であると思われるが、先端が欠損している。口縁部に突起が二単位ずつ突起がついている。胴部は全体に結節渦状沈線文である。10は立体的に作られており、アーチ型や三角形に隆帯を付している。隆帯上は3条の沈線で施紋されている。11は4単位の波状口縁の一部で波状先端を環状にし、粘土紐で口縁部側縁に貼付し、一面を結節沈線文で施紋している。12は地文が無文の浅鉢で、口縁付近に押圧隆帯を貼付している。

石器は14号住居址と混在しているため、明確にどちらの住居址に帰属するかは不明なため、両方併せた量で述べる。黒耀石片1,432g・黒耀石製石鏃4・石鏃欠損品6・打製石斧7・打製石斧欠損品5・打製石斧剥片3・凹石4・石匙1・石匙欠損品1・凹石1・擦石1が出土している。14号住居址と重複しているためか、打製石斧の保有量がとても高い。完形品は7点で、その大きさは、長さ7.53cmから10.55cm・巾3.75cmから5.35cmで平均すると長さ9.56cm・巾4.29cmである。

遺構の時期　出土した遺物より、前期終末であると考えられる。



第18図　第9・14号住居址出土遺物(9・10・12・13は1/6)

第14号住居址（第17・18図・図版4-2・3・4・13-1・2・3）

検出状況　14号住居址は９号住居址より浅く掘り込まれていたようで、住居址の壁面は北壁のごく一部しかわからなかった。９号住居址を調査中、Ｐ23より中期中葉の土器が出土し、当初単独の土坑と考えていたが、北側より石囲いが出土したため、住居址番号を付した。

遺構の構造　住居址の壁面は前述のとおり北側しか検出できず、住居址の平面形は全く不明である。おそらく土層観察から考えると1層より南西側が14号住居址であると思われる。P21より20㎝ほどの板状の礫で作られた石囲いが検出されたが、焼土を伴わないため炉であったかどうかは、不明である。焼土は９住炉の南東側、石囲いの西側に薄い焼土があり、どちらの住居址に属するかは不明である。しかし、14住に付属するものである可能性はある。14住の柱穴と考えられるものは全く不明である。

遺物の出土状況と出土遺物　P23からは土器の一部が出土している。この土器は25㎝ほどの破片で、模様のある面が、上を向いて埋置されていた。P23の形状は明らかではないが、若干土坑底部よりは浮いたかたちで出土している。石器については9号住居址と重複しているため、総量を9号住居址に記した。

遺構の時期　出土した土器より中期中葉狢沢式期の遺構と思われる。

第10号住居址（第19・20図・図版5-1・13-4）

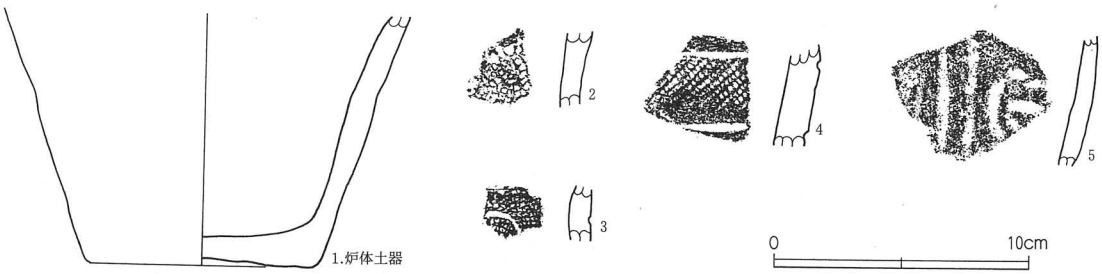
検出状況　霧ヶ峰山麓の山裾の最末端に当たり、グリッドF·G－16に位置する。11号住居址と12号住居址と切り合っている。東方に13号住居址がある。遺構の遺存状況は南西側が斜面になっており、表土が浅かったとともに11・12号住居址の覆土上に乗っており黒色土であったため、平面形の確認はできなかった。

遺構の構造　南西に下がる傾斜面に構築されているため北西壁の遺存状況は良好で、20㎝の深さで検出された。遺構の規模は半分がわからなかったため断片的にしかわからないが、残っている場所で見れば、おそらく7.00ｍの規模の比較的大きな住居址であったと思われる。周溝は確認できなかった。P1からP7が柱穴と考えられ、ほぼ等間隔に並んでおり、おそらく11・12号住居址の覆土内にも当然構築されていたと思われる。P3の中には20㎝大の板状の平石を直立させて埋めており、柱を固定させるために埋設したのではないかと思われる。穴の深さはP1 39㎝、P2 40㎝、P3 49㎝、P4 43㎝、P5 108㎝、P6 35㎝、P7 34㎝と、P5を除いてほぼ均等な深さの土坑である。P3からP5にかけて部分的に30㎝大の平石を使用した敷石が見られ、この住居址が敷石住居址であったことがわかる。住居址のほぼ中央部に埋甕炉があり、埋甕中及び周辺部40㎝の範囲にわたって焼土が検出された。焼土の厚みは6㎝である。地山に礫が入っているため、完全に平面な床とは言えないが、比較的平らに掘り込まれている。

遺物の出土状況と出土遺物　本住居址に属すと考えられる遺物は埋甕炉の他は非常に出土遺物は少なく、第20図に図示した遺物以外に本住居址に属すると思われるものはなかった。1は炉体土器である。無文で土器上部は炉体土器にするためか失われており、焼成を受けているためか非常に脆い。2・3・4は縄文を地文とし4は沈線によって区画されている。3は地文が縄文で、曲線の沈線が施紋されている。5は非常に摩滅しており、地は無文で数条の垂下沈線と曲線した沈線文によって施紋されている。石器は本址に属するものは明確ではないが、10号住居址の範囲で出土しているものは、黒耀石片300g・打製石斧剥片2・石匙1・チャートが3検出されている。

遺構の時期　出土遺物から後期前半堀之内式期であろう。

第19図　第10号住居址

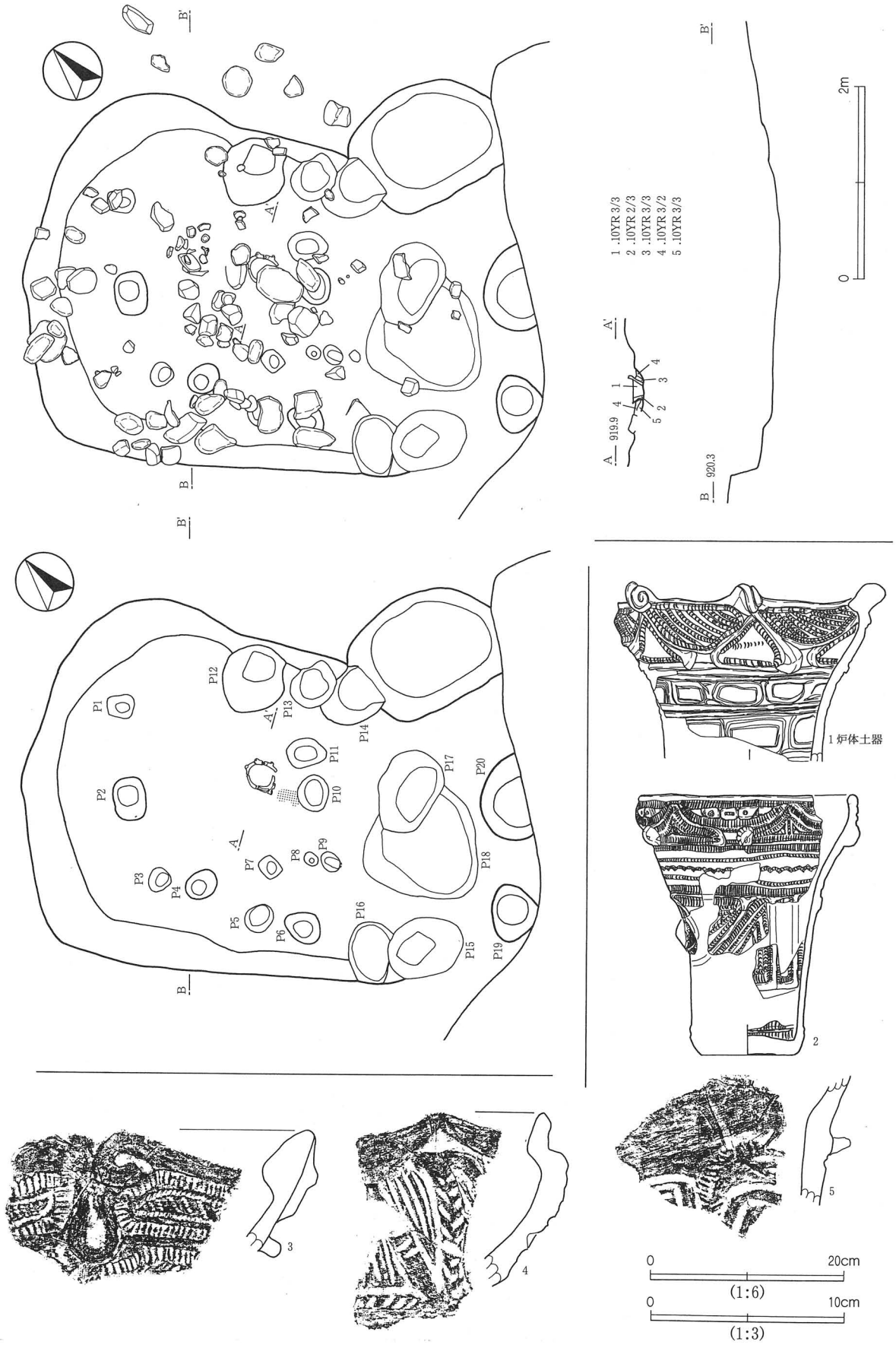


第20図　第10号住居址出土遺物

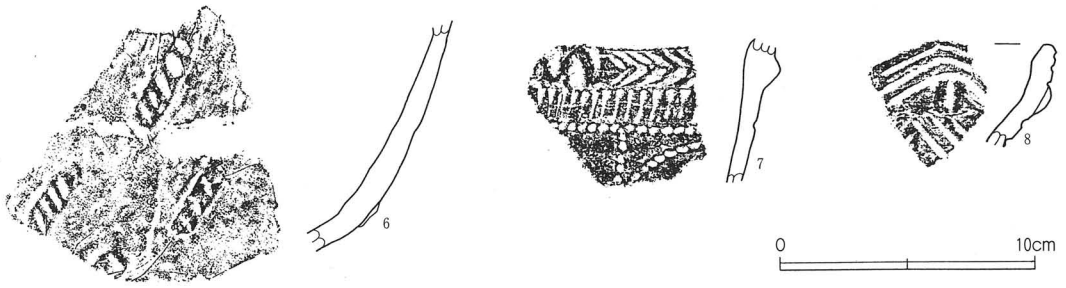
第11号住居址（第21・22図・図版5-2・13-5・6）

検出状況　霧ヶ峰山麓山裾の最末端にあり、グリッドF－16に位置する。遺構上部に10号住居址がある。場所が南東方向へ傾斜しているので、南西側の壁は検出できなかったが、北西側は掘り込みが深かったため良好に検出できた。よって、南東側へ向かうほど壁は浅くなっていく。

遺構の構造　南東壁が不明なため遺構の長軸は不明である、短軸は3.60mの隅丸長方形のやや小規模な住居



第21図　第11号住居址と出土遺物(1･2は1/6)



第22図　第11号住居址出土遺物

址と考えられる。軸線方向はN－53°－Eを示す。壁面は前述の通り南東壁が明らかではないが、北東壁は60㎝の深さで良好に残っていた。南東方向へ向かって徐々に壁は浅くなっていく。周溝は確認できなかった。住居址のある場所は、地山にかなりの礫があるが、住居址床面は非常に平らに作られていた。柱穴はあまり明らかではないが、P1～P11が柱穴になると考えられる。柱穴の深さはP1 18㎝、P2 35㎝、P3 22㎝、P4 21㎝、P5 22㎝、P6 44㎝、P7 17㎝、AP8 17㎝、P9 16㎝、P10 23㎝である。住居址のほぼ中央部より埋甕炉が検出された。埋甕炉の南側から20㎝四方で焼土が検出された。この焼土は埋甕炉に伴うものであると考えられる。

遺物の出土状況　土器は多く検出されているが、ある程度復元できる土器は限られる。1は炉体土器で、下半分は失われている。この土器は炉体土器に使用されているにしては土器は脆くはない。3から7までは中期中葉の土器であるが、8は加曽利B式期の土器と考えられる。当遺跡ではこの時期の遺構は発見されていない。

石器は黒耀石片264g・黒耀石製石鏃1・打製石斧1・打製石斧欠損品2・打製石斧剥片6・凹石3・丸石1が出土している。打製石斧の剥片は多く検出されているが、ほとんどが剥片で大きさのわかるものは2点しかない。1点は長さ6.95㎝・巾3.62㎝、もう1点は長さ6.64㎝・巾5.36㎝であり、他の住居址の石斧と較べて小振りな打製石斧といえる。

遺構の時期　出土遺物から中期中葉新道式期と思われる。

第12号住居址（第23・24図・図版5-3・13-7・14-1・2）

検出状況　霧ヶ峰山麓山裾の最末端にあたり、桧沢川の河岸段丘に立地し、グリッドF-16･17に位置する。南東方向へ傾斜して低くなっていく。住居址の南東側は集石と18号住居址によって切られており、南側半分の様子は不明である。

遺構の構造　住居址南東側は、集石と18号住居址によって切られているため、全貌はわからないが、わかる範囲では東西方向で7.32mあり、比較的大きい住居址である。掘り込みは深く、東壁36㎝・西壁30㎝あり、南壁へいくほど傾斜のため浅くなっていく。土坑は住居址内から8基確認されているが、柱穴と思われるのはP3・4・5・6で、東側からは柱穴と思われる土坑は検出できなかった。住居址のほぼ中央部と思われる場所から焼土が検出され、地焼炉と考えられるが非常に範囲が小さい。覆土内及び地山からは非常に多くの礫が出土している。

遺物の出土状況　遺物の保有量は最も多く、14,805g検出している。ほとんど沈線文の土器が多く、平行沈線4,505g・矢羽状沈線3,345g・斜行沈線2,460g・無文2,130g・縄文320gとなっている。遺物の一部を第24図に図示した。1・2は矢羽状沈線、2はボタン状突起を貼付している。4から7は渦状文で、5は結節渦状沈線、

第23図　第12号住居址

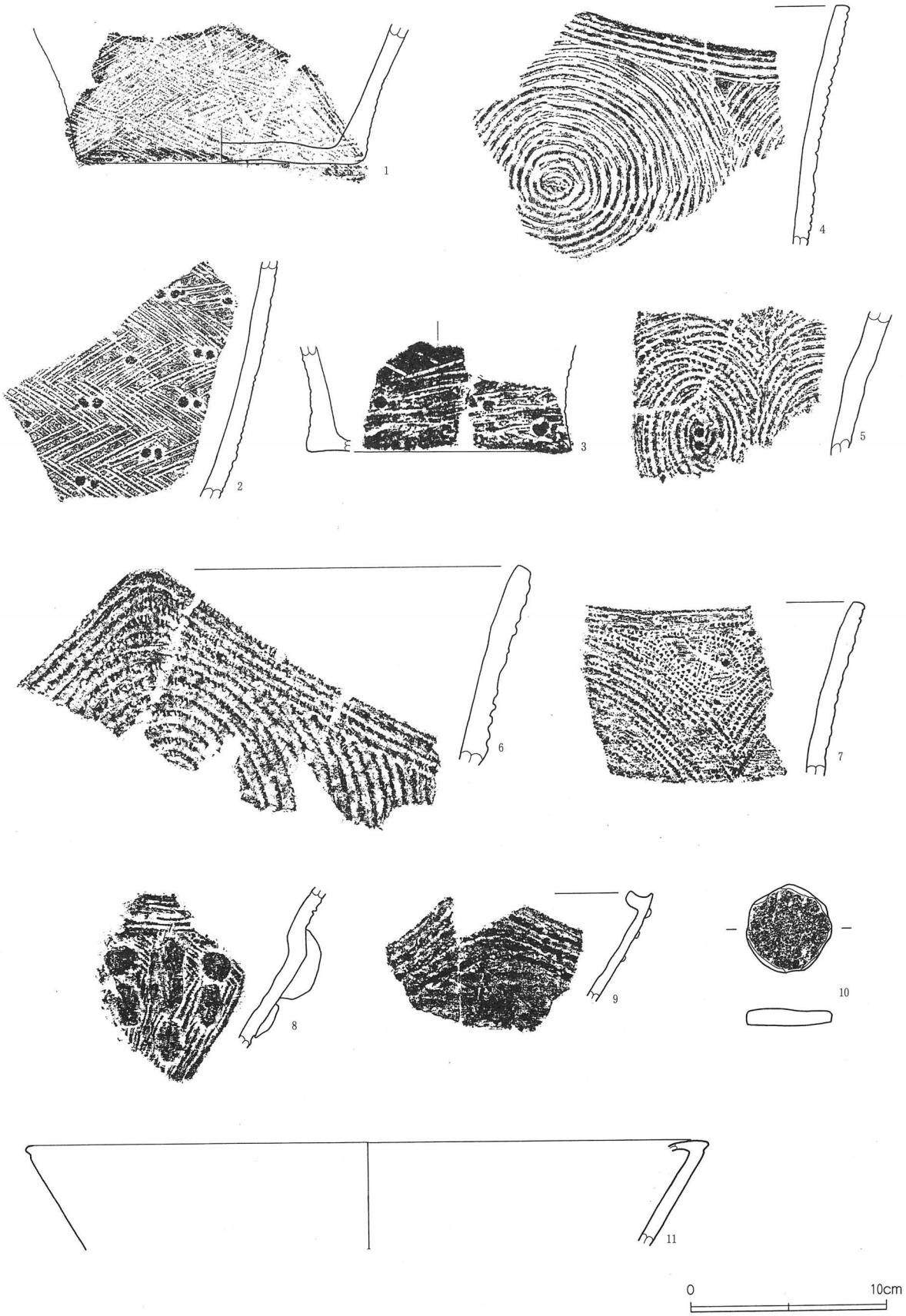
6は結節渦状浮線文、7は結節渦状浮線文の一種であろうか、渦の間に模様を結節浮線文で作り出している。8は矢羽文上に大きなボタン状突起や突起を貼付している。9は浅鉢と思われ、地文は無文で、口縁部に結節浮線文を3条貼付している。11は無文の浅鉢で、口縁部は内部に屈曲し、体部はきれいに磨かれている。10は土製円盤で表面の摩滅が激しく、施紋の存在はわからない。石器は黒耀石片1,281g・黒耀石製石鏃4・石匙1・黒耀石製石匙1・打製石斧1・打製石斧欠損品8・打製石斧剥片5・磨製石斧1凹石3・石皿1・チャート片1が出土している。この住居址でも打製石斧の保有量は多く、そのほとんどは欠損品か剥片である。2点大きさのわかるものがあり、1点は長さ8.99㎝・巾4.46㎝、もう1点は長さ6.64㎝・巾4.50㎝である。

遺構の時期　出土遺物から前期終末と思われる。

第13号住居址（第25・26図・図版6-1・2・14-3・4）

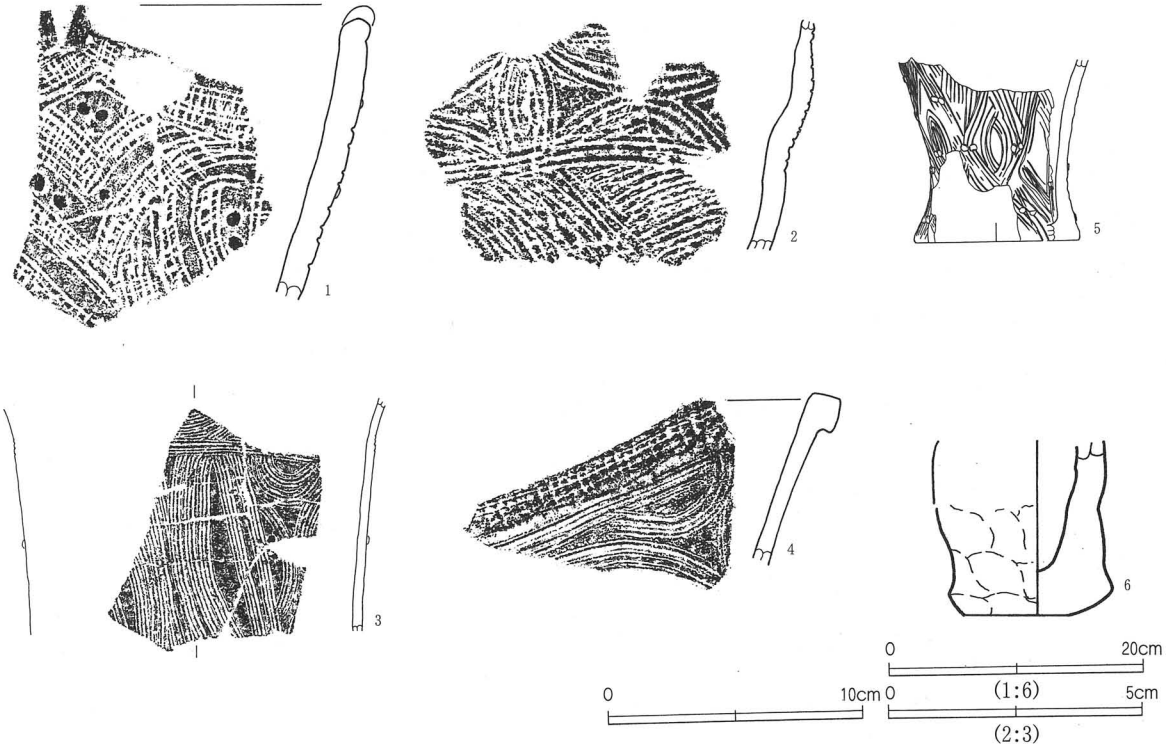
検出状況　霧ヶ峰山麓山裾の最末端にあり、グリッドG・H－17に位置する。住居址の西側に9・10・12号住居址が、東側に6号住居址がある。住居址の壁面はあまり明確ではない。地山及び覆土中には多くの礫があった。

遺構の構造　長軸5.04m、短軸4.08mの不整形な隅丸長方形で、軸線方向はN－53°－Eを示す。遺構外の南西から北側にかけて浅い掘り込みがあり、この遺構に伴うものと思われるが、性格は不明である。柱穴や周溝と思われるものは検出できなかった。遺構内に土坑は2つ確認できたが、遺構に伴うかどうかはわからない。遺構の中央部に焼土があり、地焼炉と思われる。焼土の厚みは3㎝である。



第24図　第12号住居址出土遺物

第25図　第13号住居址



第26図　第13号住居址出土遺物(5は1/6 6は2/3)

遺物の出土状況と出土遺物　遺物は多く、土器は8,015g検出されている。最も多い地文は平行沈線で、ヘラ切結節浮線文が340gと比率が高い。次いで矢羽状沈線1,240g・無文1,185g・斜行沈線1,160g・渦状沈線930g・結節沈線705g・縄文480gとなっている。他の住居址に較べて無文土器の比率が高く、渦状沈線の比率が低い。第26図に遺物を図示した。図示した遺物はレンズ状沈線が多いが、出土量は275gと少ない。2から4はレンズ状沈線が主体で、2は下部に渦状沈線が施紋されていることが予想され、5はボタン状突起を貼付し、4は口縁部肥厚帯に結節沈線を4条施紋している。6は無文の小型土器で土器下部は指頭圧痕が付いている。1はヘラ切渦状沈線にボタン状突起が施紋された遺物である。各住居址とも若干ではあるがヘラ切り施紋をしているものがあり、1のように沈線間のネガティブな隆帯上にヘラ切りをしている場合や、浮線文上にヘラ切りを施している場合がある。石器は黒耀石片336g・打製石斧4点・打製石斧欠損品7点・打製石斧剥片3点が出土している。他の住居址に較べて石器の出土量は少ないが、打製石斧の保有量は非常に高い。大きさのわかるものは6点あり、長さは7.18㎝から14.45㎝、巾は3.65㎝から5.23㎝で平均すると長さ9.52㎝・巾4.4㎝である。

遺構の時期　時期は、出土遺物より前期終末であろう。

第15号住居址（第27図・図版6-3・14-5・6）

検出状況　遺跡西側の霧ヶ峰山麓からの高台が傾斜していくところに立地し、土坑群の西端に位置する。グリッドC·B-3にあり、付近には4号住居址・15号住居址がある。住居址の一部は調査区外にあり、発掘は行っていない。当初はやや大きめの土坑と思われたが、遺構内部からの土器・石器の出土量が多く、遺構のほぼ中央部より焼土が発見され、また遺構の壁面が広がったことから住居址とした。しかし、壁面は周囲が黒色土であるため、明確ではない。

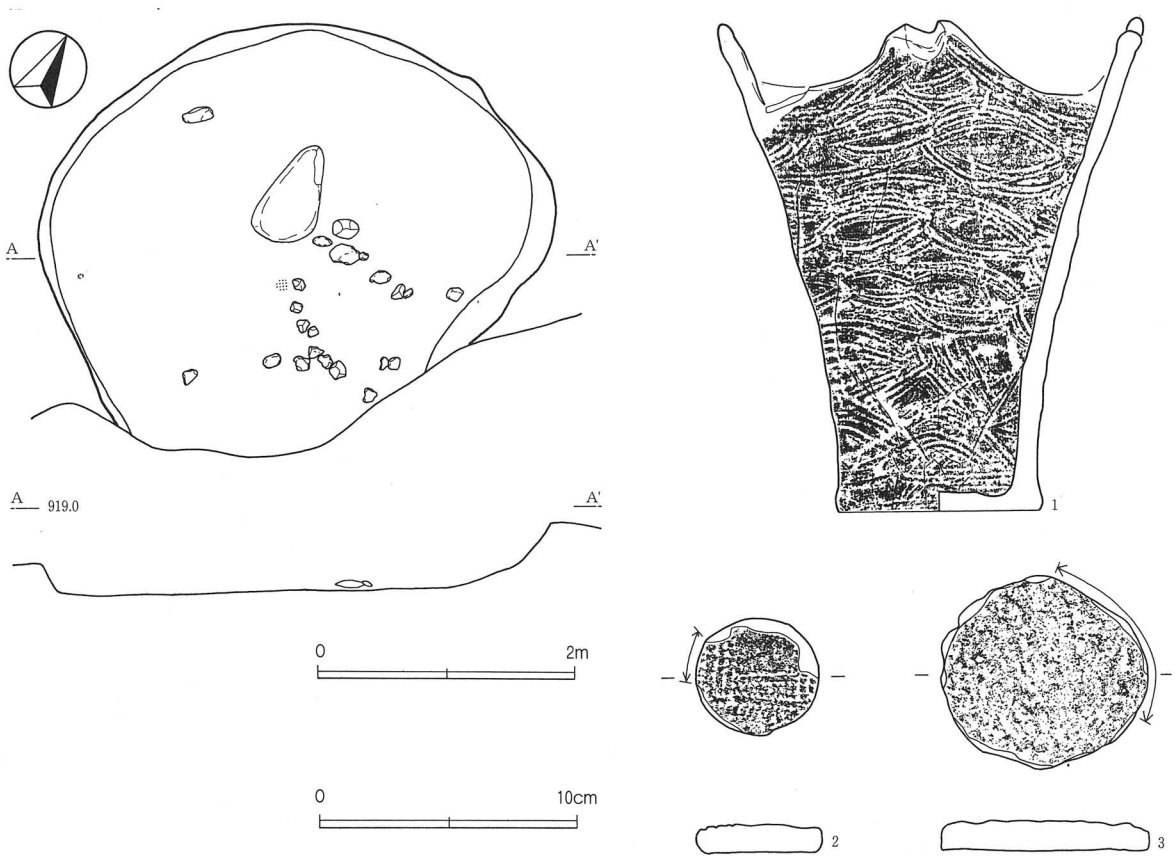
遺構の構造　前述の通り壁面は明確ではないが、確認面から住居址の床面と思われる面までは、東側で56㎝、西側で66㎝を計る。東壁はなだらかに立ち上がっている。周溝は確認できなかった。床面は平らではあるが、住居址のほぼ中央部に1m以上の石が入っており、居住するには非常に不便ではなかったかと思われる。床面より土坑は検出されず、上部構造は不明である。焼土は住居址のほぼ中央部に10㎝の範囲であり、厚みは2.5㎝と非常に浅い。

遺物の出土状況　遺物は他の住居址と較べて少なく、3,905gが検出されている。地文で分類すると、矢羽状沈線770g・渦状沈線文690g、結節沈線文630g・縄文480g・無文215gで、様々な地文の土器を比較的均等に保有している。図示できたのは第27図の3点のみである。1はレンズ状沈線を器面一面に施紋している。レンズ状沈線のある土器は他の住居址に較べてかなり比率が少ない。1の土器は住居址の床面に横倒しになって出土した。2・3は土製円盤で、3は施紋が不明であったが、2は片面に縄文の施紋がある。図の矢印のある範囲は磨かれている部分である。石器は黒耀石片649g・黒耀石製石鏃1・打製石斧4・打製石斧剥片5・土製円盤2点・水晶3gが検出されている。打製石斧の保有量は多い。大きさのわかる打製石斧は7点あり、長さは6.72㎝から14.46㎝、巾は3.15㎝から6.14㎝である。大きさの平均は長さ9.81㎝・巾4.59㎝である。

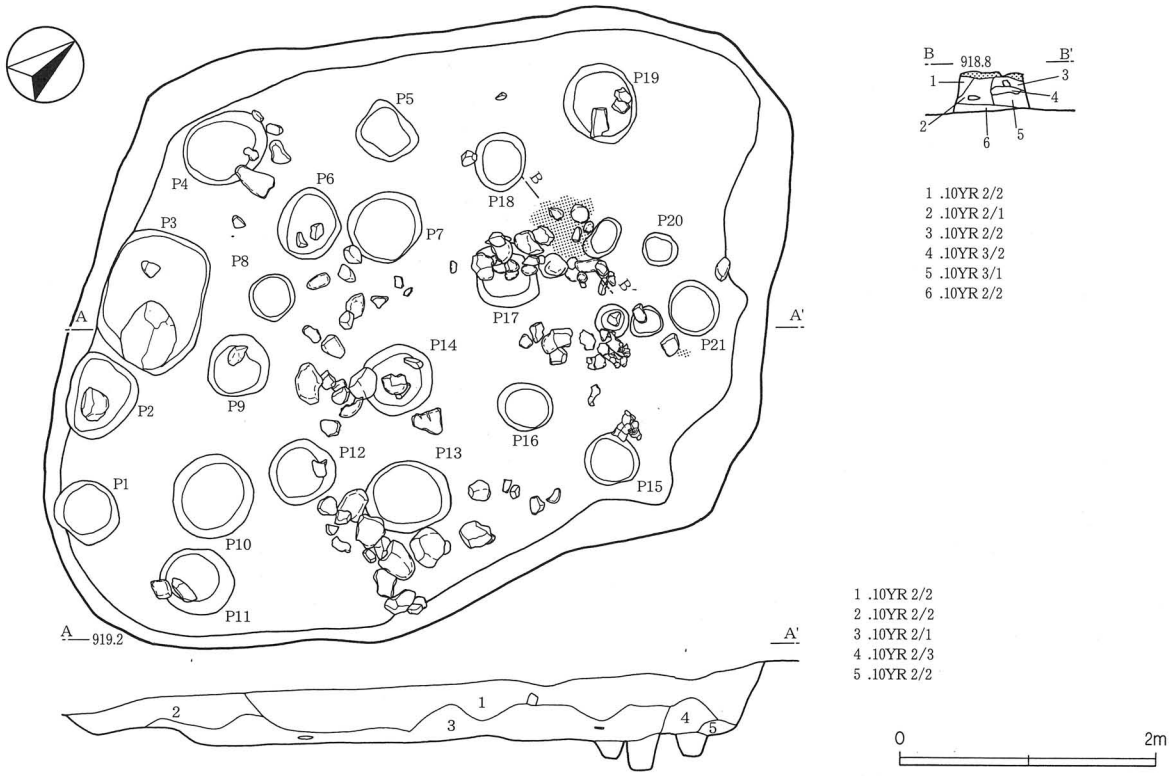
遺構の時期 時期は、出土遺物より前期終末であろう。

第16号住居址（第28・29図・図版6-3 14-7）

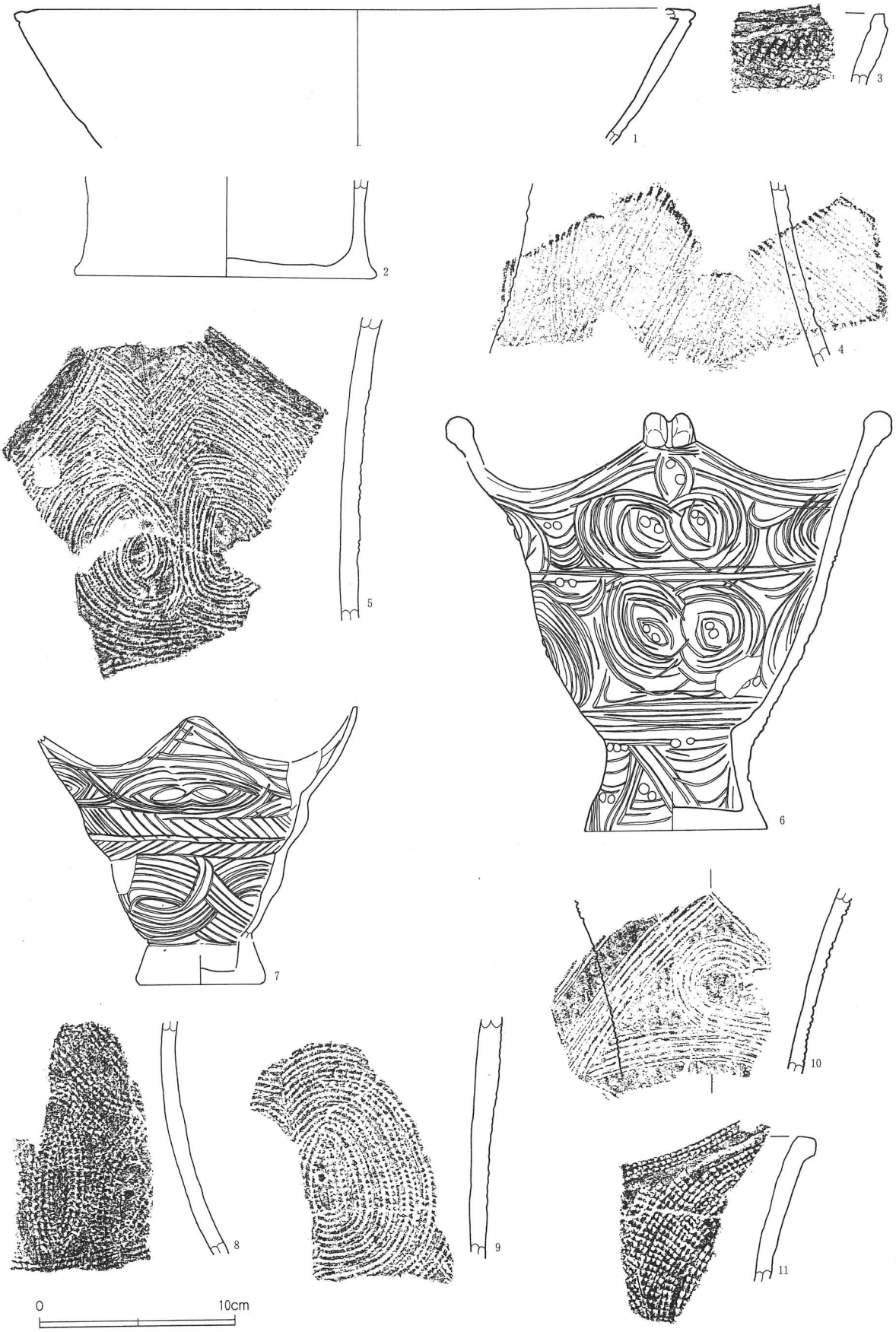
検出状況　遺跡西側の霧ヶ峰山麓からの高台が傾斜していくところに立地し、土坑群の西端に位置する。グリッドB·C－3に位置し、付近に16号住居址がある。住居址覆土が黒色土であるため、周辺との見分けがつかず住居址が発見できたのは発掘が終わりに近づいてからであった。また、西側へ傾斜しているため西壁は浅



第27図　第15号住居址と出土遺物



第28図　第16号住居址



第29図　第16号住居址と出土遺物

かった。

遺構の構造　住居址の平面形は長軸5.52m、短軸4.14mの不整形な隅丸長方形を呈し、軸線方向はN－41°－Eを示す。遺構の掘り込みは比較的深く、北東壁60㎝・南西壁15㎝であった。周溝の確認はできなかった。住居址内からは土坑が23基確認されたが、そのうち柱穴と考えられるものは不明であった。住居址の北寄りから焼土が検出され、地焼炉である。焼土の厚さは5㎝で比較的深い。覆土中からは礫が多く検出され、地山の中にも多くの礫が含まれている。

遺物の出土状況　土器はかなり多く出土しており、8,975gある。そのうち11点を第29図に図示した。地文により分類すると、最も多いのは斜行沈線文系の土器で2,840g、次いで渦状沈線文が1,835gが多い。矢羽状沈線が840g・縄文が660g・無文が意外に多く1,280gあった。1は縄文、2は斜行沈線と縦位置のレンズ状沈線を組み合わせた土器である。5から11までは渦状沈線文系の土器であるが、7は土器上部に横位置のレンズ状沈線を1単位に二つずつ並べ、下部に渦状に沈線を施紋している。6は短い沈線で渦状にし、渦の中心に2単位にボタン状突起を賭付している。8はレンズ状に結節沈線を施紋しており、9は結節渦状文、10は結節凹線文で渦状にしている。各住居址から微量ながら出土しているものに、1の無文の浅鉢がある。各住居址からは破片が必ず見られる。共通している点として口縁部が内側に折れ曲がっている点と、土器表面がきれいに磨かれている点である。器厚は比較的薄い。石器は黒耀石片619g・黒耀石製石鏃3・黒耀石石石錐1・打製石斧5・打製石斧欠損品4・打製石斧剥片1・凹石1が検出されている。打製石斧については保有量が多く、大きさのわかるものが4点ある。長さは8.77㎝から11.18㎝・巾4.27㎝から5.29㎝で、平均すると長さ10.14㎝・巾4.73㎝となる。

遺構の時期　時期は出土遺物から前期終末と思われる。

2．土坑（第30～38図・表・図版9-1～11-5）

縄文時代に属すると思われる土坑は182基検出している。土坑の分布は本調査を行った調査区のほぼ全域より出土しており、住居址の付近にあることが多い。このような例は、市内では北山菖蒲沢A・師岡平・威力不動尊東遺跡や、時期が下るが稗田頭C遺跡に見ることができる。

土坑の分類　土坑の詳細については土坑一覧表を参照していただきたいが、分類すると平面形から第Ⅰ群：円形か隅丸方形の土坑・第Ⅱ群：楕円形や隅丸長方形の土坑・第Ⅲ群：不正形な土坑の三つに分類できる。

第Ⅰ群　平面形が円形か隅丸方形の土坑。

この土坑は、断面形により、次の5類に分けることができる。

1類　断面形が盥状の土坑。円形の土坑の中では最も多くの割合を占める土坑。35基を検出している。この土坑は壁面がしっかりしており、底部は平らに掘られている。土坑の最も浅いのは焼土址6の20㎝で、最も深いのは22土の93㎝である。平均すると50㎝であり、比較的深い土坑が多いと言える。平面形が隅丸方形のものでは3基検出され、52㎝・54㎝・80㎝といずれも深い。特に深い土坑は盥状というよりも、樽を半分に割った形に似ているので、樽状と言ってもいいのかもしれない。土坑内に焼土を持つものが4基あり、いずれも土坑確認面や中程に入っており、土坑が埋まるか埋める過程で焼成を受けたものと考えられる。

また、26基の土坑から土器や石器が発掘されている。石器は主に黒耀石の剥片が多いが、打製石斧やその製作過程で出たと思われる剥片が確認されている。この中で特に注目されるのは78号土坑である（第34図）。この土坑からは2,868gの黒耀石片が出土している。土坑の一部は3号住居址によって破壊されているが、それでも多くの黒耀石が出土した。大きさは縦6.7㎜から135.2㎜・横3.3㎜から62.3㎜、厚さは0.7㎜、重さは1ｇ

から244ｇである。平均すると縦43.4㎜、横27.9㎜、厚さ16.2㎜、重さは27.8ｇである。大きさの比率は、縦30㎜から60㎜、横は20㎜から36㎜の間に集中している。黒耀石は土坑の上部から下部まで出土しているが、特に土坑中央から上部にかけて密集して出土する傾向にある。土器の出土がなく時期の決定はできないが、周囲には縄文時代前期終末の遺構が多いことから、この時期の遺構なのであろうか。

2類　断面形が巾着状またはフラスコ状の土坑。口径よりも底径が大きい土坑のことをいう。74土・83土・120土の3基である。全体の比率からすると非常に少量である。土坑は74土から54㎝・70㎝・33㎝といずれも深い。遺物は120土で52gの黒耀石片を出土しており多いが、他はあまり多い方ではない。

3類　断面形が皿状の土坑。13基確認している。この土坑は壁面と底部の境界が曖昧で、掘り方がしっかりしていない。深さは119土の18㎝から97土の50㎝で、平均は30㎝と浅い。遺物の出土量は少なく、混入の可能性も否定は出来ない。

4類　断面形が不正形の土坑。98土と138土の2基が確認されている。98土は焼土をもっており、底部より若干離れた壁際より検出されている。遺物の出土量は少量である。

5類　ピット状の土坑。25土と26土の2基であるが、両方とも67㎝と64㎝でかなり深い。何らかの柱に関する遺構と思われるが、特に他の遺構との関連性も見出せない。

第Ⅱ群　平面形が楕円形や隅丸長方形の土坑。この土坑は以下の4類に分類される。

1類　断面形が盤状の土坑。最も数が多く46基が確認されている。第Ⅰ群1類と同様に掘り方がしっかりとしており、底面も平らに造られている。最も浅いのは147土の23㎝で、最も深いのは41土の131㎝である。平均すると47㎝であるが、90㎝以上の土坑と、それ以下のものでは、規模から異なる遺構と考えられる。90㎝以下の土坑は、第Ⅰ群1類と同様な遺構と考えられる。この中で、焼土を持つ土坑は18土と53土、101土の3基がある。いずれも出土遺物は豊富であり、53土の土坑内からは玦状耳飾が出土している（第33図・第38図3・図版9-6・7）。また、遺構確認面20㎝下より焼土が検出されている。

2類　断面形が巾着状またはフラスコ状の土坑。口径よりも底径が大きい土坑のことをいう。6基が確認されている。最も浅い土坑は50土の36㎝、最も深いのは106土の94㎝で、平均は54㎝と深い傾向を示す。掘り方はしっかりとしている。106土は底部よりやや浮いた状態で板状の礫が底部と水平に埋められていた。

3類　断面形が皿状の土坑。25基確認している。土坑の深さは10㎝から34㎝と浅く、土坑の壁面と底部の境界が曖昧で掘り方もしっかりしていない。遺物が出土する土坑は少なく、あったとしても非常に少量である。

4類　ピット状の土坑。73土と151土の2基を確認している。土坑の深さは63㎝、73㎝と深い。どちらも、口径とだいたい同じ巾で、斜めに穴が穿たれているのが特徴である。

第Ⅲ群　平面形が不正形な土坑。この土坑は、断面形から次の3類に分類できる。

1類　断面形が盤状の土坑。7基の土坑が確認された。土坑の深さは25㎝から67㎝の深さで、掘り方はしっかりしている。基本的にはⅠ群1類に準じた土坑であると思われる。

2類　断面形が皿状の土坑。19基の土坑が確認されている。規模は平面形の上端が97㎝から187㎝まであり、平均すると100㎝前後のものが多い。深さは18㎝から40㎝の深さで、平均すると28㎝となり、皆一様に浅い。焼土址7のみではあるが、焼土を伴うものもある。ほぼ全ての土坑より遺物が出土しており、114号土坑からは25㎝大の礫の下より渦状沈線文の大きな破片が出土している（第33図・第38図10)。

3類　断面形が不正形の土坑。5基確認されている。深さは2種類あって、一つは、31土と159土の36㎝と45㎝(1種)、55土と57土の80㎝、79㎝(2種)である。1種には共通性はあまり感じられないが、2種には何らかの共通性があると思われる。2種はいずれもかなり深く、他の土坑と切り合っている。57土からは焼土が確認

面で確認されており、擦石が出土したほか、66gもの黒耀石が検出された（第33図）。55土からは打製石斧や石皿が検出された（第33図）。特に石皿は当遺跡からはあまり出土していないため、特殊な遺物を投げ込んでいるという感が強い。

土坑出土の遺物（第38図）土坑出土の遺物については出土量が多いため、限られたスペースでその全てを図示することはできない。そのため、特徴的な遺物のみ取り上げる。

1・2・3は53号土坑（第33図）出土遺物である。3は玦状耳飾りで、形状は一方が欠けていて、欠けている部分の近くに穴が穿たれている。耳飾りを円形にするにあたって、周辺を打欠いた調整痕が残っており、打欠いた後に、磨いて表面を滑らかにしている。色は黒色で滑石製であると思われる。この土坑からは第38図1・2が検出している。1は地文が縄文で、口縁部付近に波状に粘土紐を貼付したもの。3は斜行沈線の上に結節浮線文をレンズ状に貼付したもので、いずれも縄文前期終末の遺物であると思われる。

9は110号土坑出土の遺物である。土坑内からは縄文前期終末の土器が多く出土しているが、混入であろう。

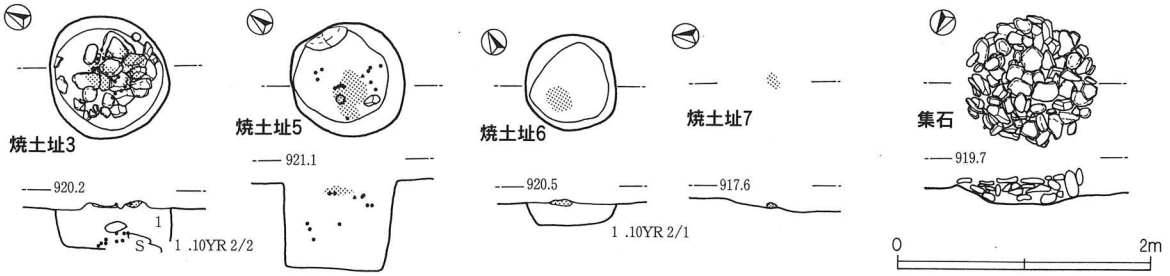
13は119号土坑（第35図）出土の遺物で底部は円形に見えるが、胴下部が屈曲しており、土器に角が付いている。地は無文であるが、腰部あたりに横位帯状に沈線で区画されており、区画内は細かく刻み目がなされている。底部には網代痕が残る。時期は不明である。

15は135号土坑（第36図）出土の土器で、斜行沈線の間に縦のレンズ状沈線を施紋し、ボタン状突起を貼付している。135号土坑内からは石皿も出土している。

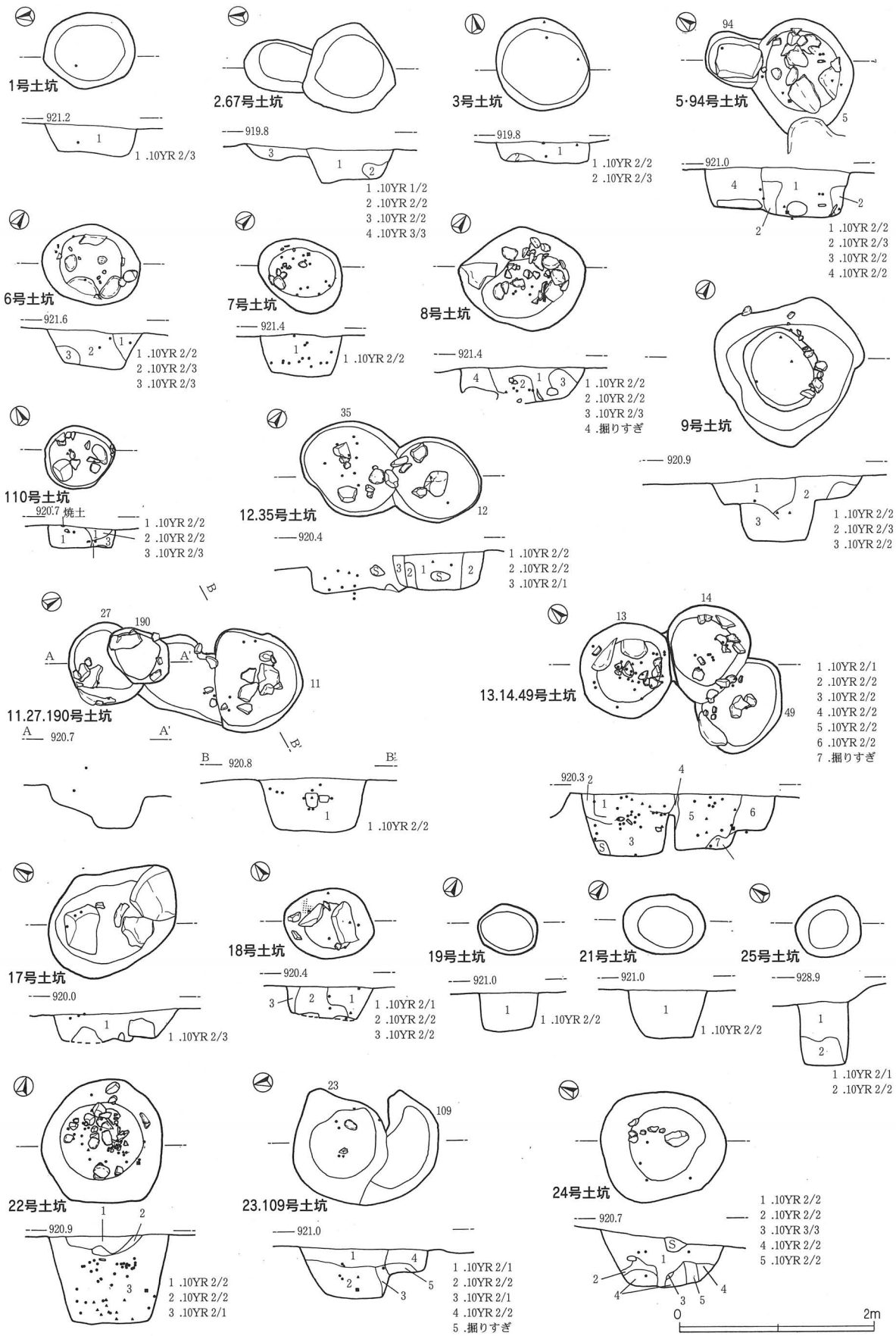
17は153号土坑（第36図）出土の土器で、土坑の底部付近に横倒しで出土した。土器は波状口縁で、下に行くにしたがって器形が窄まっていき、底部付近で若干広がる形態をしている。上部は結節渦状文を貼付し、土器の中程で横位の結節浮線文、ここから間隔を開けて結節浮線文を数条垂下させている。土器下半の地文は矢羽状沈線で施紋されており、2単位ずつでボタン状突起を貼付している。

3．集石（第30図・図版5-3・8-3）

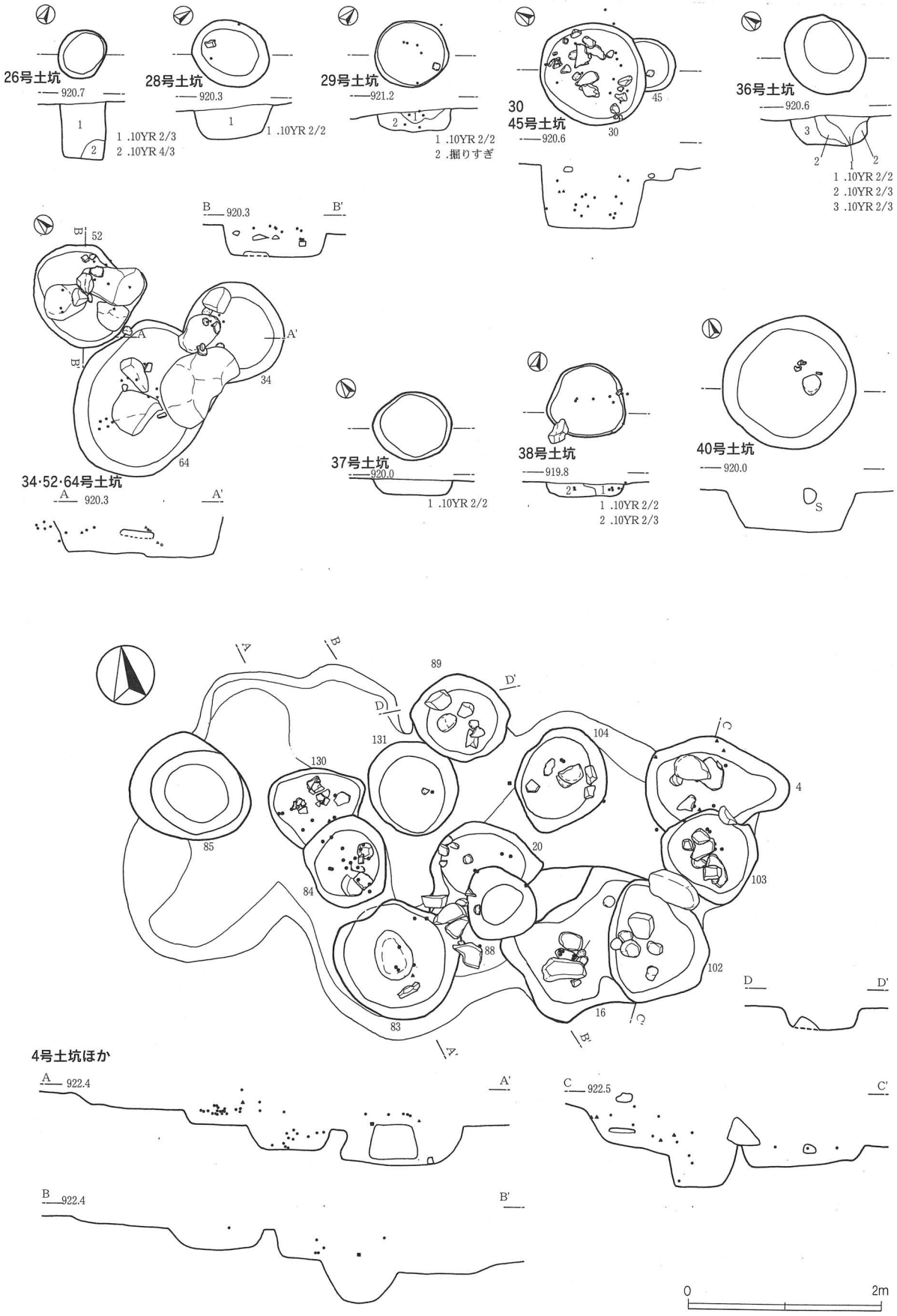
グリッドH-16に位置し、12号住居址内にある。おそらく18号住居址とも重複していたと思われる。しかし、重複していたにもかかわらず依存状態は良好で、後世に作られた遺構によって破壊されたという形跡はない。この集石は東西・南北とも102cmというほぼ正円に近い形で2cmから20cmまでの大きさの礫を20cmの高さにわたって積み上げたものである。積み上げるときに、集石の下部に浅い不整形な土坑を掘り、その中に集石を積み上げていることがわかる。礫は上部が平らになるように積み上げてある。礫中より遺物の出土がなかったため、明確な遺構の時期はわからないが、12号住居址の床面より若干下がった場所から検出されたため、縄文時代前期終末以前の遺構であることが考えられる。



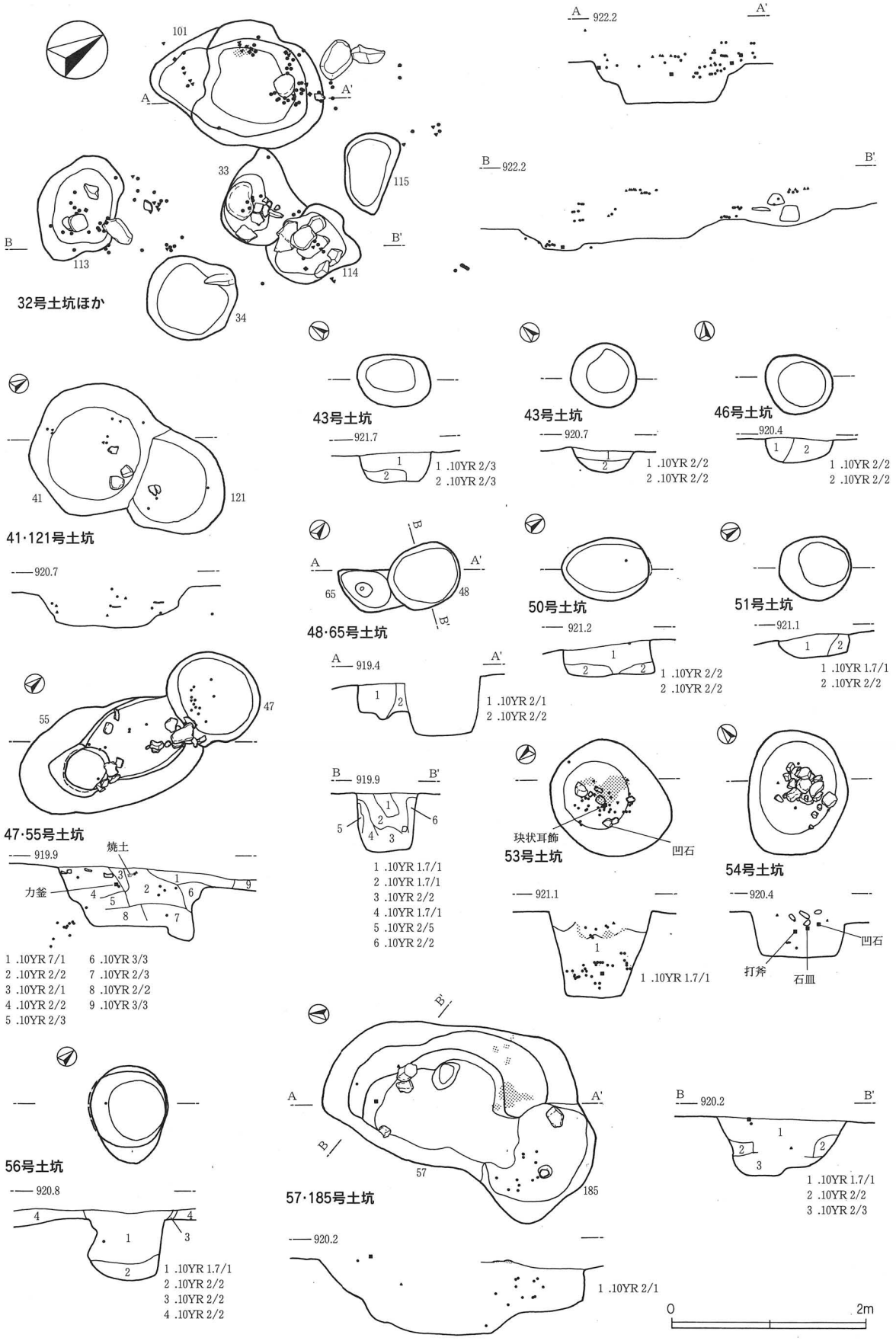
第30図　縄文時代の土坑(8)



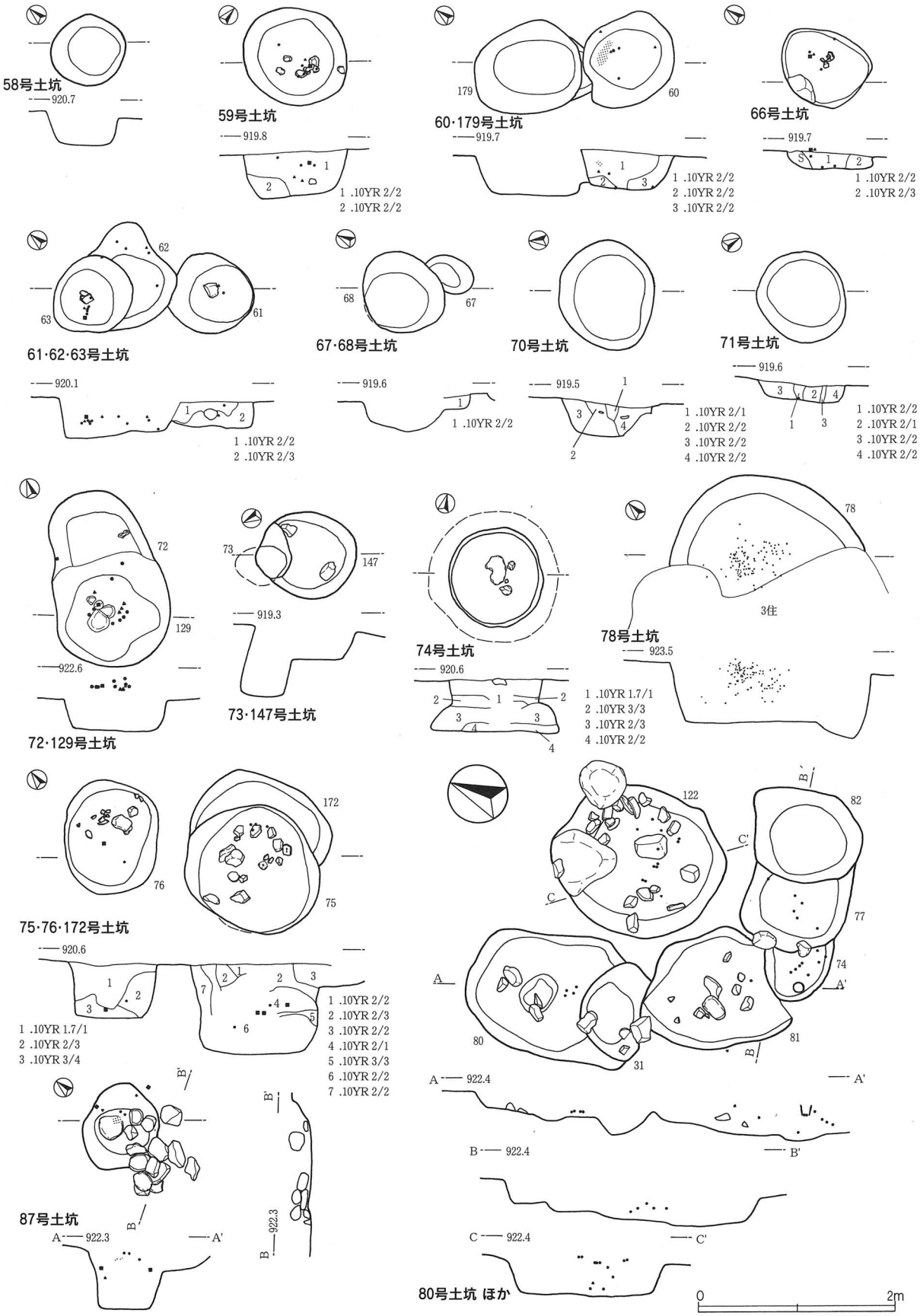
第31図　縄文時代の土坑(1)(1/6)



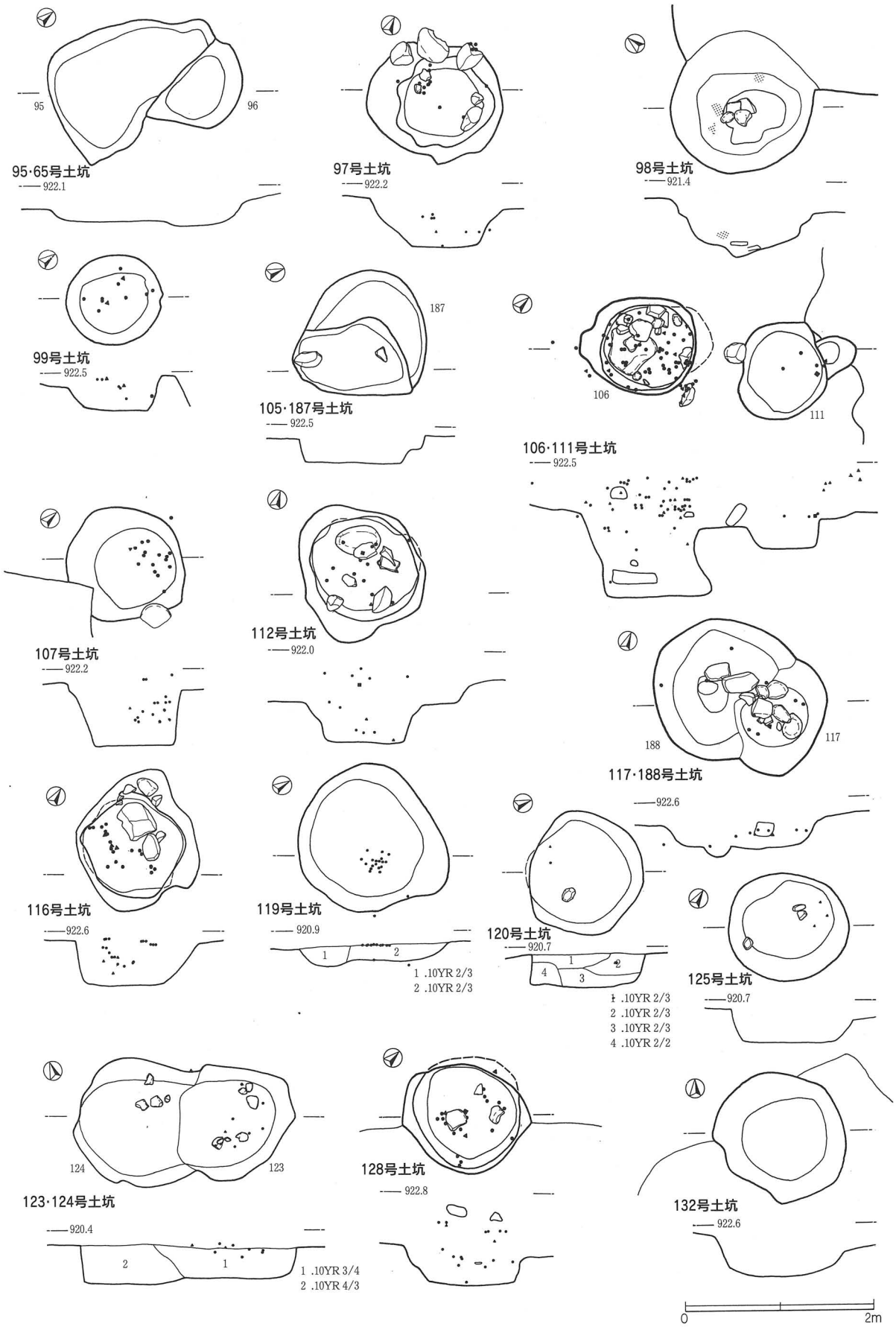
第32図　縄文時代の土坑(2)(1/60)



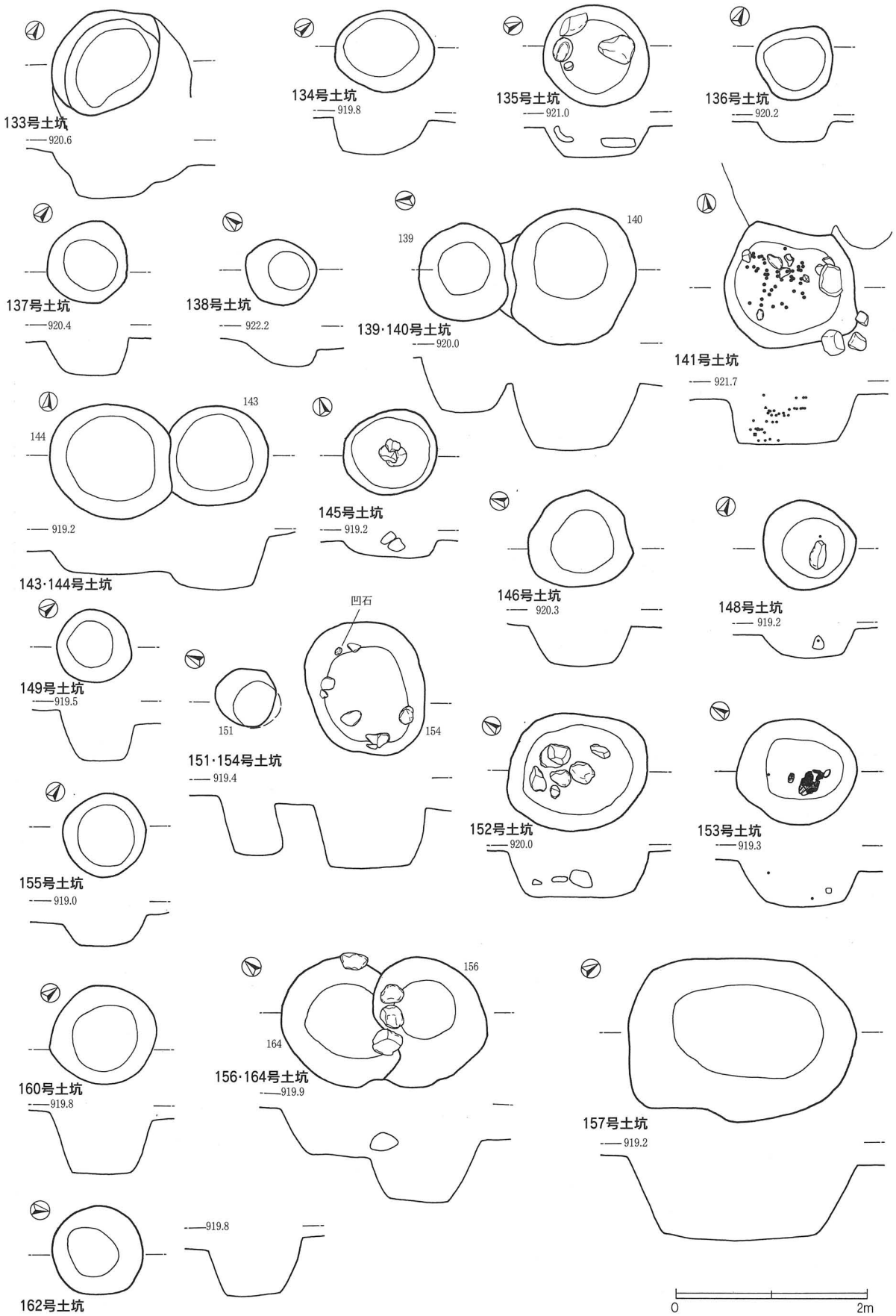
第33図　縄文時代の土坑(3)(1/6)



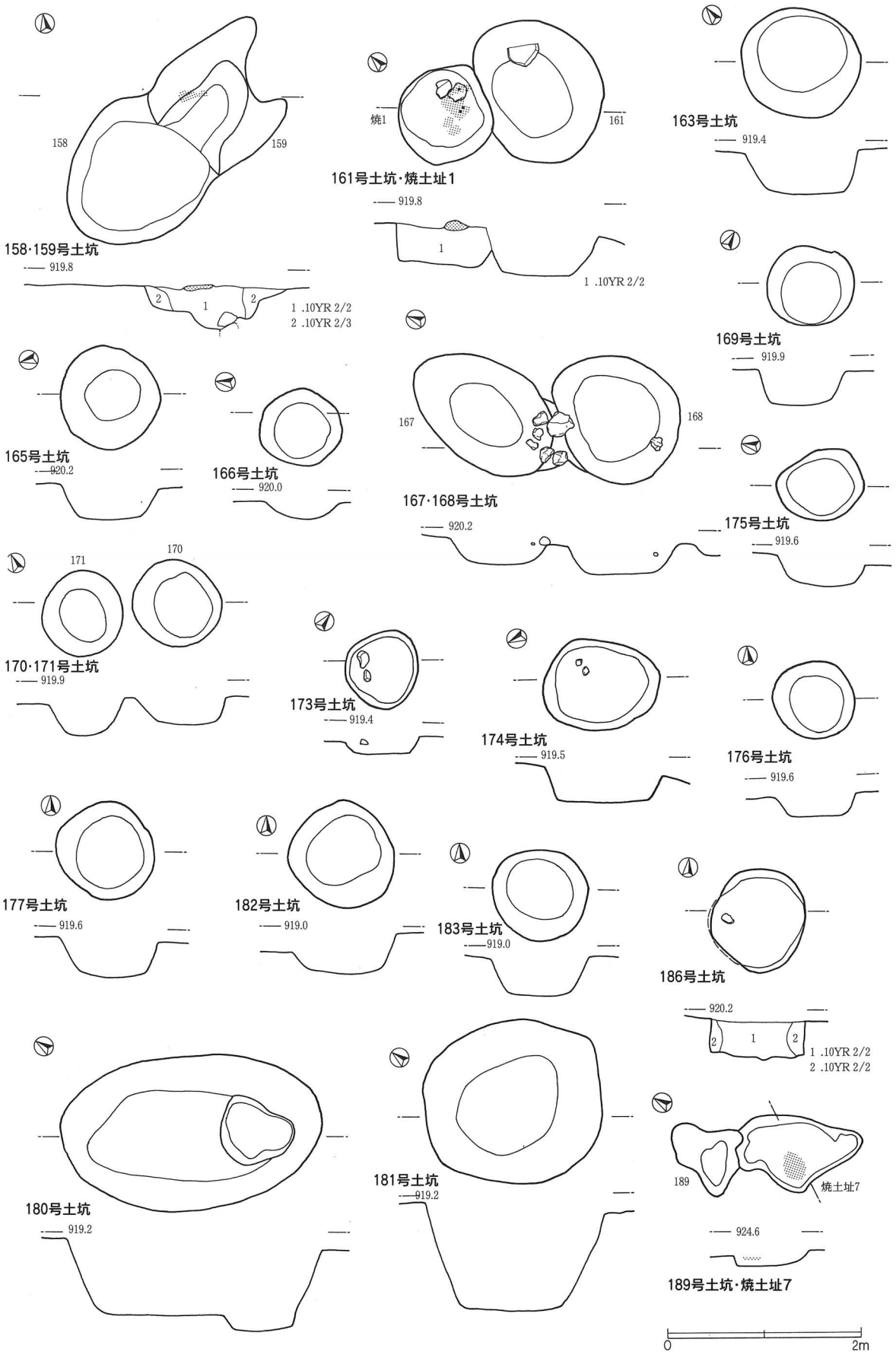
第34図　縄文時代の土坑(4)



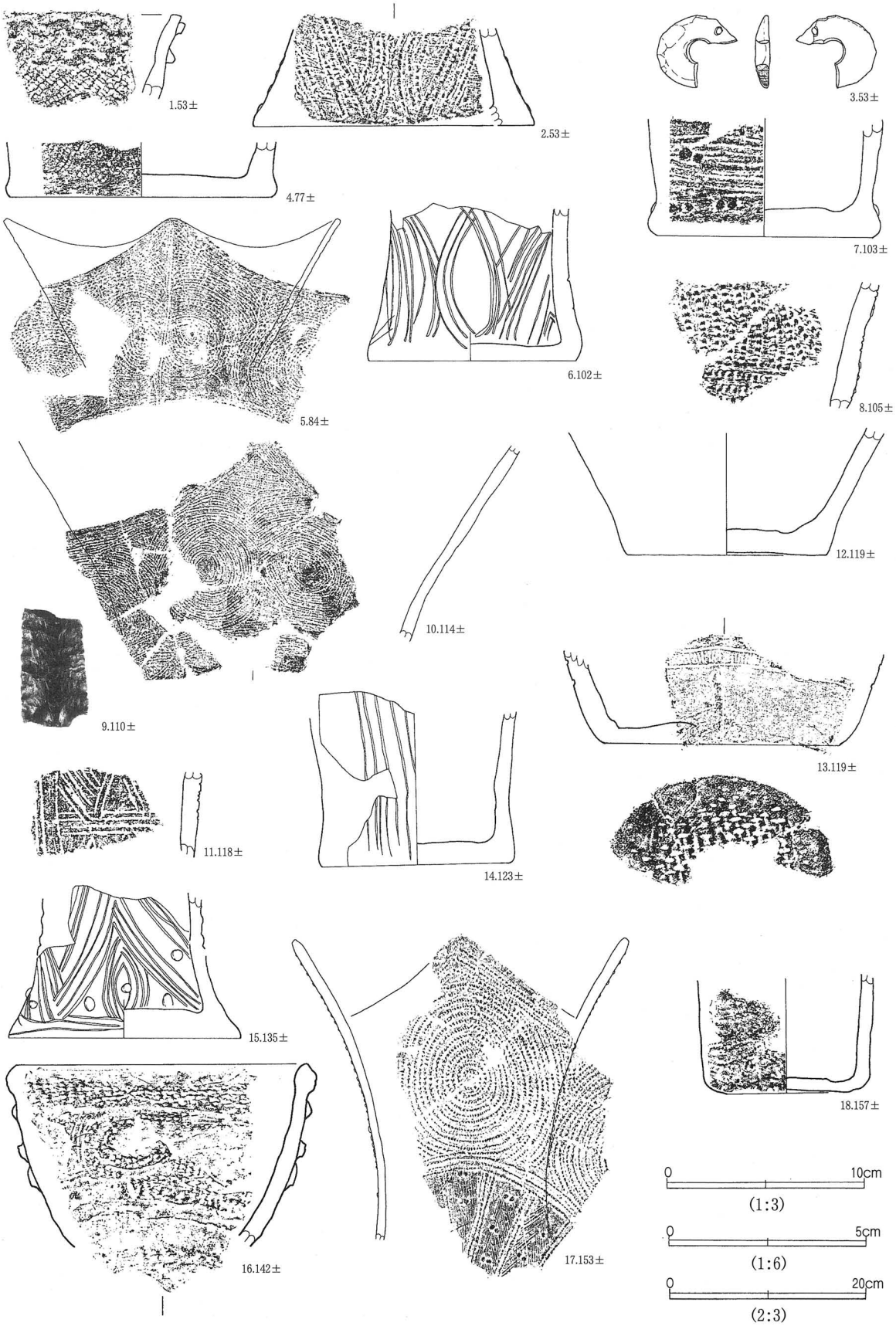
第35図　縄文時代の土坑(5)



第36図　縄文時代の土坑(6)



第37図　縄文時代の土坑(7)



第38図　縄文時代の土坑出土遺物(5・10・17は1/6・9は2/3)

縄文時代土坑一覧表

土坑番号	検出位置	平面形	断面形	土層状態	上端規模		下端規模		長軸方向	深さ(cm)	重複関係	出土遺物	時期	備考
					長軸	短軸	長軸	短軸						
1	E-5	楕円形	盤	単一	96	79	85	59	N- 3°-E	32		土器	中初	
2	C-5	楕円形	皿	単一	(102)	54	(72)	36	N-11°-E	18	69土			
3	E-5	円形	盤	単一	105	95	87	76	N-43°-W	24		黒耀石片13g	前末	
4	H-15	不正形	盤		152	(105)	124	(74)	N-89°-E	58	103土	土器		
5	E-5	楕円形	盤	三角堆土	(67)	55	56	46	N-30°-W	50	94土	土器・打製石斧片1・黒耀石片67g	前末	
6	E-5・6	楕円形	盤	三角堆土	102	85	65	62	N-60°-E	40		土器・凹石1	前末	
7	E-6	楕円形	盤	単一	86	78	69	52	N-45°-E	42		土器・打製石斧1・打製石斧片1	前末	
8	D-6	不正形	皿		118	105	93	62	N-77°-E	38		土器・黒耀石片14g	前末	
9	E-5	隈丸長方	盤	三角堆土	143	142	88	72	N-21°-E	67		土器・黒耀石片11g	前末	
10	D-6	円形	盤	三角堆土	73	68	64	57	N-50°-W	24		土器・黒耀石片15g	前末	
11	D-5	楕円形	盤	単一	108	(96)	98	86	N-62°-W	57	27土	土器	前末	
12	D-5	円形	盤	三角堆土	92	90	90	80	N-60°-E	40	35土	土器・黒耀石片13g	前末	
13	D-5	円形	盤	レンズ状	103	95	71	67	N-34°-E	66	14土	土器・黒耀石製石鏃・黒耀石片17g	前末	
14	D-5	楕円形	盤	三角堆土	107	83	76	68	N-47°-E	58	13・49土	土器・黒耀石片12g・凹石1	前末～中初	
16	H-15	楕円形	皿		(176)	124	(139)	82	N-71°-E	18	102・103土	土器・打製石斧片1・凹石1		
17	D-6	楕円形	皿	単一	143	110	(105)	82	N-55°-W	30		土器	前末	
18	D-5	楕円形	盤	三角堆土	88	75	51	48	N-42°-W	34		土器・黒耀石片10g	前末	焼土
19	E-5	楕円形	盤	単一	64	53	57	40	N-88°-E	40				
20	H-15	楕円形	皿		116	(74)	89	(62)	N-83°-E	34	88土			
21	E-5	楕円形	盤	単一	85	64	55	42	N-58°-E	50				
22	E-4	円形	盤	レンズ状	132	125	86	81	N-12°-W	93		土器・黒耀石片83g・打製石斧片1	前末	
23	E-5	円形	盤	レンズ状	106	98	79	67	N-64°-W	55	109土	土器・凹石1・黒耀石片14g	前末	
24	D-5	楕円形	皿	三角堆土	130	114	79	76	N-26°-W	60		土器	前末	
25	E-5	円形	ピット		68	62	46	38	N-46°-E	67				
26	E-4・5	円形	ピット		55	46	47	37	N- 5°-W	64				
27	D-5	円形	皿		87	80	60	(60)	N-61°-W	45	190土	土器・打製石斧片1・軽石1	前末	
28	D-5	楕円形	盤	単一	82	70	61	48	N-51°-E	32		土器	前末	
29	D-5	円形	皿	レンズ状	78	73	67	68	N-61°-E	26		土器	前末	
30	D・E-5	円形	盤		118	108	103	93	N- 1°-E	72	45土	土器・黒耀石製石鏃1・黒耀石片10g	前末	
31	H-14	不正形	不正形		93	(76)	54	(50)	N-74°-W	36	80・81土	土器		
32	G-14	不正形	皿		(89)	(75)	(66)	(59)	N-79°-E	25	101土	土器		
33	G-14	不正形	皿		86	(69)	62	47	N-36°-W		114土	土器		
34	D-5	円形	盤		104	(100)	(75)	(65)	N-26°-E	44	64土	土器・黒耀石片9g	前末	
35	D-5	楕円形	盤		110	94	98	84	N-68°-W	28	12土	土器・凹石1・黒耀石片2g	前末	
36	D-5	楕円形	皿	三角堆土	91	76	58	48	N-14°-E	32				
37	D-5	楕円形	皿	単一	82	73	68	63	N-51°-W	16				
38	C-5	隅丸方形	皿	三角堆土	83	77	78	73	N-76°-E	13		土器・黒耀石片2g	前末	
39	G-14	円形			93	93	68	59	N-65°-E	27				
40	D-4・5	円形	盤		145	138	114	107	N-38°-E	43		打斧片1		
41	F-16	楕円形	盤		(125)	106	(91)	82	N-73°-E	131	121土			
42	E-4	隅丸長方	盤	水平堆積	76	55	50	34	N-17°-W	30				
43	D・E-5	円形	皿	水平堆積	67	67	45	42	N-23°-W	26				
45	D-4・5	楕円形	皿		(70)	58	(60)	(48)	N-37°-W		30土			
46	D-4・5	楕円形	皿	三角堆土	72	63	50	46	N-57°-W	26				
47	D-4	楕円形	盤		98	87	86	73	N-10°-E		55土			
48	D-4	楕円形	皿	レンズ状	78	65	66	56	N-22°-E	61	65土			
49	D-5	楕円形	盤	単一	103	89	90	74	N-53°-E	36	14土			
50	E-5	楕円形	巾着	三角堆土	92	67	87	50	N-48°-E	36		土器	前末	

縄文時代土坑一覧表

土坑番号	検出位置	平面形	断面形	土層状態	上端規模		下端規模		長軸方向	深さ(cm)	重複関係	出土遺物	時期	備考
					長軸	短軸	長軸	短軸						
51	E-5	円形	皿	三角堆土	75	68	54	44	N-76°-E	26		土器	前末？	
52	D-5	楕円形	盤		112	95	102	87	N-14°-E	32	64土	土器・打製石斧片1・黒耀石片10g	前末	
53	E-5	楕円形	盤	レンズ状	127	108	72	67	N-65°-E	90		土器・打斧1・打斧片2・玦状耳飾1・凹石1・黒耀石片29g	前末	焼土
54	D-5	隈丸長方	盤		130	103	98	79	N-64°-E	50		土器・擦石1・黒耀石片32g	前末？	
55	D-4	不正形	不正形	三角堆土	196	112	(140)	(75)	N-20°-E	80	47土	土器・打斧1・石皿1・黒耀石片7g	前末	
56	E-4	楕円形	巾着	レンズ状	103	80	63	60	N-32°-W	72		土器・打斧片1・黒耀石片32g	前末	
57	D-4・5	不正形	不正形	三角堆土	265	152	204	126	N-15°-E	79	185土	土器・擦石1・黒耀石片66g	前末	焼土
58	D-5・6	円形	盤		75	72	50	50	N-63°-E	35				
59	C-4・5	円形	盤	三角堆土	113	103	80	76	N-80°-W	50		土器・打斧片1・黒耀石片24g	前末	
60	C-4	円形	盤	三角堆土	95	91	75	63	N-42°-W	40	179土	土器・打斧片1・黒耀石片5g	前末	焼土
61	C・D-5	円形	盤	レンズ状	85	82	68	62	N-38°-W	28	62土	土器・打斧片3・黒耀石片33g	前末	
62	D-5	楕円形	盤		(116)	102	(100)	65	N-90°-W	38	61・63土			
63	D-5	楕円形	盤		89	80	62	55	N-90°-W	43	62土			
64	D-5	楕円形	盤		169	137	151	110	N-70°-E	35	34・35土	土器・黒耀石片5g	前末	
65	C・D-4	不正形	盤	三角堆土	(76)	43	55	38	N-33°-E	37	48土			
66	C-4・5	楕円形	皿	三角堆土	95	80	92	70	N-20°-E	18		土器・黒耀石製石匙1・黒耀石片4g	前末	
67	C-4・5	楕円形	皿	単一	(55)	47	35	20	N-4°-E	15	68土			
68	C-5	楕円形	巾着		93	80	66	58	N-19°-E	38	67土	土器	前末	
69	C-5	不正形	盤		94	89	67	63	N-75°-W	35	2土			
70	C-4	楕円形	皿	レンズ状	127	98	90	70	N-84°-W	50		土器	前末	
71	C-4	楕円形	皿		100	88	75	67	N-73°-E	18		土器・黒耀石片5g	前末	
72	H-15	隅丸長方			(132)	110	(92)	72	N-90°-W	23	129土			
73	C-4	楕円形	ピット		(44)	38	(34)	35	N-75°-W	73	147土			
74	D-4	円形	巾着	水平堆積	98	98	142	134	N-24°-W	54				
75	D-4	楕円形	盤	レンズ状	146	129	123	121	N-27°-W	96	172土	土器・打斧片2・黒耀石片9g	前末	
76	D-4	楕円形	盤	レンズ状	120	97	102	80	N-52°-E	60				
77	G-14・15	隅丸長方			135	(110)	86	(80)	N-45°-W	34	79・82土	土器・黒耀石片7g	前末	
78	G-7	円形	盤		(200)	(190)	(160)	(142)	N-57°-W	74	3住	黒耀石片2868g		
79	G-14	楕円形	皿		(90)	70	(73)	(62)	N-84°-E	45	77・81土	土器・黒耀石片16g	前末	
80	H-14	隅丸長方	皿		(193)	135	(130)	126	N-10°-E	30	31土	土器・黒耀石片4g	前末	
81	H-14	不正形	皿		(156)	122	(140)	105	N-26°-W	40	31・79土	土器	前末	
82	G-14・15	楕円形	皿		127	103	80	75	N-22°-E	46	77土			
83	H-15	円形	巾着		130	122	113	105	N-63°-E	70	20・88土	土器・打斧片2・黒耀石片8g	前末	
84	H-15	隅丸長方	皿		98	78	72	65	N-10°-E	44	130土	土器・黒耀石片24g	前末	
85	H-14	楕円形			125	102	68	57	N-57°-W	78		土器・打斧片2・黒耀石片30g	前末	
87	H-14	不正形	盤		95	75	60	49	N-66°-E	67		土器・打斧片2・黒耀石片83g	前末	焼土
88	H-15	円形	盤		82	77	50	36	N-36°-E	80	16・20土	土器・打斧1・黒耀石片32g	前末	
89	H-15	楕円形	盤		105	83	72	65	N-89°-E	40	131土	土器	前末～中初	
94	E-5	隅丸長方	盤	単一	112	105	90	78	N-21°-E		5土	土器	前末	
95	G-15	不正形	皿		187	(100)	172	77	N-9°-E	18	96土	土器	前末	
96	G-15	不正形	皿		107	(96)	73	(62)	N-5°-W	25	95土	土器・打斧1・黒耀石片18g	前末	
97	G・H-14	円形	皿		147	135	83	80	N-68°-E	50		土器・黒耀石片25g	前末	
98	H-17	円形	不正形		160	152	110	88	N-60°-W	60		土器	前末・後前	焼土
99	H-15	円形	盤		103	97	75	57	N-17°-E			土器・打斧片1・チャート製石匙1・黒耀石製未製品1・黒耀石片50g	前末	
101	G-14	楕円形	盤		180	135	80	76	N-47°-E	47	32土	土器・打斧1・打斧片2・凹石2・黒耀石片99g	前末	焼土
102	H-15	不正形	盤		130	102	108	80	N-18°-W	36	16土・103土	土器	前末	

縄文時代土坑一覧表

土坑番号	検出位置	平面形	断面形	土層状態	上端規模		下端規模		長軸方向	深さ(cm)	重複関係	出土遺物	時期	備考
					長軸	短軸	長軸	短軸						
103	H-15	円形	盤		103	100	85	80	N-10°-W	39	4・102土	土器・黒耀石片6g	前末	
104	H-15	楕円形			117	94	90	72	N-16°-E	70		土器・打斧片1	前末	
105	H-15	不正形	盤		140	132	(110)	115	N-51°-W		187土	土器・黒耀石片2g	前末	
106	H-15	楕円形	巾着		123	104	114	86	N-52°-E	94		土器・黒耀石片38g	前初・前末	底部付近に板状礫
107	H-15	円形	盤		125	120	83	80	N-39°-E	69		土器・黒耀石片8g	前末	
109	E-5	不正形	皿		130	(65)	90	50	N-37°-W		23土			
110	H-15	不正形	不正形		130	102	108	84	N-12°-W			土器・凹石1・黒耀石片15g・チャート製有茎尖頭器1	前末	
111	H-15	円形	盤		110	93	86	77	N-12°-W	25		土器・黒耀石片44g	前末	
112	G-14	楕円形	巾着		145	125	107	100	N-28°-W	42		黒耀石製未製品1・黒耀石片37g	前末	
113	G-14	不正形	皿		120	84	82	60	N-29°-W	25		土器・凹石1・黒耀石片36g	前末	
114	G-14	不正形	皿		97	92	63	62	N-90°-W	20	33土	土器・打斧1・黒耀石製石鏃1・黒耀石片21g		
115	G-14	不正形			85	50	70	37	N-43°-W			土器・黒耀石片3g		
116	H-15	隅丸方形	巾着		130	125	105	102	N-15°-E	50		土器・黒耀石片19g	前末	
117	H-15	隅丸方形	皿		154	152	121	(104)	N-87°-E	23	188土	土器・黒耀石製未製品1・黒耀石片63g	前末	
119	F・G-16	円形	皿	単一	167	152	120	112	N-67°-E	18		土器	前末	
120	F-16	円形	巾着	三角堆土	130	120	112	107	N-44°-E	33		土器・黒耀石片52g	前末	
121	F-16	円形	皿		(145)	140	97	92	N-47°-E	43	41土	土器・黒耀石片38g	前末	
122	H-15	楕円形	盤		182	160	150	118	N-9°-W	44		土器		
123	F-15・16	楕円形	盤	単一	(150)	135	(126)	105	N-68°-W	43	124土	土器・石鏃未製品1・黒耀石片2g	中初	
124	F-16	楕円形	盤	単一	(135)	110	(123)	90	N-77°-W	34	123土	土器		
125	F-16	楕円形			130	113	98	83	N-70°-W			土器・黒耀石片25g	前末	
126	H-16				87	85	71	69	N-46°-E			土器	前末	
127	H-15				108	100	80	70	N-21°-E			土器・打斧2・打斧片1・黒耀石片52g	前末	
128	H-15	楕円形	巾着		130	113	103	91	N-78°-E	43		土器・打斧片2・黒耀石片53g	前末	
129	H-15	楕円形	盤		(132)	110	(92)	72	N-9°-W	37	72土	土器・打斧片2・黒耀石片18g	前末	
130	H-14・15	不正形	皿		104	(85)	90	(73)	N-65°-E	24	84土	土器・黒耀石片1g		
131	H-15	楕円形	皿		103	93	83	68	N-2°-W	10	89土			
132	G-17	不正形	盤		141	126	91	85	N-75°-W	53		土器	前末	
133	G-17	楕円形	盤		113	103	92	62	N-41°-E	53		土器・打斧片1・黒耀石片43g	前末	
134	D-4	楕円形	皿		98	88	78	62	N-0°-W	40		土器・黒耀石片24g	前末	
135	D-4	円形	盤		114	107	80	(76)	N-37°-E	33		土器・打斧1・石皿1・黒耀石片56g	前末～中初	
136	D-4	隅丸長方	皿		80	77	62	55	N-42°-E	22				
137	D-4	円形	盤		91	85	60	50	N-0°-W	43		土器		
138	G-13	円形	不正形		74	71	45	40	N-16°-W	23		土器・黒耀石片4g	前末	
139	D-3・4	楕円形	盤		105	93	57	53	N-86°-W	65		土器・黒耀石片6g	前末	
140	D-3・4	楕円形	盤		147	132	80	77	N-81°-W	75		土器・打斧2・打斧片2・黒耀石片35g	前末	
141	G-14	楕円形	皿		150	137	115	92	N-53°-W	53		土器・打斧片1・黒耀石片21g	前末	
143	C-4	円形	盤		107	104	83	78	N-14°-W	59	144土	黒耀石片14g		
144	C-4	円形	皿		132	127	95	90	N-58°-W	28	143土	土器・黒耀石片4g	前末	
145	C-4	楕円形	皿		100	89	82	76	N-85°-W	19		土器・黒耀石片43g	前末	
146	D-4	不正形	盤		108	104	70	63	N-66°-W	43				
147	C-4	楕円形	盤		105	94	(87)	70	N-26°-E	23	73土	土器・打斧1・黒耀石片50g	前末	
148	C-4	円形	皿		100	95	68	62	N-80°-W	25		土器	前末	
149	C・D-3	円形	盤		84	78	51	49	N-18°-E	62		土器	前末	
151	C-3	楕円形	ピット		69	62	50	46	N-75°-W	63		土器	前末	
152	D-3	隅丸方形	盤		147	128	114	98	N-24°-W	54		土器・黒耀石製石鏃1・黒耀石片22g	前末	

縄文時代土坑一覧表

土坑番号	検出位置	平面形	断面形	土層状態	上端規模		下端規模		長軸方向	深さ(cm)	重複関係	出土遺物	時期	備考
					長軸	短軸	長軸	短軸						
153	C-4	隅丸方形	盤		127	114	80	65	N-30° -W	52		土器	前末	
154	C-3	隅丸方形	盤		145	122	103	83	N-61° -E	80		土器・黒耀石製石鏃1・黒耀石製未製品2・黒耀石片116g	前末～中初	
155	C-3	円形	盤		90	87	65	60	N-17° -W	34		土器・黒耀石片9g	前末	
156	D-3	円形	盤		(137)	133	64	63	N-90° -W	69	164土	土器・打斧2・打斧片2・黒耀石片42g	前末	
157	C-2	楕円形	盤		242	177	160	100	N-25° -E	93		土器	前末？	
158	C・D-5	楕円形	皿		(178)	130	128	110	N-55° -E		159土	土器・土製円盤1・打斧片1・凹石1・黒耀石片	前末	
159	C・D-5	不正形	不正形	三角堆土	(163)	127	(78)	35	N-40° -E	45	158土	土器・凹石1・黒耀石片18g	前末	焼土
160	D-3	円形	盤		108	105	76	68	N-22° -W	67				
161	D-3	楕円形	盤		158	(128)	87	73	N-16° -E	41	焼土址1			
162	D-3	円形	盤		98	97	59	47	N- 7° -W	62			前末	
163	D-3	楕円形	盤		125	113	94	81	N-39° -W	48				
164	D-3	楕円形	盤		(148)	(126)	(97)	(78)	N- 0° -W	53	156土			
165	D-3・4	円形	盤		107	102	57	50	N-27° -W	41				
166	D-3・4	円形	皿		85	81	57	56	N- 0° -W	29				
167	D-4	楕円形	皿		165	107	84	55	N-21° -E	31	168土			
168	D-4	楕円形	皿		142	126	95	88	N-19° -E	32	167土			
169	D-4	楕円形	盤		92	83	66	62	N-69° -E	37				
170	D-4	円形	皿		91	86	65	57	N-20° -W	23				
171	D-4	円形	盤		90	84	57	45	N-18° -E	34				
172	D-4	隅丸長方	皿		143	(112)	117	93	N-24° -W		75土	土器・土製円盤1・凹石2	前末	
173	C-4	楕円形	皿		84	75	72	66	N-20° -W	20				
174	C-4	楕円形	盤		122	96	96	80	N-16° -E	40				
175	C-4	楕円形	盤		91	75	70	60	N- 9° -W	35				
176	C-4	円形	皿		90	82	64	55	N-53° -W	20				
177	D-4	円形	皿		102	96	88	69	N-35° -W	45				
179	C-4	楕円形	盤		114	96	85	57	N-37° -W	40	60土			
180	C-3	楕円形	盤		270	162	(193)	95	N-33° -W	105		土器・黒耀石片15g	前末	
181	C-2・3	隅丸長方	盤		202	170	116	90	N-76° -W	117		土器	前末	
182	C-3	円形	盤		110	103	80	62	N-40° -W	42				
183	C-3	円形	盤		102	95	72	61	N-44° -W	41				
184	H-15				85	75	58	54	N- 5° -E		100土東	土器	前末	
185	D-4・5	楕円形	盤		(156)	133	123	98	N-39° -E		57土	土器・チャート製石鏃未製品	前末	
186	E-16	楕円形	盤	三角堆土	110	97	100	95	N- 5° -E	39				
187	H-15				112	78	100	65	N- 4° -E	34	105土			
188	H-15	楕円形	皿		128	87	68	65	N-12° -W	30	117土			
189	H-15	不正形	不正形		70	70	48	26	N-61° -E		焼土址7			
190		楕円形	盤								11・27土			
焼土址 1	D-3	円形	盤	単一	99	98	82	79	N-66° -W	40		土器・黒耀石片10g	前末	焼土
焼土址 3	D-3	円形	盤	単一						38		土器・黒耀石片18g	前末	焼土
焼土址 4	C-4									10				
焼土址 5	E-5	円形	盤		97	89	75	68	N- 3° -E	71		土器・打製石斧片1・黒耀石片15g	前末	焼土
焼土址 6	E-5	円形	盤	単一	77	70	63	61	N-29° -E	20		土器・打製石斧片1	前末	焼土
焼土址 7	H-15	不正形	皿		(140)	80	121	65	N-31° -W		189土			焼土

第2節　平安時代の遺構と遺物

1．竪穴住居址

今回発掘された平安時代の竪穴住居址は5軒確認され、2・3・17号住居址は近接して立地しているが、6・18号は散在している。そのうち住居址平面形が確認できたのは半分の3軒にすぎない。

第２号住居址(第39・40図・図版7-1・2)

検出状況　遺跡のほぼ中央部の高台にあり、グリッドF・G-9に位置する。遺構のすぐ北側に17・3号住居址がある。17号住居址は非常に近くにあるが、平面形不明のため、本址と重複関係があったかどうかはわからない。遺構の遺存状況は比較的良好であるが、周辺の土が褐色土であるため、壁面の確定が難しかった。

住居址中には礫が非常に多く検出され地山に非常に多くの礫があるほか、覆土中にも後世の山崩れと思われる多くの礫が混入している。軸線方向はN－73°－Eで、長軸5.60m、短軸4.84mの平面が隅丸長方形である。

遺構の構造　Ⅰ層からⅢ層にかけて、焼土粒子を多く含み、部分的に焼土が固まって検出される場所がある。特に焼土が濃厚に検出される場所は、住居址の東側から南側の一部にかけてである。焼土の厚さはほぼ5cmほどでかなり厚い。焼土が住居址全面に亘って検出されないため、住居址廃棄後に何かを集中的に燃やしたのではないかと思われる。

壁の立ち上がりは北壁40cm、南壁50cm、東壁56cm、西壁46cmである。北・東壁は比較的直角に立ち上がるが、南・西壁は緩やかに外側に広がってしまい、よくわからない。遺物の垂直分布を見ると、遺構の掘り方は80cm下の礫が多く出る地山と考えられるが、生活面は1から3層中と見られる。つまり、かなり深く掘られているが、礫だらけなので埋めて生活していたと思われる。明確な周溝は確認できなかったが北東隅に部分的に確認できており、周溝があったことがわかる。

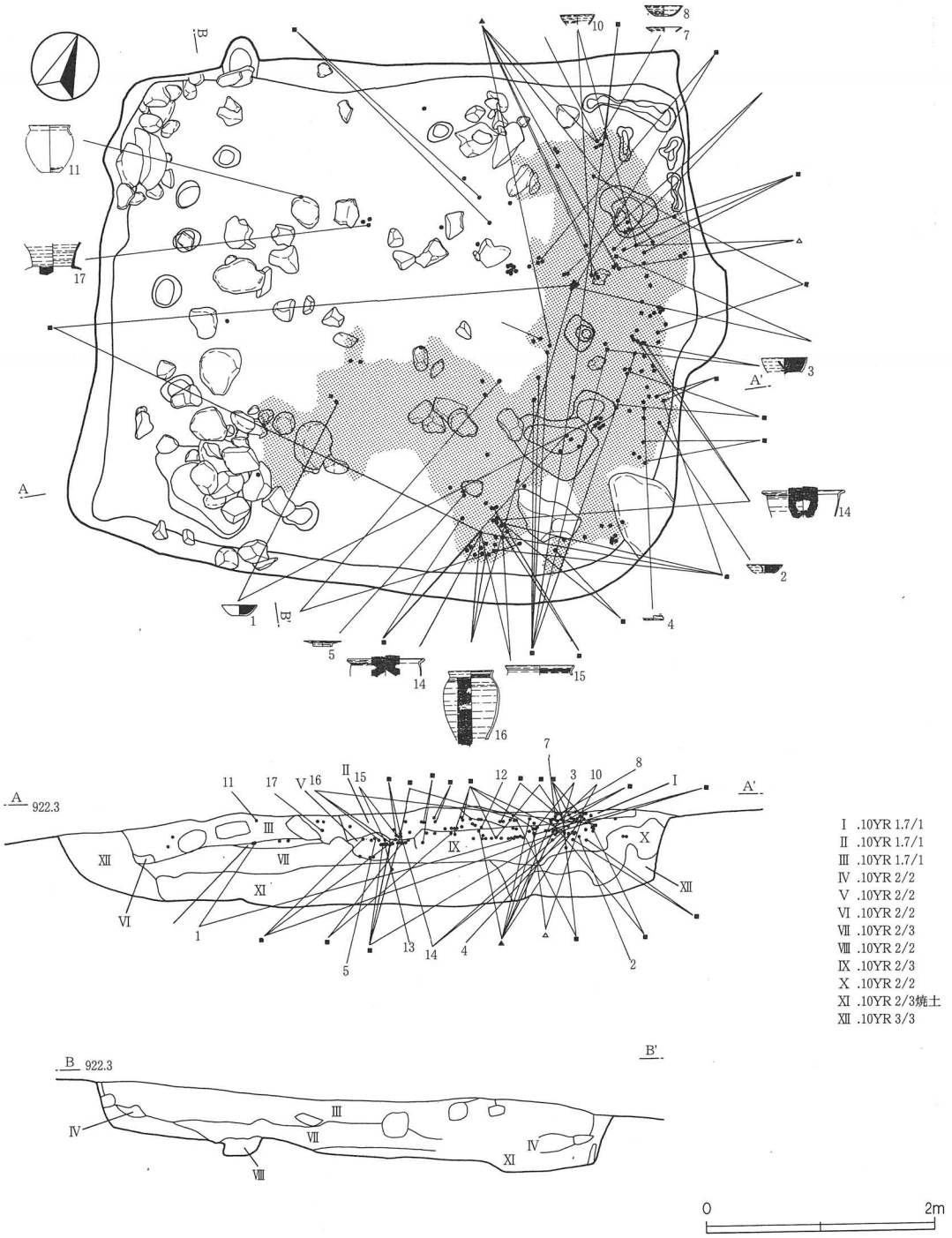
ピットは12基検出されている。深さはP1 38cm、P2 17cm、P5 22cm、P6 26cm、P7 13cm、P8 14cm、P9 25cm、P10 30cm、P12 14cmであり、このうち柱穴に係わるのはP1・P2・P3・P4・P5・P6・P8・P9・P10・P11で、主柱穴は不明である。P1は北壁を切っており、この場所は上屋の構造に変化があったと考えられる。P10は平面形が正方形で他の土坑との形状が異なっており、異なる性格のピットであると思われる。

カマドの位置は不確定で、東側ほぼ中央部に粘土と思われる白色土が微量ながら検出され、遺物も集中して出土することから、カマドの跡と思われる。掘り込みなどはわからなかった。

遺物の出土状況　前述したとおり遺物のほとんどはⅠからⅢ層中に含まれており、Ⅶ・Ⅷ・Ⅸ層中からはほとんど出土していない。平面分布は住居址の東側に偏って出土し、焼土の広がる範囲とほぼ一致している。カマドの周辺からは煮沸に使用したと思われる甕の破片が多く出土しており、坏類はやや離れた場所から出土する傾向がある。しかし、墨書土器はカマド付近から検出されている。ほとんど平安時代の遺物であるが、縄文時代前期末葉の土器や、黒耀石が混入している。

遺物は破片で土師器坏3g・黒色土器坏303g・黒色土器皿1個体161g・青灰色の須恵器坏19g・白色の須恵器坏186g・須恵器蓋撮部1点35g・土師器小型甕片114g・土師器長胴甕片3,615g・須恵器壺235gが出土している。図示できたのは第40図の17点である。坏では黒色土器と須恵器の比率が高い。土師器甕は多く、30個の口縁部が確認されているが、このうち同一個体の物が数個体含まれると思われる。土師器甕の大部分は櫛目があるものだが、11・15のように櫛目がないものも含まれる。

遺構の時期　出土遺物より9世紀後半と考えられる。

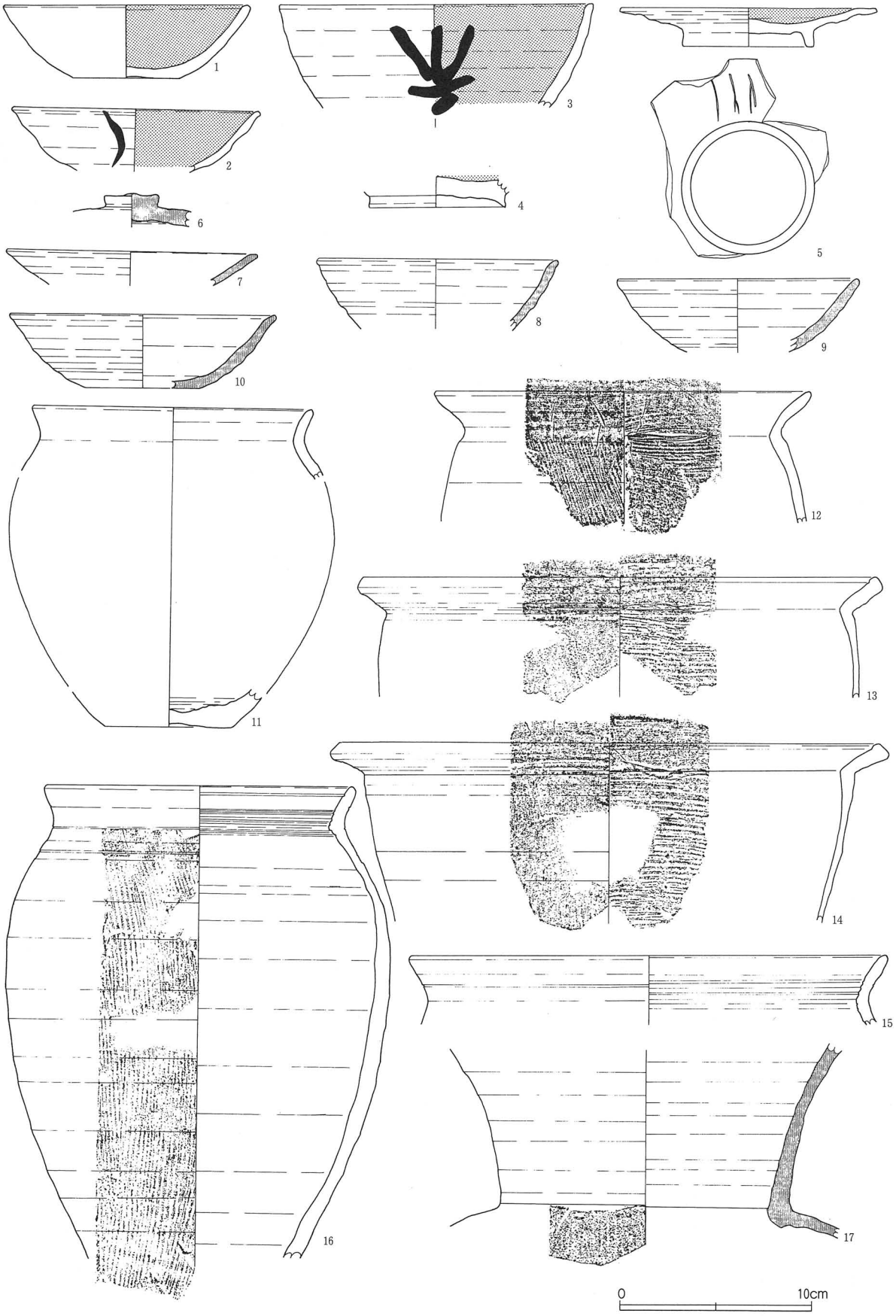


第39図　2号住居址

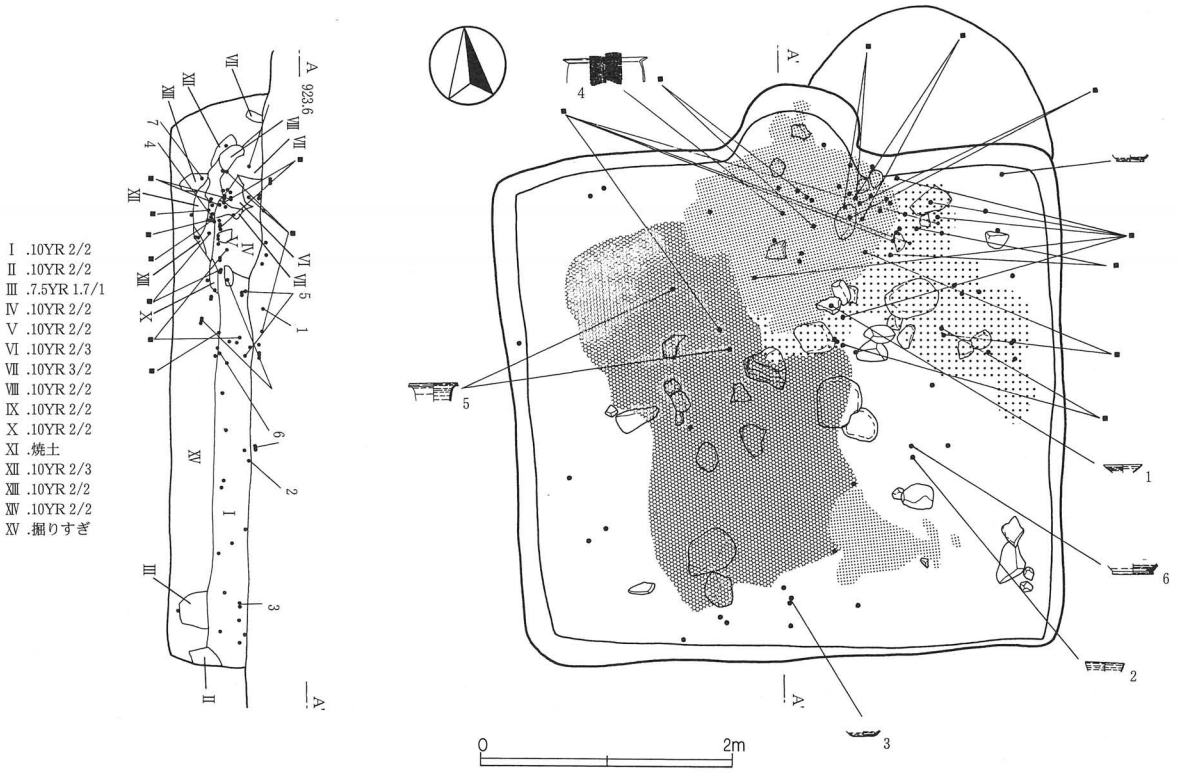
第３号住居址（第41・42図・図版7-3・4）

検出状況　遺跡のほぼ中央部の高台にあり、グリッドG－7に位置する。遺構の東側に17・2号住居址がある。平面形は周辺が褐色土ながら明確に判明した。軸線方向はN－4°－Eを示し、長軸3.96m、短軸4.40mのほぼ隅丸正方形の平面形を呈する。本住居址は北側の78号土坑を切って構築している。

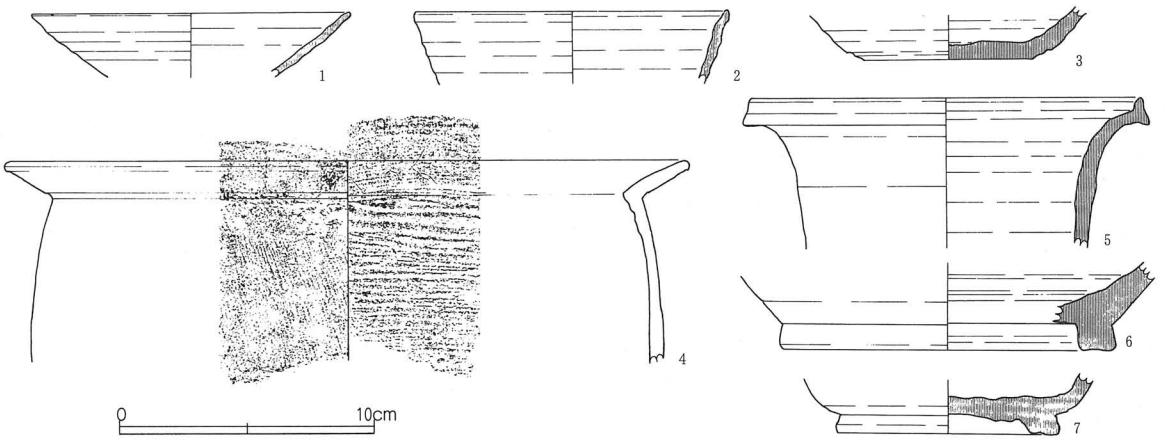
遺構の構造　遺構はかなり深く掘られており、北壁76㎝・南壁62㎝であり、垂直に立ち上がっている。確認面より40㎝下のⅨ層上面のⅡはかなり堅く締まっており、生活していた床面と考えられる。これは遺物の垂直



第40図　2号住居址出土遺物



第41図　3号住居址



第42図　3号住居址出土遺物

直分布からもわかるが、Ⅸ層中よりの遺物の出土が少ないことからも言える。また、遺構内に平板な礫が多くみられるが、この堅く締まっている面の直上にあるものが多い。覆土中にある礫も多い。断面図ではⅡ層が周溝と考えられるが、平面では捉えることができなかった。柱穴については明確なものがなく、断面図のⅢ層がピットの可能性があるが、平面形は不明である。

カマドについては、住居址の北側中央に12cmの厚みをもった焼土址をもつカマド跡が検出された。カマドの石組みは完全に解体されており、袖石などは住居址の中央部に廃棄されたと思われる。焼土上には黄白色の土が被さっており、カマドの側面と上面に貼られた土が石組みを解体したときに付近に廃棄されたものであると考えられる。このカマドは一種の石組み粘土カマドであると思われる。カマドは生活面より20cm下側へ掘り込み、火焼部を作っている。また、北側中央部の壁面を22cm北側へ掘り込み、カマド後部から直接外へ煙道を設けていたと思われる。カマドの後部に直径13cm、深さ20cmの穴が焼土下より検出された。カマド

に関わる何らかの構造物と思われる。

また、上述のカマド以外に南側やや東寄りと東側に焼土址があるため、古いカマドがこの位置にあった可能性があり、180°カマドの位置を移動した時期があることがわかる。

遺物の出土状況　遺物はⅠ層とカマド周辺から出ており、生活面下のⅨ層中からはほとんど出土が見られない。土師器甕は2号住居址同様カマド付近から検出される傾向にある。その他の遺物はその周辺に位置していることが多い。垂直分布を見ると、住居址の床面から覆土上部まで遺物は散布している。住居址を廃棄するときに、埋め戻しでも行ったのであろうか。遺物は破片で黒色土器坏12g・黒色土器皿1個体・青灰色の須恵器坏41g・白色の須恵器坏32g・土師器小型甕片203g・土師器甕片965g・須恵器壺311gが出土している。図示できたのは第42図の7点である。土師器坏の破片は見られず、須恵器坏がこの住居址の坏の主体と思われる。2号住居址と同様、土師器甕の比率が高い。

遺構の時期　遺物から9世紀後半と考えられる。

第６号住居址（第43・44図・図版7-5・6）

検出状況　桧沢川の河岸段丘上の南斜面にあり、グリッドH－17・18に位置する。付近には18号住居址がある。住居址西側に98号土坑があるが、周溝が検出されているため、住居址と切り合ってはいないと思われる。住居址の範囲が周溝までと考えると、平面形は隅丸正方形で、若干カマドのあるところが張り出している形になっている。軸線方向はN－8°－Eを示し、長軸4.12m・短軸3.92mである。

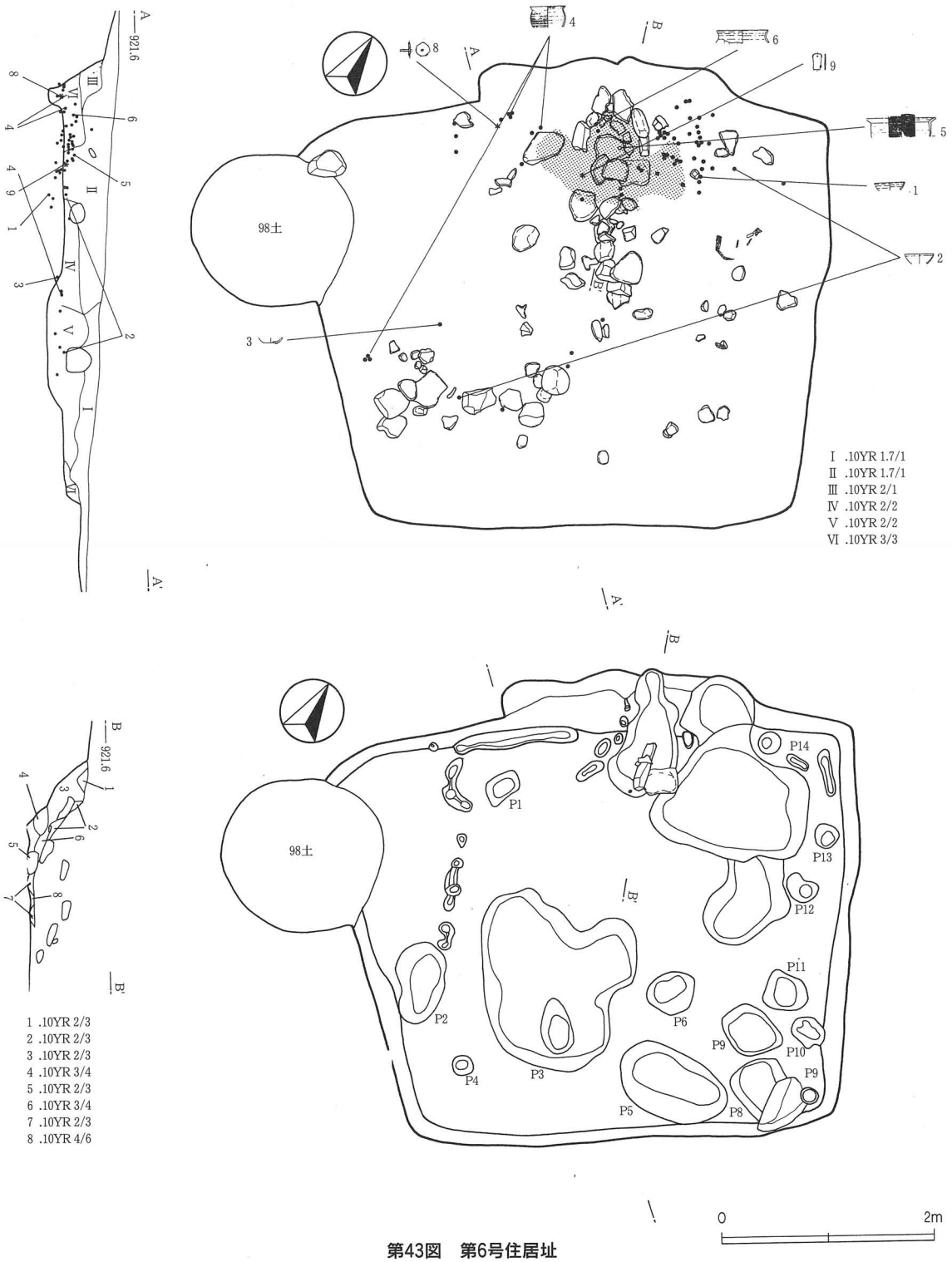
遺構の構造　住居址は南側に傾斜している斜面に立地しているため、南壁の遺存状況はあまり良くなかった。西壁は褐色土中であったので壁がわからず98号土坑まで続いてしまった。遺存状居の良かった北壁は56㎝であった。周溝はカマド周辺と西側で確認できたが、南東側では確認できなかった。北壁はカマド周辺で20㎝の奥行きで、80㎝の幅で張り出している。

カマドは北側ほぼ中央部に位置し、袖石の遺存状況は良好であった。カマド前面が焚口として広く開いており、北壁で窄まっている。この窄まっている所に2枚の平板な石を直立させて設置して、煙道を作り出している。カマドの上部ははずれて平板な石が3枚カマド内に落ちていた。カマドの前面には30㎝大の礫が並んで検出されているが、カマドに関わる石かどうかは不明である。カマド内部の焼土は80㎝の範囲で広がり、厚さは6㎝だった。カマド周辺の他に、平板な礫が住居址南側の隅に列状に並んでいる。カマドと直角に並んでいるため、カマドと何らかの関係を持った遺構ではないかと考えられる。また、カマドの東側には不整形な穴が検出され、中より遺物が若干出土している。灰などは確認できなかったが灰掻き穴の一種であろうか。

住居址床面には不正形な土坑が多く掘られている。この中で柱穴と思われる土坑はP1・P4・P7・P10・P11・P12・P13・P14と考えられるが、主柱穴と思われるものは明確ではない。

遺物の出土状況　遺物は床上から出土しているものが下限で、カマド周辺からの出土量が多い。カマド内部からは土師器甕の破片が出土している。遺物は破片で土師器坏片203g・黒色土器坏10g・黒色土器皿1個体・表面が赤色の須恵器坏22g・土師器小型甕片130g・土師器甕片904g・須恵器壺片50gが出土している。図示できたのは第44図の6点である。須恵器坏の検出は見られず、坏は土師器が中心である。本住居址内からは土師器の他に、3点の金属製品が出土している。1点は鉸具で住居址の覆土上層で出土している。紡錘車と鉄板はカマドの西脇の周溝内から検出されている。住居址内の東側から炭化材が出土しているが、建築の部材かどうかは不明である。

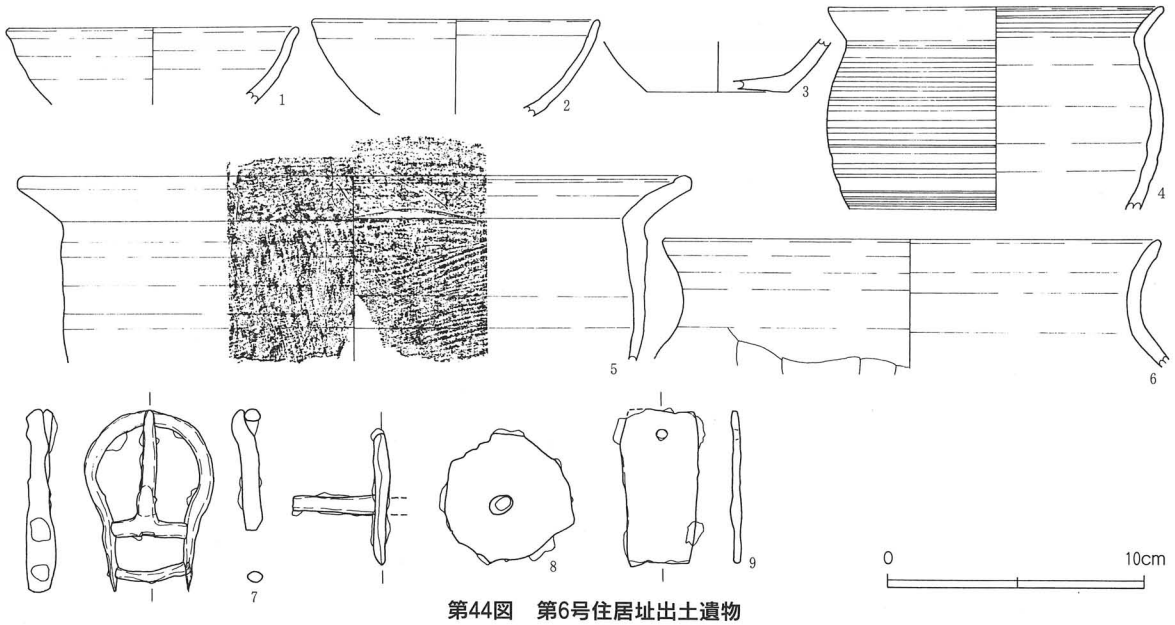
遺構の時期　出土遺物から9世紀後半と考えられる。



第43図　第6号住居址

第17号住居址（第45・46図・図版8-1）

検出状況　遺跡中央部の高台にあり、グリッドG－19に位置する。西方に3号住居址があり、南方に2号住居址がある。遺構が黒色土中に存在していたため、平面形はよくわからず、焼土址の存在によって住居址であることがわかった。住居址内と思われる場所には50㎝を越える石が多く入っており、居住中か居住後、後背山の崩落によって混入した石と思われる。また、焼土北側には1mを越える岩が地山にあり、どのように居住していたかという問題が残る。

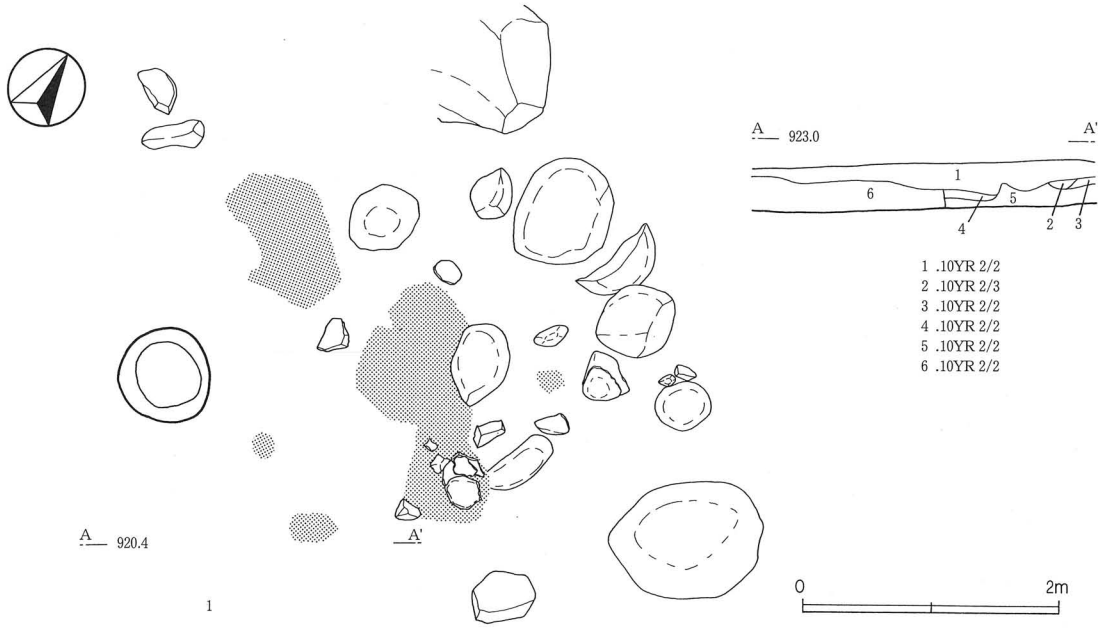


第44図　第6号住居址出土遺物

遺構の構造　遺構の平面形がわからず、柱穴などの検出が見られないため、構造は不明である。焼土の西方にP1が1基あるが、形状から柱穴とも考えられない。P1は口径の長軸74㎝、短軸70㎝、底径超軸52㎝、短軸46㎝のほぼ円形の土坑で、深さは19㎝である。焼土が広い範囲に亘ってあり、10㎝の厚みがある。

遺物の出土状況　遺物は焼土址上部を中心に出土した。量は少ないが焼土下面からの遺物の出土もあった。出土した遺物は、土師器坏片133g・黒色土器片162g・青灰色の須恵器坏片47g・白色の須恵器坏片32g・土師器小型甕片17g・土師器甕片92g・須恵器壺片408gである。このうち図示できたのは第46図の11点である。坏をみると、須恵器の量が少なく、土師器や黒色土器の比率が高くなっている。なお、古墳時代の遺物が含まれており、併せてここに図示した。

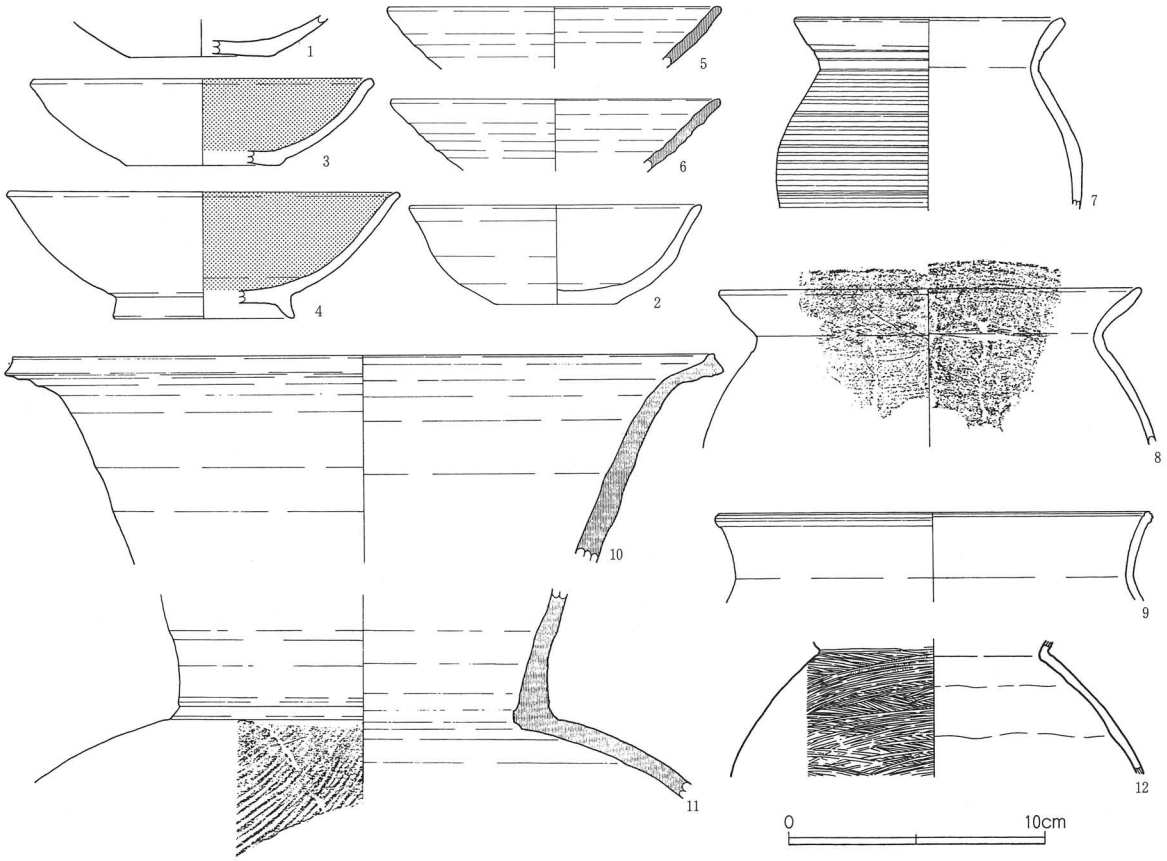
遺構の時期　出土遺物から9世紀後半と考えられる。



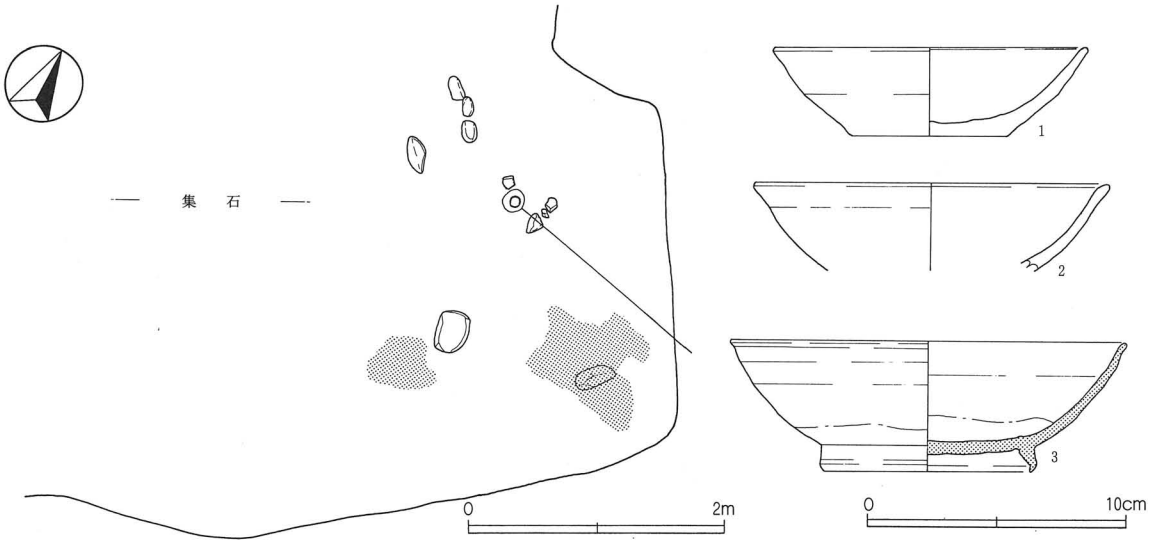
第45図　第17号住居址出土遺物

第18号住居址(第47図・図版8-2)

検出状況　発掘区の最も低いところにあり、桧沢川の河岸段丘上のグリッドF－17に位置する。12号住居址



第46図　第17号住居址出土遺物



第47図　第18号住居址と出土遺物

と重複しており、さらに覆土が黒色土であったため、遺構のプランは不明である。焼土と遺物の存在により、住居址であることが判明した。

遺構の構造　前述の通り遺構のプランがはっきりしないため、全貌は明らかではない。焼土址が2ヶ所、54と90㎝の範囲にわたって検出されている。焼土の厚みはそれぞれ7㎝と8.5㎝である。焼土が近接して2ヶ所出土しているところから、カマドではなく、焼失住居址に伴う焼土ではないかと思われる。

遺物の検出状況　遺物は土師器坏片が201gと最も多く、他に土師器甕片8g・須恵器壺片8g・灰釉陶器碗完形1個体が出土している。灰釉陶器は口縁部を下向きにして出土した。住居址のすべてを発掘したわけではない

ので確定的ではないが、黒色土器坏片と須恵器坏片が見られず、土師器坏片の量が多いことから、坏は土師器を中心としていることがわかる。また、これまで見てきた住居址とは異なり、灰釉陶器碗が出土しているところから、比較的新しい段階の住居址であることが考えられる。

遺構の時期　出土遺物から9世紀後半と考えられる。

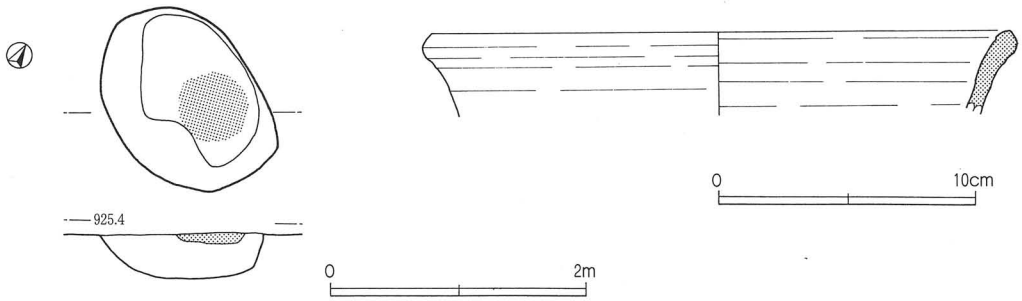
2．土坑

第191号土坑(第48図)

検出状況　桧沢川の河岸段丘上の高台にあり、6号住居址の北方に位置しているが、一段高くなっている。グリッドL－16に位置する。本址は住居址に付属する土坑とも考えられたが、水田の開削によって大分遺構のある面は削平を受けており、土坑とした。

遺構の構造　遺構の遺存が非常に悪かったため、焼土のある土坑のみ検出された。1層は焼土粒子を多く含む。2層は黒色土ではあるが、確認面より34cmの深さで掘られていた。土坑の掘り方はしっかりとしていた。

遺物の出土状況　土坑内からの出土遺物はないが、周辺より土師器坏破片と灰釉陶器の破片が出土している。このうち灰釉陶器を図示した。



第48図　第191号土坑と出土遺物

第Ⅳ章　結語

発掘の結果、本遺跡からは住居址では縄文時代前期終末が10軒・中期中葉狢沢式期1軒・新道式期1軒・後期前半の堀之内式期1軒・平安時代5軒が出土している。主体をなす時期は縄文前期終末と平安時代である。遺物では、縄文時代草創期の有茎尖頭器や、早期の押型文土器、前期前半の諸磯B式期の土器、そして中期中葉の狢沢・新道・藤内期の土器、後期前半堀之内式期の土器・後期後半の加曽利B式期の土器が出土している。遺物から見ると断続的に長い期間、人間の営為が行われていた場所であるといえる。米沢地区にある遺跡は、いずれも何時期にもわたる遺跡が多く、本遺跡も米沢地区にある遺跡の性格を備えた遺跡であるといえる。

前述のとおり本遺跡の主体をなす時期は縄文前期終末と平安時代である。まず前期終末の状況を概観していきたい。まず、前期終末の住居址は遺跡東側と西側の2群に分かれる。住居址の配置は散在的で、2群の中間に位置する1号住居址を除いて、だいたい多くの土坑を住居址周辺に伴っている。東側の5・6・8号住居址周辺には多くの土坑があるが、道路を挟んで南側にある9・12・13号住居址周辺には土坑はあまり見られない。これらの土坑は、土坑の節で見たとおりさまざまな形態があるが、だいたい土坑の覆土の全面から遺物が出土するケースが多い。特に53号土坑で顕著なように、土坑底面からやや浮いた位置に一つの遺物が出土するグループがあり、さらに土坑中央部よりやや上寄りに焼土があり、これに伴って遺物が出土するという、土坑の埋没過程において様々な行為を行っていることがわかる。焼土を出す土坑の共通の形態としてやや深めの土坑であることが言える。そして、焼土は土坑底面より浮いた状態で発見されることが多い。田中総氏が『台御堂』（青木・田中　2000）の中で、土坑内の上層から遺物が出土したり、焼土を伴っていたり、本遺跡の87号土坑や113号土坑のように石を敷き並べた状態の土坑は埋葬した土坑ではないかとの指摘を行っている。やや時期は下がるが、縄文時代中期初頭の『稗田頭C遺跡』(守矢　1994)の中で、守矢昌文氏は土坑に様々な形態があるところから、幅広い用途の「穴」を考えるべきであろうと述べている。本遺跡でも、仮に53号土坑が玦状耳飾りなどの副葬品を伴い、上部で何かを燃やして葬送行為を行った土坑であると考えられる遺構であったとしても、53号土坑とほぼ同じ形状の22号土坑のように土坑全体から遺物が出土し、焼土を伴わず、特別な遺物の出ない土坑も果たして同じ用途であったかという疑問は残る。また、当初から墓壙として作られたかどうかは不明であり、貯蔵穴であったものが墓壙に転用された事例もあるのではないかと思われる。やはり、様々な「穴」の用途を考える必要があろう。

遺物から見ていくと、遺跡の桧沢川をはさんで東側にある駒形遺跡は、黒耀石製品製作址や、黒耀石の搬出口と言われる著名な遺跡であるが、大田苅遺跡でも非常に多くの製品になっていないような黒耀石が出土しており、駒形遺跡と非常に関連性がある遺跡であると言える。しかし、黒耀石の搬出口と言われる遺跡の関連した遺跡でありながら、チャート製の石匙や石鏃、水晶製の石鏃などが検出されると言うのも不思議なことで今後の課題である。また、住居址内から必ず打製石斧や、その欠損品、剥片が出土している。住居址によってかなり保有している住居址とそうではない住居址と分かれる。なぜこのように石斧の保有量にバラつきが出るのかも今後の課題となるだろう。保有量の差で言えば、土器も多かったり少なかったりする遺構があるため、どのような理由で差が出るのか考えていかなければならない。

近年の発掘により、茅野市域において平安時代の集落が多く発見されている。大田苅遺跡も5軒もの住居址が検出されており、いずれも9世紀後半であると考えられる。どの住居址も全体的に遺物の保有量は少なく、

その中でも須恵器坏と土師器甕が目を引く。6号住居址からは紡錘車や鉸具が出土しており、当時の生業を考える上で非常に重要である。米沢地区において平安時代の遺跡はほとんど全てで見られ、9世紀後半という時期が一つの集落を形成する時期となっている。八ヶ岳山麓においては9世紀後半というのは山麓進出の第1回目であり、その後突如として消えて、10世紀後半に再び集落が出現している。霧ヶ峰山麓においても果たして同様の事が言えるかどうかは今後の課題である。

米沢地区は、北側に霧ヶ峰山塊を背にして南向きに開けた地域である。昔から茅野市域内では風があまり吹かない穏やかなところといわれている。また、大清水を始めとして水源は豊富であるため、とても住みやすい場所であると言える。このような場所であるから比較的長期間にわたって集落が営まれた地区であることが予想される。今回は時間がなく充分な考察もできなかったが、今後再整理を行い、近隣の遺跡の資料を付き合わせて再考していきたいと思う。

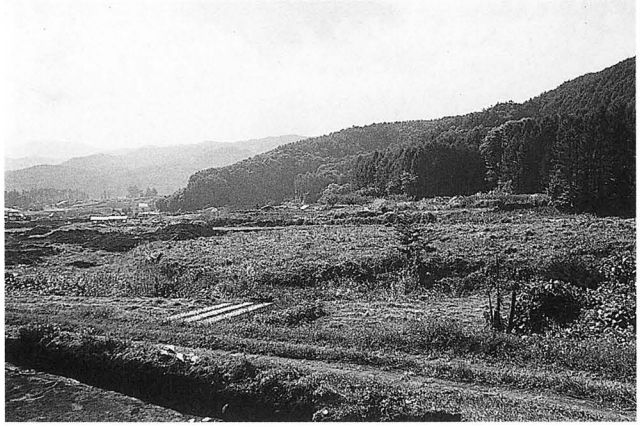
〈参考文献〉

『北大塩地盤字名記載帳』1887　※この史料は三輪辰秋氏の教示による
鳥居龍蔵　1924　『諏訪史　第一巻』　信濃教育会諏訪部会
宮坂英弐　1948　『原住民族の遺蹟　－八ヶ岳山麓尖石遺蹟研究－』　蓼科書房
信濃史料刊行会　1956　『信濃史料　第一巻上　考古資料篇』　信濃史料刊行会
伴信夫　1976　「Ⅲ－6－4)－オ）土壙と出土遺物」　『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書－茅野市・原村その1，富士見町その2－』　日本道路公団名古屋建設局・長野県教育委員会
宮坂虎次　1986　『茅野市史　上巻』　茅野市
小平和夫　1990　「古代の土器」『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書4－松本市内その1－総論編』　長野県埋蔵文化財センター
茅野市教育委員会　1991　『茅野市遺跡台帳』　茅野市教育委員会
山梨考古学協会甲斐型土器研究グループ　1990　『甲斐型土器－その編年と年代』　山梨県考古学協会
赤塩仁・三上徹也　1993　「縄文前期終末における各地の様相　長野県」『第６回縄文セミナー　前期終末の諸様相』　縄文セミナーの会
守矢昌文・柳川英司　1994　『稗田頭Ｃ遺跡』　茅野市教育委員会
功刀司　1996　『北山菖蒲沢Ａ遺跡』　茅野市教育委員会
長野県教育委員会文化財保護課　1997　『大規模開発事業地内遺跡　－遺跡詳細分布調査報告書－』　長野県教育委員会
小林深志　1998　『八幡坂遺跡』　茅野市教育委員会
守矢昌文　1999　『向林遺跡』　茅野市教育委員会
守矢昌文　1999　『牛ノ児遺跡』　茅野市教育委員会
柳川英司　1999　『師岡平遺跡』　茅野市教育委員会
今福利恵　1999　「第2部第2章２　(5)前期後半（諸磯式土器）・(6)前期終末期・(7)中期初頭(五領ヶ台式土器)」　『山梨県史　資料編2　原始・古代2　考古（遺構・遺物）』　山梨県
守矢昌文　2000　『買地遺跡』　茅野市教育委員会
青木正洋・田中総　2000　『台御堂』　諏訪市教育委員会
茅野市教育委員会　2000　『茅野市遺跡台帳』　茅野市教育委員会
原　明芳　2000　「付編：90年代の研究成果と今後の展望　中部」『中近世土器の基礎研究　Ⅳ－平安時代の土器・陶磁器研究』日本中世土器研究会

(1)遺跡遠景(南より)

(2)遺跡全景

図版　2



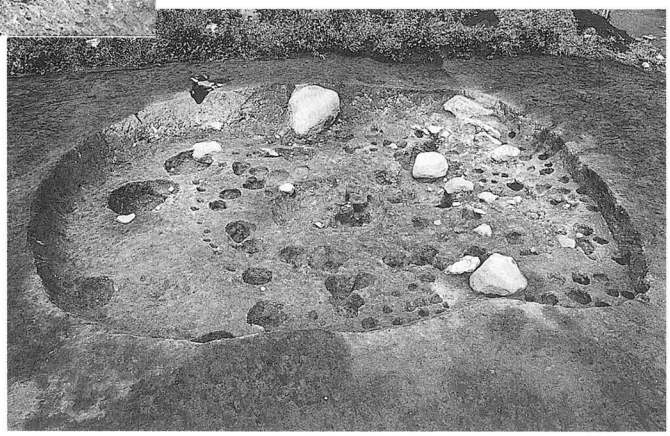
(1)大六殿遺跡より大田苅遺跡をのぞむ

(2)10号土坑ほか(北東より)

(3)5・7・8号住居址(南西より)

(4)6号住居址ほか(北東より)

(5)1号住居址(東より)

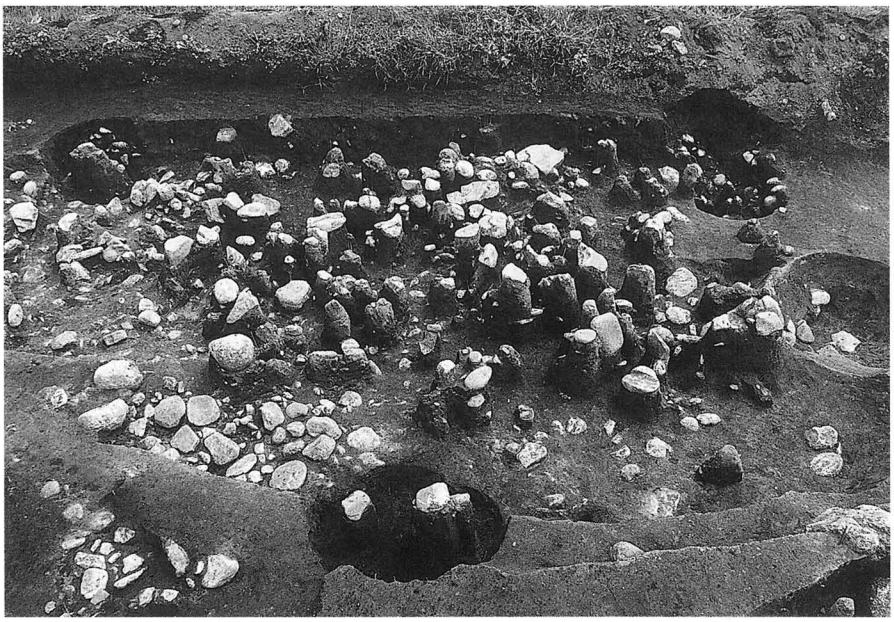


(6)1号住居址(南西より)

(1)4号住居址(北東より)

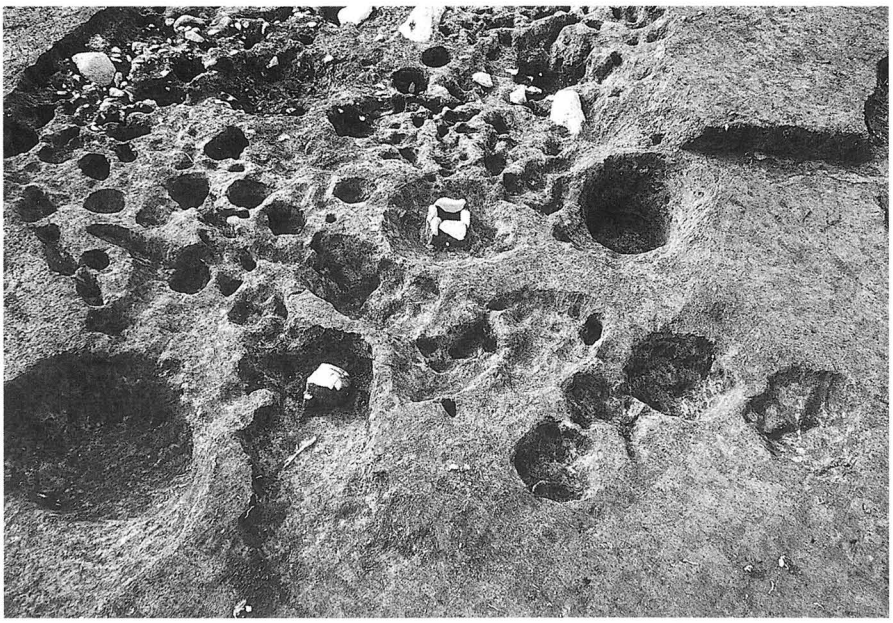
(2)5号住居址(南東より)

(3)7号住居址(東より)

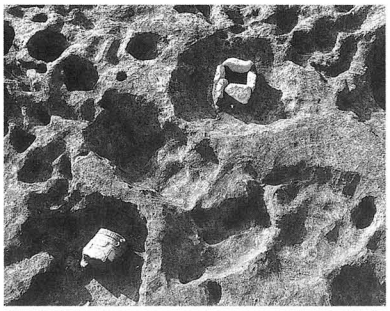


(1)8号住居址(北北西より)

(2)9号住居址(南東より)

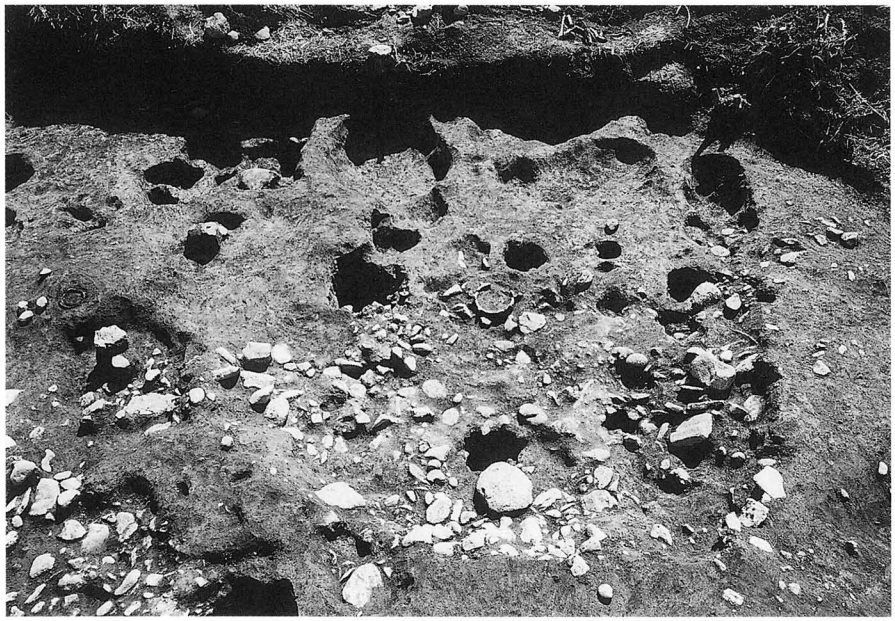


(3)9・14号住居址(南東より)

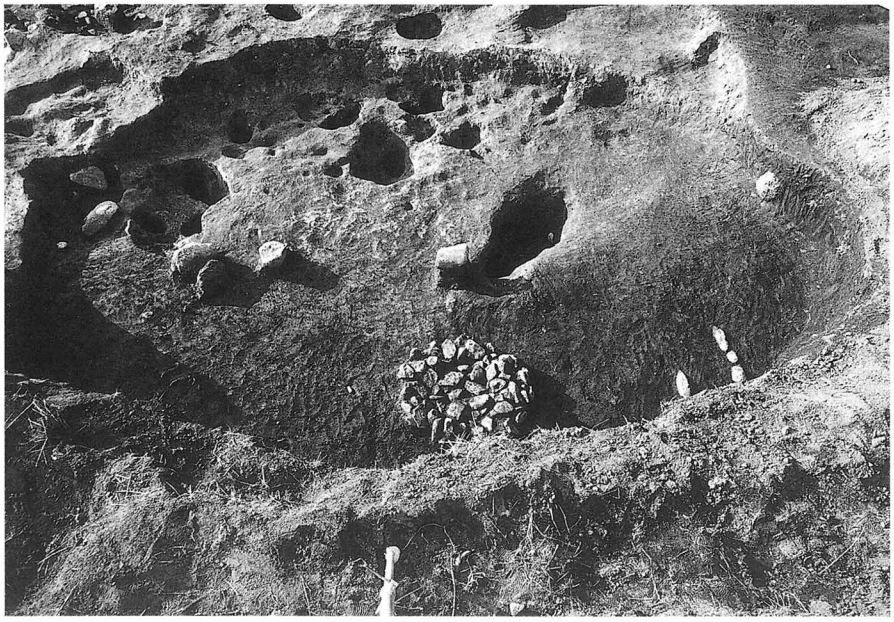


(4)炉と出土遺物(南東より)

(1)10(手前)・11(右奥)・
12号住居址(北西より)



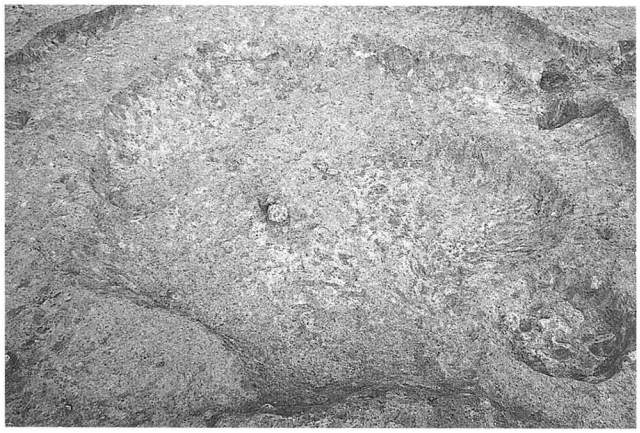
(2)11号住居址(北西より)



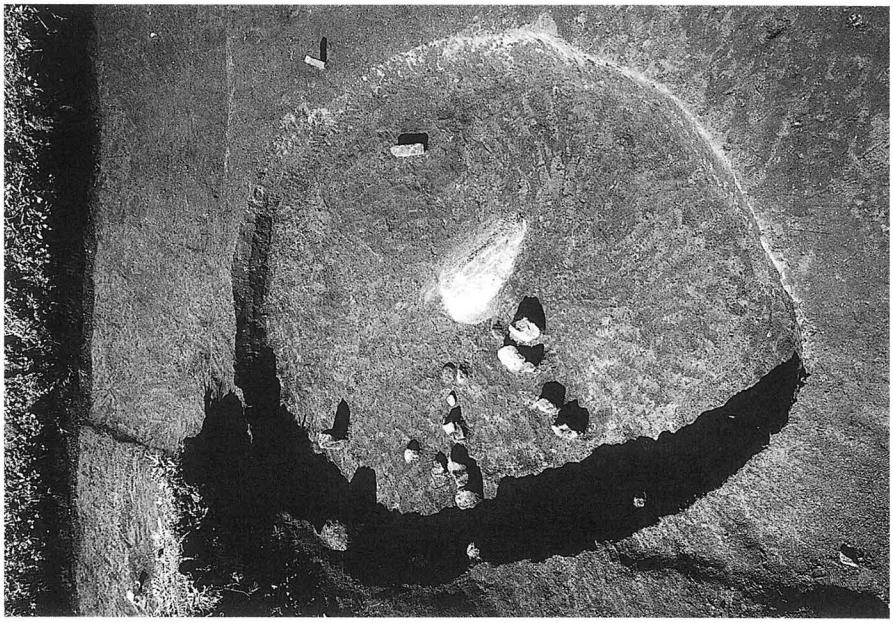
(3)12号住居址・集石(南東より)

図版　6

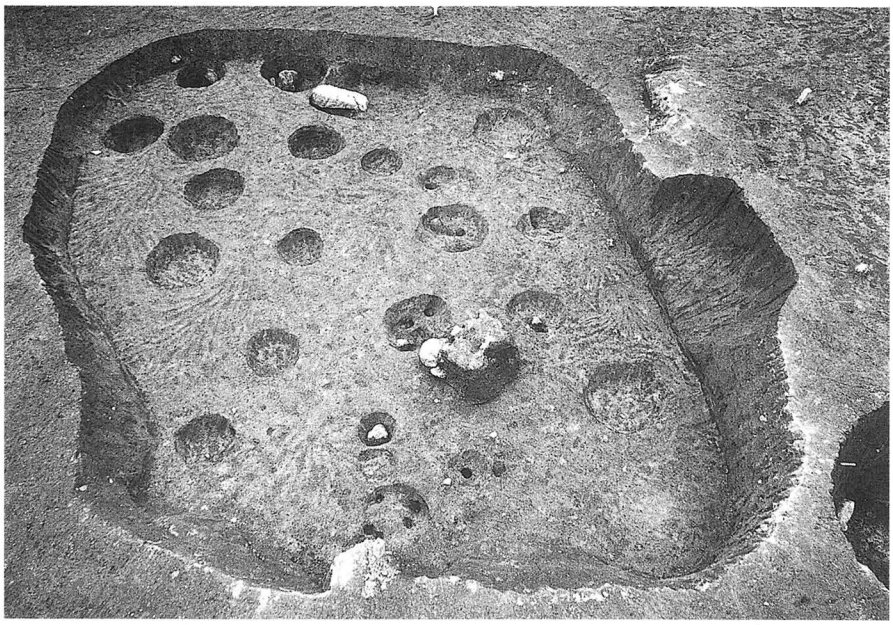
(1)13号住居址(南より)



(2)13号住居址完掘状況(南より)



(3)15号住居址(北西より)

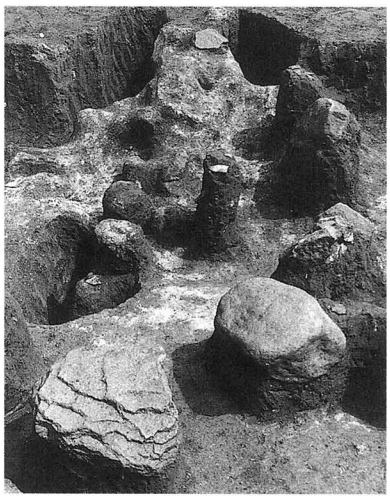


(3)16号住居址(東北東より)

(1)2号住居址(西より)

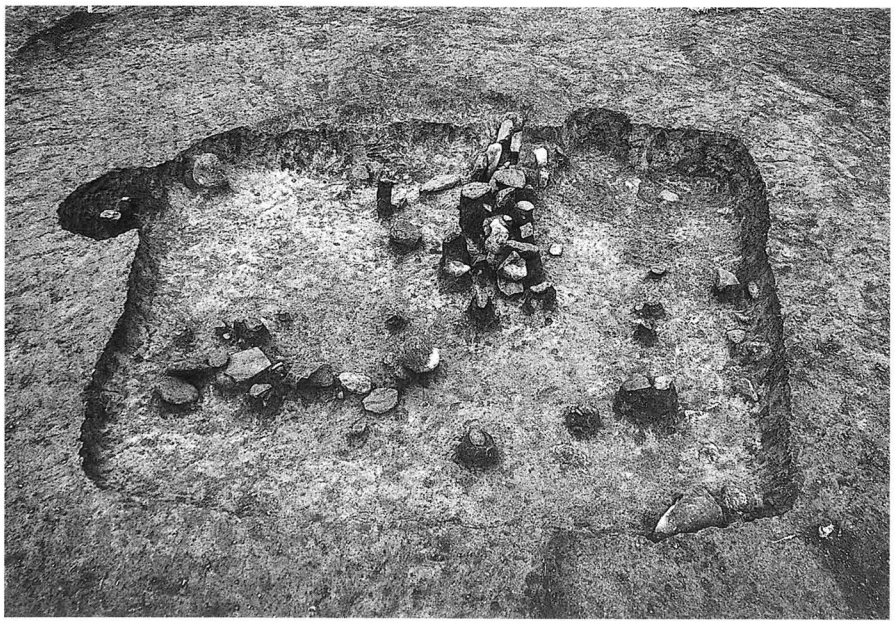
(2)2号住居址完掘状況(東より)

(3)3号住居址(南より)



(4)3号住居址カマド(南より)

(5)6号住居址(南東より)

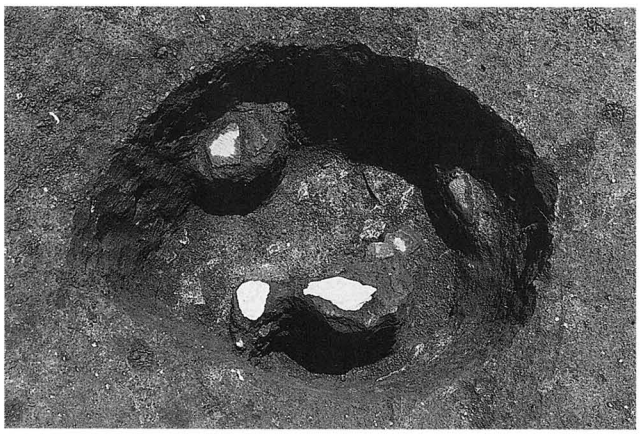


(6)6号住居址カマド(北西より)

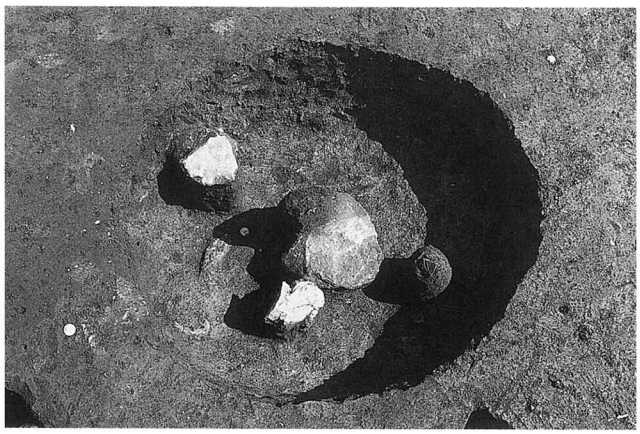
(1)17号住居址(北より)

(2)18号住居址(北より)

(3)集石(南東より)



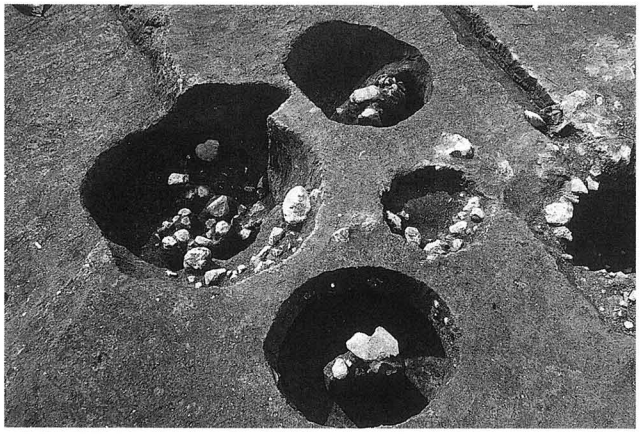
(1)7号土坑(北西より)



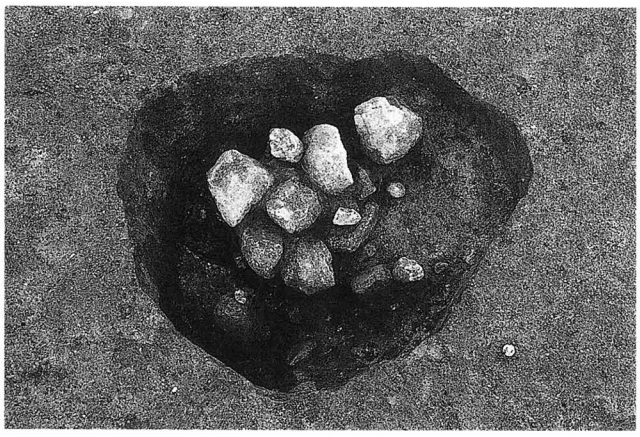
(2)12号土坑(南より)

(3)13(左)・14(中)・49(右)号土坑(西より)

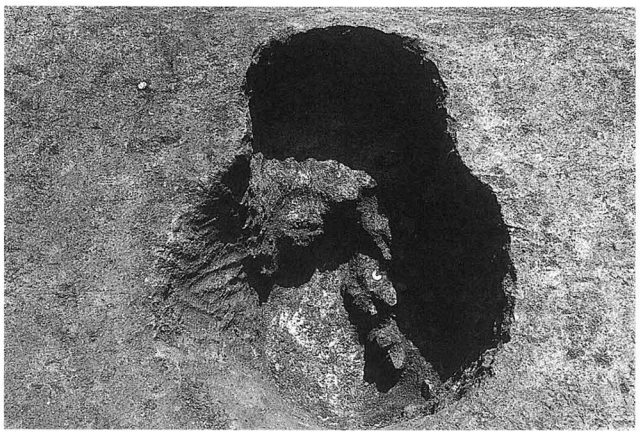
(4)22号土坑(北西より)



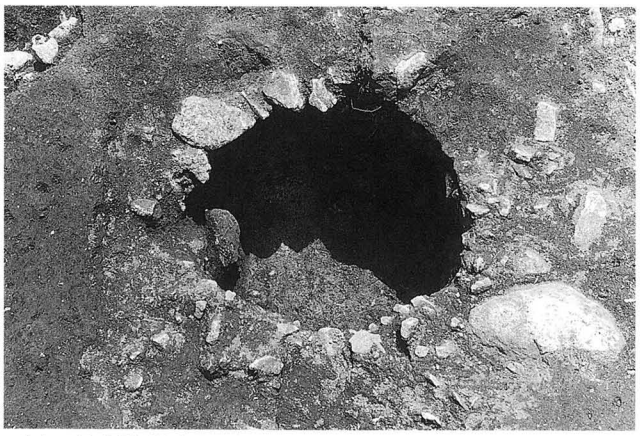
(5)43(右中)・75(上)・174号土坑(東より)



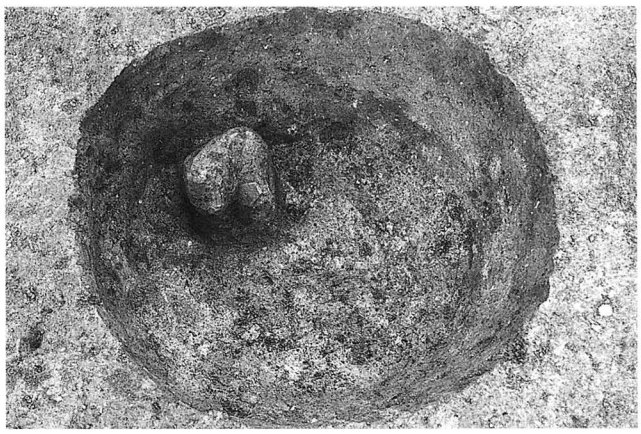
(6)53号土坑(北西より)



(7)53号土坑、玦状耳飾出土状況(北東より)

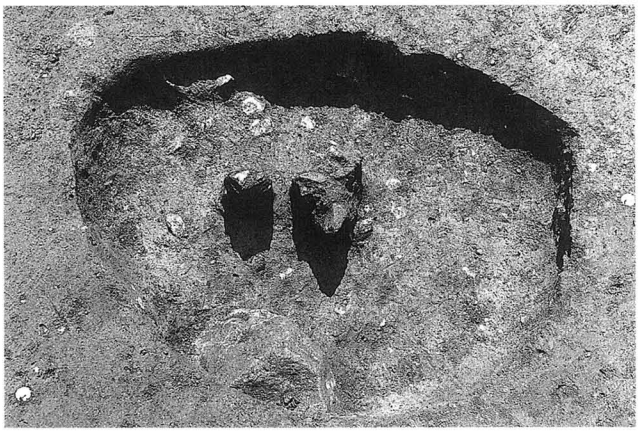


(8)56号土坑(北東より)

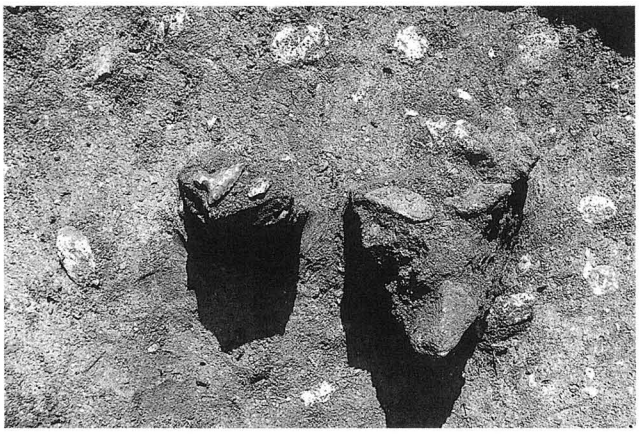


(1)60号土坑(西より)

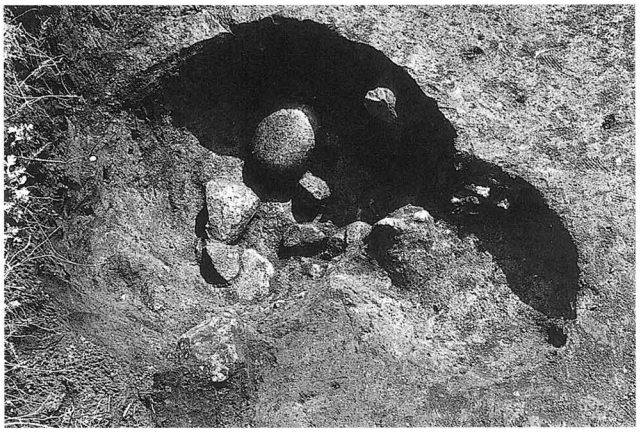
(2)61(左)・63(中)・62(右手前)号土坑(北東より)



(3)66号土坑(西より)



(4)66号土坑石匙出土状況(南西より)

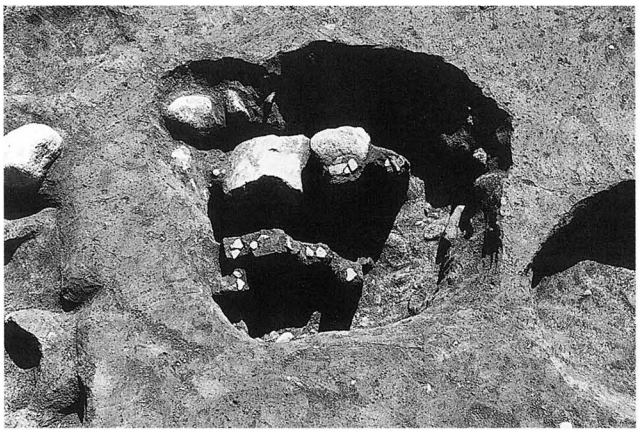


(5)69号土坑(東より)

(6)78号土坑(南より)

(7)78号土坑、黒耀石出土状況(南より)

(8)104号土坑ほか(南東より)



(1)116号土坑(西より)

(2)141号土坑(南西より)

(3)153号土坑(東より)

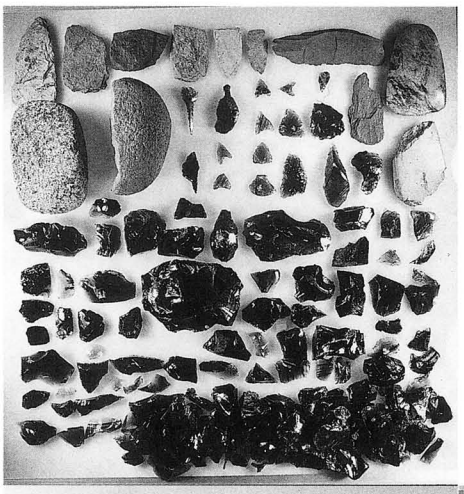
(4)157号土坑(右)・焼土坑2(北より)

(5)焼土坑3(北より)

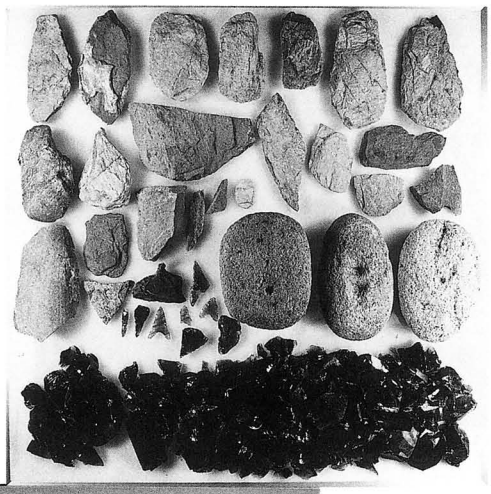
(6)長野県遺跡指導委員会視察

(7)遊学教室

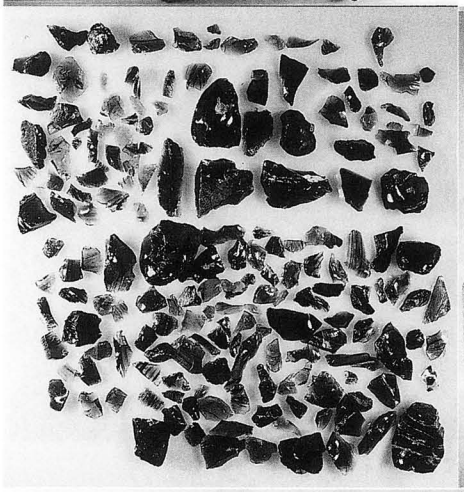
(8)発掘に携わった方々

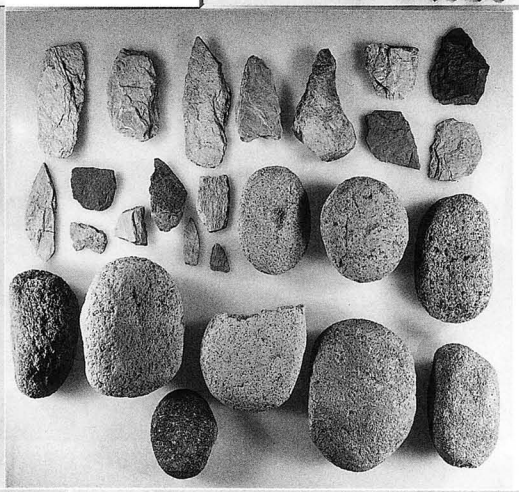


(1)1号住居址
出土石器

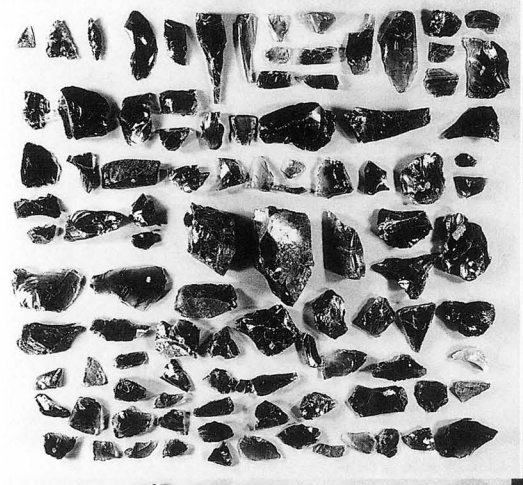


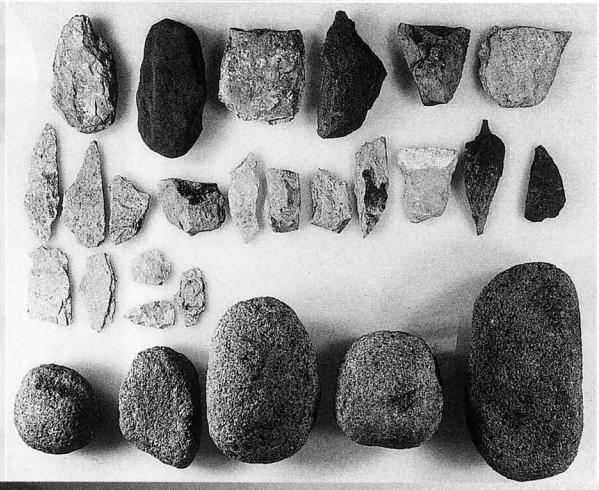
(2)4号住居址
出土石器



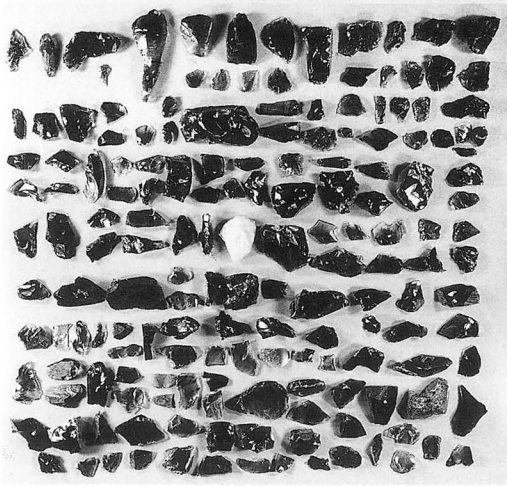


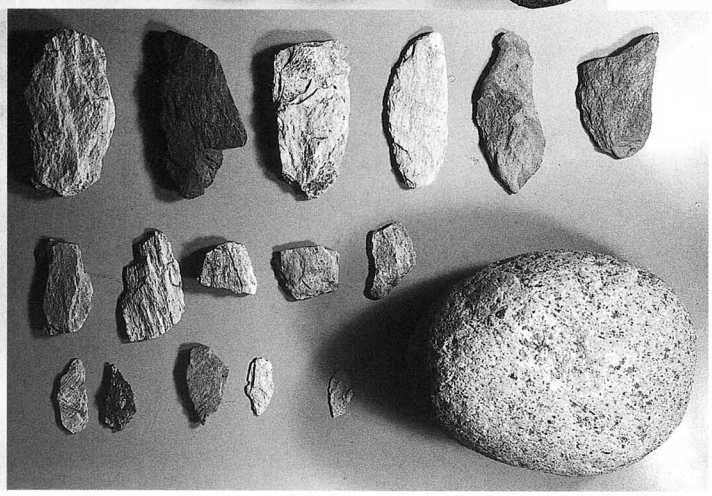
(3)左・(4)
5号住居址出土石器





(5)左・(6)
7号住居址出土石器

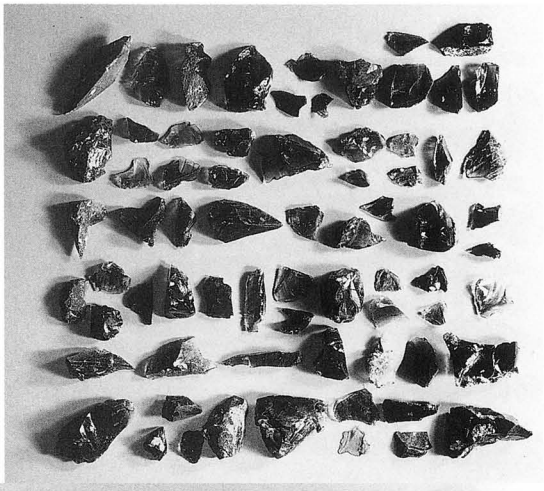




(7)左・(8)8号住居址出土石器

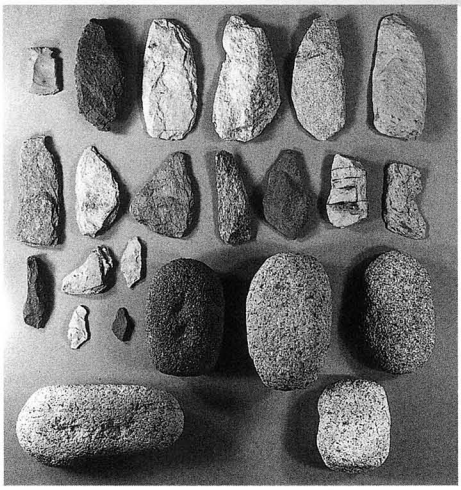
(1)

(2)



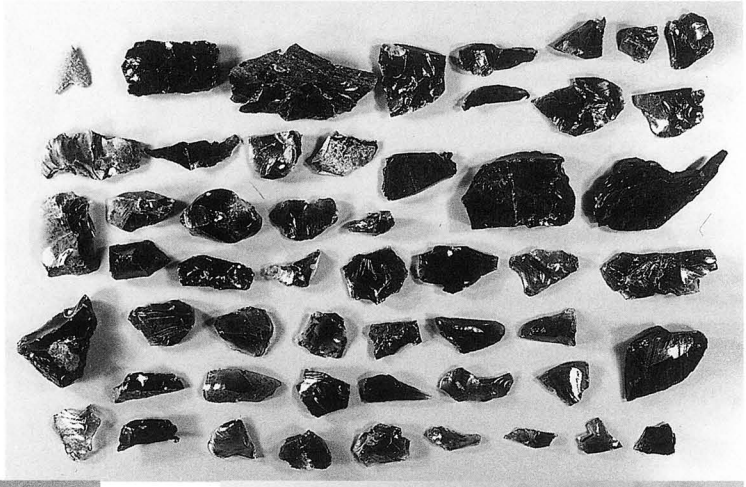
(1)・(2)・(3)
9号住居址
出土石器

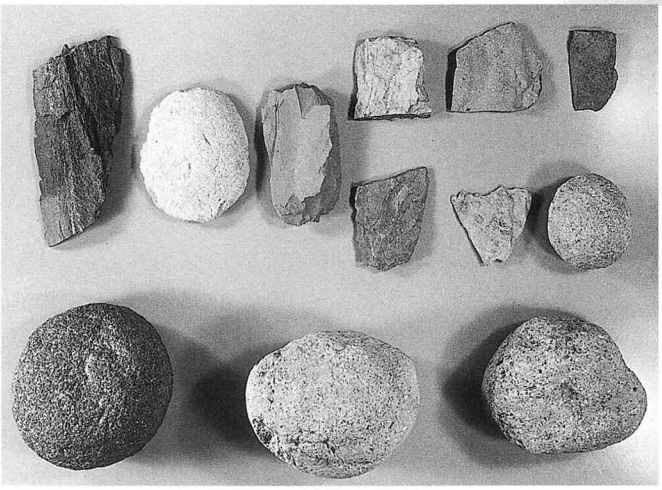
(3)



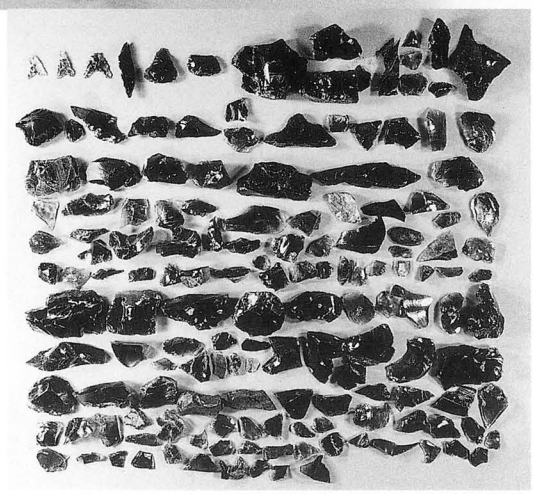
(4)
10号住居址
出土石器

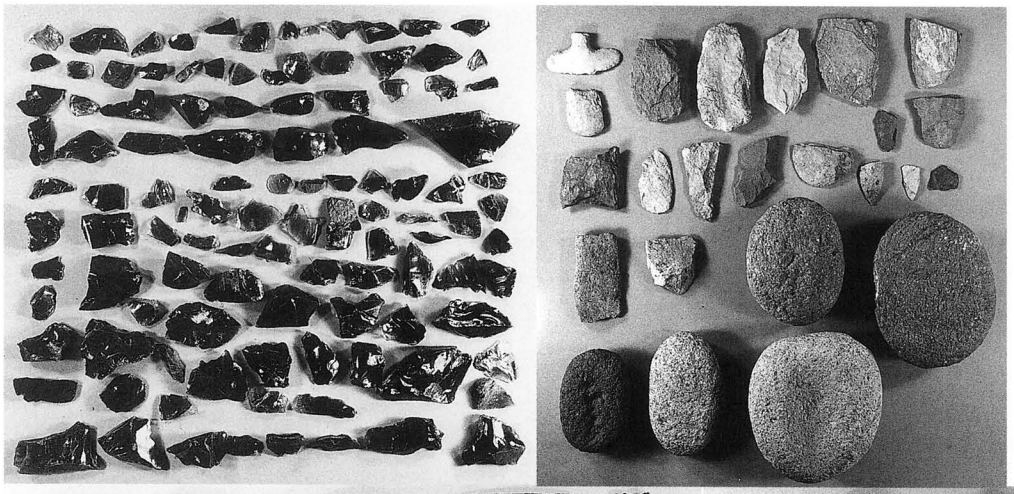
(5)右・(6)下
11号住居址出土石器



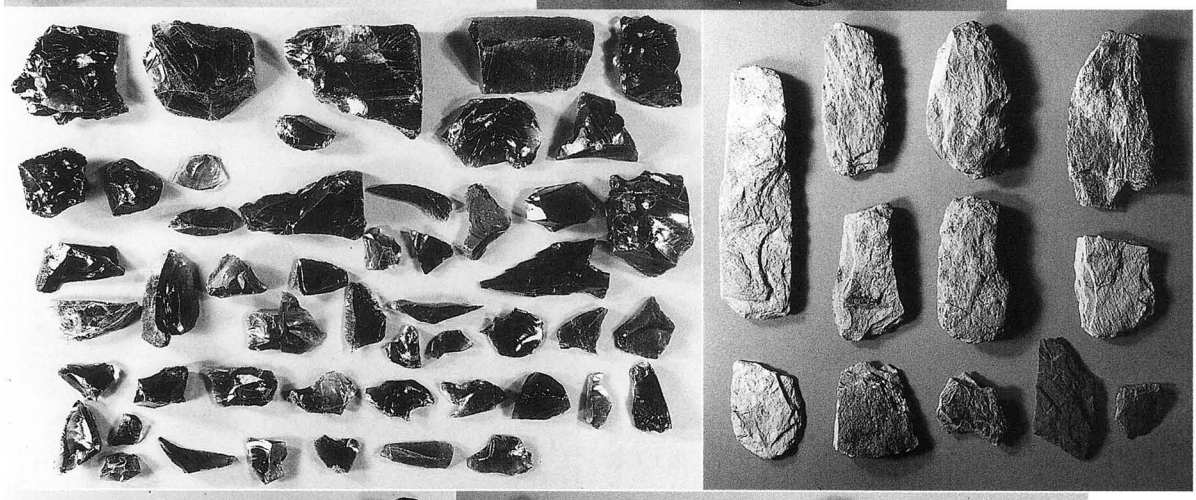


(7)
12号住居址
出土石器

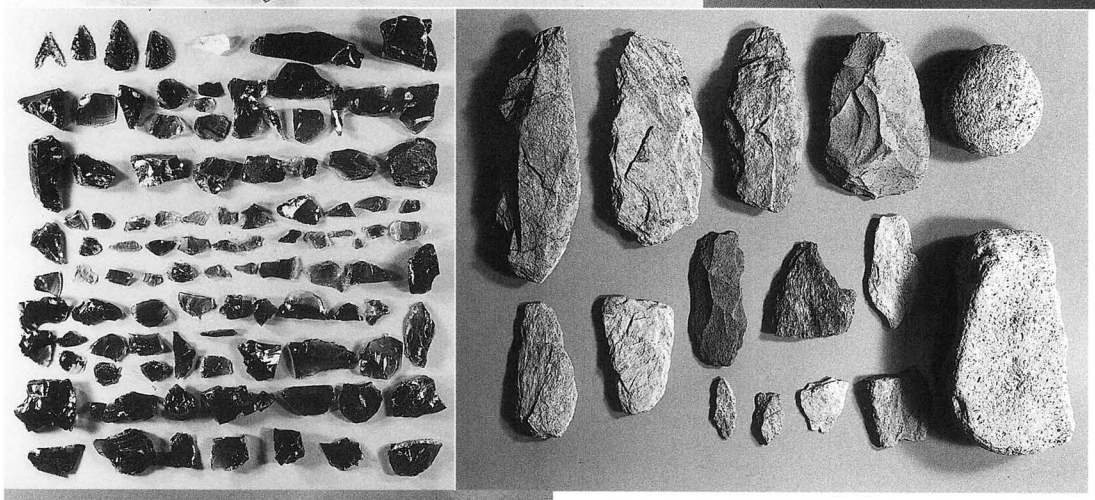




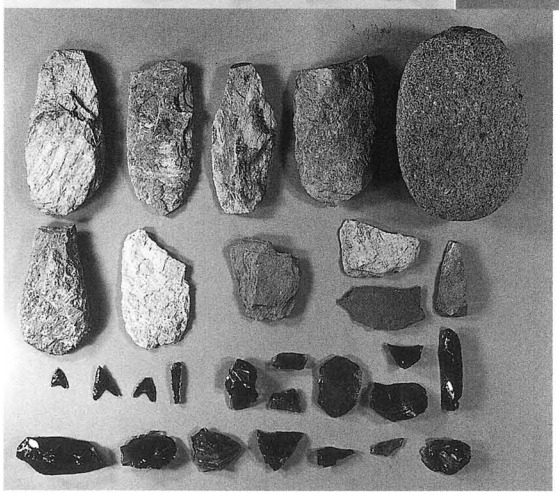
(1)左・(2)
12号住居址出土石器



(3)左・(4)



(5)左・(6)



(7)

(3)・(4)13号住居址出土石器
(5)・(6)15号住居址出土石器
(7)　　16号住居址出土石器

報告書抄録

ふりがな	だいたがり　いせき
書名	大田苅遺跡
副書名	平成11･12年度県営圃場整備事業古田地区に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書
編著者名	柳川英司
編集機関	茅野市教育委員会
所在地	〒391-8701 長野県茅野市塚原二丁目6番1号　TEL 0266-72-2101
発行年月日	西暦2001年3月23日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東緯 °′″	調査期間	調査面積 m²	調査原因
大田苅（だいたがり）	米沢（よねざわ）　北大塩（きたおおしお）	20214	310	36° 02′ 15″	138° 11′ 25″	1999.6.22 ～ 1999.10.15	5,200m²	県営圃場整備事業米沢地区に伴う発掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
大田苅（だいたがり）	集落址	縄文時代 前期終末～中期初頭 中期中葉 後期前半 平安	竪穴住居址9軒 土坑182基 竪穴住居址2軒 竪穴住居址1軒 竪穴住居址5軒 土坑182基	縄文時代 有茎尖頭器 土器・石鏃・打製石斧・磨製石斧 石匙・玦状耳飾 平安時代 土師器坏・甕 須恵器坏・瓶 灰釉陶器碗	・縄文時代前期終末を主体とする集落址 ・平安時代の集落址

大田苅遺跡

――― 平成11・12年度県営圃場整備事業米沢地区に伴う
埋 蔵 文 化 財 緊 急 発 掘 調 査 報 告 書 ―――

平成13年３月19日　印 刷
平成13年３月23日　発 行

編　集　茅野市教育委員会
発　行　茅野市教育委員会
長野県茅野市塚原二丁目６番１号
☎(0266) 72-2101(代)
印　刷　有限会社森仙印刷所
長野県茅野市本町西3-1